

羽咋市内遺跡発掘調査報告

—住宅建設にともなう

吉崎・次場遺跡第16次

発掘調査報告書 —

1998・3

石川県羽咋市教育委員会

羽咋市内遺跡発掘調査報告

—住宅建設にともなう

吉崎・次場遺跡第16次

発掘調査報告書 —

1998・3

石川県羽咋市教育委員会

市内遺跡発掘調査（1998）
吉崎・次場遺跡第16次調査
報告書

目 次

例 言	
I はじめに	1
II 調査の経緯と経過	3
1 過去の調査と経過	3
2 調査の経緯	5
3 調査の経過（日誌抄）	6
III 遺構と遺物	7
1 調査の概要	7
2 土坑状遺構	7
3 溝状遺構	27
4 その他の遺構と遺物	29
IV おわりに	30
遺物観察表	33
写真図版	

例 言

1. 本書は、平成9年度に実施した石川県羽咋市「市内遺跡（吉崎・次場遺跡）」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、住宅建設にともなうもので、羽咋市教育委員会が文化財保存事業費国庫補助金、県費補助金を受けて実施したものである。
3. 調査は、羽咋市教育委員会文化課嘱託宮下栄仁が担当し、同主事坂元 勇、同業務員山崎昭次の協力を得た。また庶務と調整は同課主幹谷内碩央があたった。
4. 調査期間は、平成9年5月6日から同年6月19日まで延べ26日間を要した。
5. 出土品の整理および本書作成にあたっての作業分担は、遺物洗浄・接合・記名・実測・トレスを能山真登加、上井直子、写真撮影を谷内碩央、その他を宮下が行い、山辺真智子、井上育子、上田美沙子の協力を得た。
6. 本書の遺構・遺物挿図の表示は次のとおりである。
 - (1) 挿図の縮尺は図内に表示した。
 - (2) 方位はすべて磁北を示している。
 - (3) グリッド名称は北東隅杭で代表する。
 - (4) 水平基準は海拔高を示している。
 - (5) 写真図版中の遺物番号は挿図内番号と符合する。
 - (6) 土器実測図の断面は須恵器、珠洲焼を黒塗り、その他の土器類を白ぬきで示した。
 - (7) 遺構の略号は次のとおりである。

SK：土坑 SD：溝 Pit および P：柱穴および小穴

7. 発掘調査および出土品整理・報告書作成にあたっては、羽咋市教育委員会文化課職員他、次の方々や諸機関からご教示とご協力をいただいた。記して謝意を表したい。（敬称略・順不同）
浜岡賢太郎、中條茂雄、福島正実、久田正弘、安 英樹、北嶋威二、今江新一、文化庁、石川県教育委員会、石川県立埋蔵文化財センター、(社)石川県埋蔵文化財保存協会、羽咋市歴史民俗資料館、吉崎町町会、次場町町会、(有)一松建設
8. 本書の執筆、編集は宮下が担当した。
9. 本調査に関する出土品、記録資料などは羽咋市教育委員会が一括して保管している。

I はじめに

吉崎・次場遺跡は、石川県羽咋市吉崎町、次場町、鶴多町にかけて広がる東西最大長580m、南北最大長350mを測る北陸でも有数の規模をもつ弥生時代の拠点集落として知られている。羽咋市街地の北東郊外に位置する本遺跡は、邑知潟から羽咋砂丘を断ち切って日本海に注ぐ羽咋川の自然堤防上に立地している。

邑知潟は現在、僅かに86haの残存水面を残す放水路となっているが、干拓事業以前は潟水面積456ha、平均水深1.20mを測る県下で河北潟に次ぐ規模をもつ湖沼であった。この邑知潟の北西に眉丈山丘陵、南東に宝達・石動山系が平行し、その間を平野の乏しい能登にあって最大の穀倉地帯である邑知地溝帶平野がのびている。

邑知地溝帶はその形成後海峡となっていたと考えられ、その後の海岸砂丘の発達で大きな入江となり、やがて海と隔離され邑知潟となったものである。潟化されたのは予想以上に古く、寺家遺跡など砂丘地の遺跡の状況から縄文時代前期後半にはその原形が形成されていたとみられる。

古邑知潟の湖頭は相当内陸部まで入り込んでいたのではないかと考えられている。そして長曾川、久江川、酒井川、飯山川に代表される小河川が幾筋も流れ込んでいたとみられる。これらの水路と日本海を結ぶ古邑知潟湖畔は水上交通の要所として重要な位置となっていたとおもわれる。

邑知潟周辺で稲作を中心とした農耕文化が盛行するのは弥生時代中期からであるが、本遺跡を中心として開発が進められていたようである。本遺跡周辺で弥生時代中期の遺跡をみると、寺家遺跡では最近の調査で南端からも検出され、この他に千里浜遺跡、兵庫町オクヤマデ遺跡など羽咋砂丘内縁部に点在している。そして弥生時代後期から末にかけて該期の集落がピークに達している。

参考文献

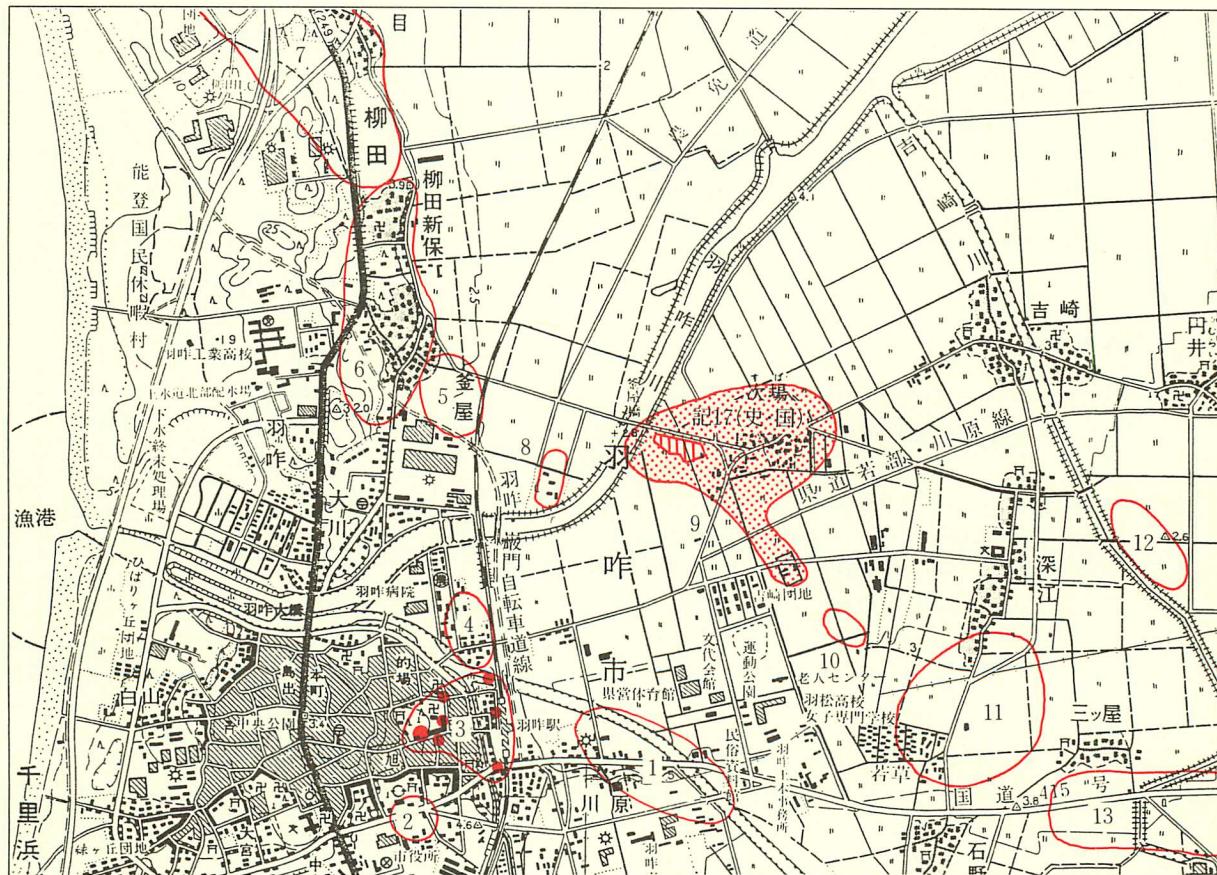
- 『羽咋市史』 原始・古代編 1973 石川県羽咋市
- 『吉崎・次場遺跡』 県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊(資料編1) 1987 石川県立埋蔵文化財センター
- 『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』 1986 石川県立埋蔵文化財センター
- 『吉崎・次場遺跡』 第13次発掘調査 1994 石川県羽咋市教育委員会



第1図 羽咋市の位置

第1表 遺跡地名表（「石川県遺跡地図」（平成4年）から抜粋）

挿図番号	遺跡番号	名称	所在地	所在地通称	種別	現状	立地	時代	出土品	備考
1	07008	子浦川遺跡	羽咋市鶴多町・東川原町		散布地	宅地・田	平地	弥生～古墳	土器	1996、河川改修時発見。
2	07009	羽咋高校前遺跡	羽咋市旭町		散布地	宅地	砂丘	弥生	土器	1961～62年建物基礎工事中出土。現市役所前
3	07010	羽咋古墳群	羽咋市川原町		古墳	社宅	砂丘	古墳	土器、玉類	
4	07011	的場農業倉庫前遺跡	羽咋市の場町		散布地	田	平地	弥生		
5	07012	釜屋倉ノ下遺跡	羽咋市釜屋町	倉ノ下	散布地	田・畑・宅地	平地	平安～中世	須恵器、土師器、珠洲焼	1984、87年、市教委発掘調査
6	07013	釜屋遺跡	羽咋市釜屋町・柳田町		散布地	畑・宅地	砂丘	縄文～古墳	土器、石器、刀子	1988年市教委発掘調査
7	07014	寺家遺跡	羽咋市寺家町・柳田町		祭祀 神社関係	宅地・畑	砂丘	縄文～中世	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、中世陶磁器、銅製品、鉄製品、三彩、ガラス製品	1977～80、85年 県教委・県埋文センター発掘調査。1980～83、87、89、91、96年市教委、発掘調査
8	07017	東釜屋遺跡	羽咋市東釜屋町		散布地	田	平地	不詳	土器	1992年市教委調査
9	07018	吉崎次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町		散布地	田・畑・宅地	弥生～中世	土器、土製品、石器、木器、玉、鏡		1956年羽咋高校、63年市教委・石考研、79～82、86、91年市教委、80～84年県埋文センター発掘調査。国指定史跡
10	07019	次場コウレン遺跡	羽咋市次場町	光運 (コウレン)	集落地	田	平地	弥生～平安	土器、木製品	1982年埋文センター発掘調査（吉崎・次場遺跡T調査区）
11	07020	若草遺跡	羽咋市若草町・深江町・石野町		散布地	宅地・田	平地	平安	土師器、須恵器	1982年、宅地造成地で遺物採集。
12	07021	深江遺跡	羽咋市深江町		散布地	田	平地	古墳～平安	土器、石製品、木製品	1973、74、78年、県教委発掘調査。
13	07022	太田ニシカワダ遺跡	羽咋市太田町・三ツ屋町	ニシカワダ	集落跡	田	平地	弥生～平安	弥生土器、須恵器、土師器	1990、92、96年、市教委調査



第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

(『羽咋市遺跡地図』1993版より一部転載)

II 調査の経緯と経過

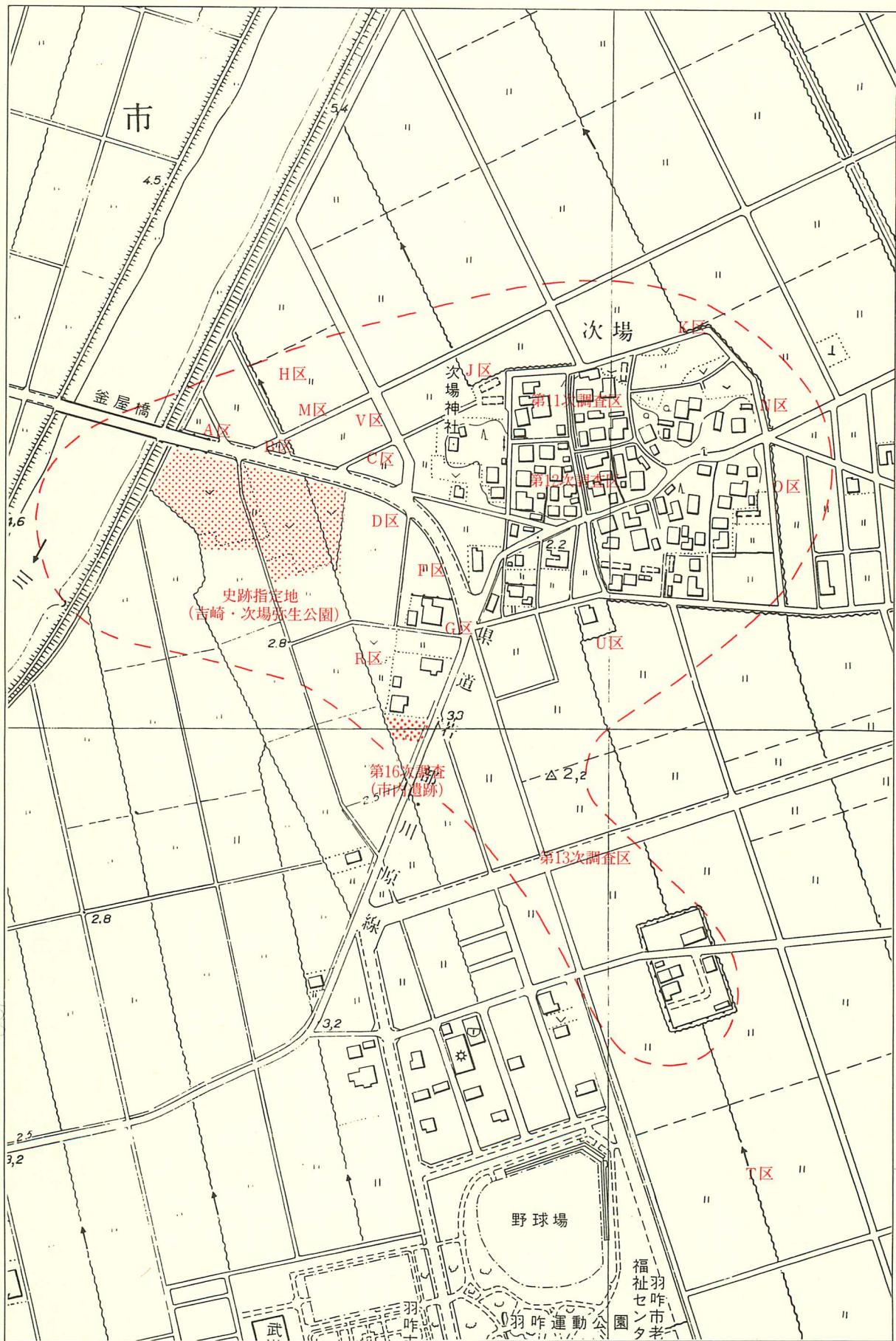
1. 過去の調査と経過

邑知潟から日本海へ注いでいる羽咋川は、以前はかなり蛇行したものであったが邑知潟干拓事業による河川改修で現在の姿となったものである。

吉崎・次場遺跡の発見は、昭和27年（1952年）にこの河川改修工事中に出土した数々の遺物が話題になったことに始まる。この発見を契機に、羽咋高校地歴班が行った分布調査の成果を基に、昭和31年（1956年）、羽咋市域で初めての本格的な発掘調査である第1次発掘調査が羽咋高校地歴班と石川考古学研究会によって実施されている。この調査で予想以上の成果があげられ、さらなる調査が待ち望まれたのである。昭和38年（1963年）第2次発掘調査が羽咋市教育委員会（以下、市教委）が主催となり、石川考古学研究会が調査団を組織して発掘調査をおこなっている。当時としては画期的な行政と民間で組織する調査体制で実施され、また調査団には県内外の研究者、研究グループが参加した。これらの学術調査によって得られた資料は、弥生時代研究の注目するところとなり、出土土器は「次場最下層式」、「次場下層式」、「次場上層式」に分類され、弥生時代中、後期の標準型式名となり、本遺跡は北陸屈指の弥生集落として著名になった。

昭和38年（1963年）に市指定史跡となっていた本遺跡は、昭和49年（1974年）に文化庁の重要遺跡に指定されている。この頃、本市では都市計画事業の一環として本遺跡の中央部を通り、次場町と釜屋町を結ぶ農道を拡幅して市道12号線とする道路改良事業が計画された。このため、市教委では遺跡の分布状態を詳細に把握し、道路改良事業の計画変更の要否の資料とするため、昭和50年度（第3次調査）、同52年度（第4次調査）に範囲確認調査を実施している。道路改良事業はほぼ計画どおり実施されることになり、それにともなう発掘調査が昭和54～57年度（第4～8次調査）に行なっている。また、県営ほ場整備事業にともなう発掘調査を石川県立埋蔵文化財センターが昭和55～59年度（第5～10次調査）と5年間の長期をかけて実施した。これらの調査により、本遺跡が現遺跡地図に記載されている範囲に確定したのである。その後、市教委では農道舗装、宅地部分の調査（第11・12次調査）石川県からの委託をうけた県道若部川原線にともなう第13次発掘調査（1991年）を実施した。

このような開発にともなう発掘調査が続く中、昭和58年（1983年）に分布密度がより高いとされる市道12号線の南側、吉崎町ウの部ほか約10,000m²が史跡として国の指定をうけ、これを機に昭和61～63年にかけて指定地の買い上げがおこなわれた。さらに平成元年より発足した吉崎・次場遺跡整備委員会で検討・協議がなされ、平成4年には整備基本構想が策定された。続く平成7・8年度に文化庁より一般整備の事業採択をうけ、復元的整備のための発掘調査（第14・15次調査）を実施し、指定地内が弥生時代中期の居住域であったことを示す様々な資料を得ることができた。これらの成果をうけて整備委員会では、史跡の立体的な表現を基本として、建物の復元などの整備内容が確認された。また、指定地に隣接する東側には史跡をより効果的に活用するためのガイ



第3図 各調査区位置図(1/5,000)

ダンス施設などの諸施設が整備されている。このように「吉崎・次場弥生公園」という名称で平成10年度に完成を目指して、復元整備が実施されている。

引用文献

- 『羽咋市史』 原始・古代編 1973 石川県羽咋市
- 『吉崎・次場遺跡』 県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊(資料編(1)) 1987 石川県立埋蔵文化財センター
- 『吉崎・次場遺跡』 第13次発掘調査 1994 石川県羽咋市教育委員会
- 『石川考古』 第241号「羽咋市 史跡吉崎・次場遺跡の保存・整備事業 今井淳一」 1997 石川考古学研究会

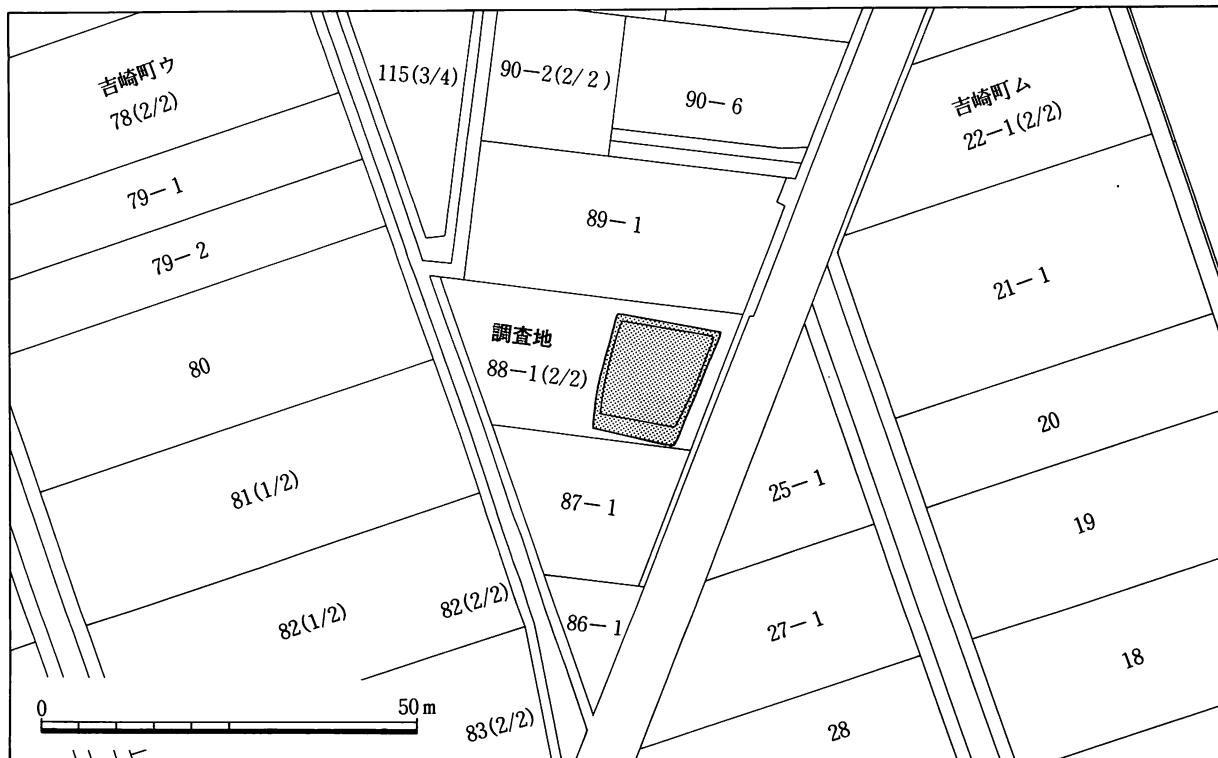
2. 調査の経緯

平成5年8月12日に、羽咋市吉崎町ウ88番地1、ム25番地1の土地所有者から埋蔵文化財の問い合わせがあり、ただちに住宅建設を目的とした開発計画が市教委に提出された。

これを受けた市教委では、この事業予定地が周知の遺跡（遺跡No.07018 吉崎・次場遺跡）の範囲内であることから、同年8月23日にバックフォーを用いて対象区域に4箇所（試掘面積約42.0m²）のトレンチ（試掘坑）を設定し分布調査を実施した。その結果、西側トレンチを除く他のトレンチ内から埋蔵文化財の存在が確認されたため、事業実施以前に発掘調査が必要であることを報告した。

平成8年4月、同対象区域内に再び住宅建設の計画書が提出され、関係諸機関と発掘調査に関する協議を行った。

以上の経緯を経て、市教委が事業主体となり平成9年5月6日から6月19日まで延べ26日間、調査面積150m²の発掘調査を実施した。



第4図 調査地位置図(1/1,000)

3. 調査の経過（日誌抄）

5月6日(火)晴

本日より現地入りする。発掘機材の搬入を行う。

5月8日・9日(木・金)雨・晴

バックフォーによる表土除去作業。グリット割の杭打ちを行う。

5月12日(月)晴

作業員による発掘調査を開始する。

5月13日(火)晴のち曇

A・B-1~4区の掘り下げ作業。

5月16日(金)晴

雨により、壁面の一部が崩れる。掘り下げ作業続行。

5月19日(月)晴

遺構検出と写真撮影を行う。

5月20日(火)晴のち雨

SD01より遺構の掘り下げを開始する。

5月22日(木)曇時々雨

SD01、SK01の掘り下げと写真撮影。実測作業も一部行う。

5月23日(金)晴

A~D-1・2区の遺構掘り下げ作業。

5月27日(火)曇のち晴

平面実測図の作成と遺構の掘り下げを行う。

5月28日(水)晴時々曇

遺構の掘り下げとA~D-3・4区の遺構検出を行う。

5月29日(木)曇

遺構の土層観察から実測図の作成を行う。

5月30日(金)晴

実測図の作成と遺構の掘り下げ作業。

6月2日(月)曇時々雨

調査区全体の約1/4を完掘する。

6月3日(火)晴

C-3区で遺構が重複し、掘り進めるのに苦労する。

6月5日・6日(木・金)晴・曇時々雨

遺構の掘り下げを続行する。

6月9日・10日(月・火)小雨のち曇

写真撮影、実測図の作成を順次行う。

6月11日(水)曇のち晴

調査区全体の清掃、完掘状況の写真撮影を行う。

平面実測図の作成準備にかかる。

6月12日(木)晴

平面実測図の作成。

6月13日(金)晴

平面・断面実測図の作成と土器の取り上げを行う。

調査区の位置を平板測量する。

6月16日(月)晴

掘り残しなどの最終確認を行い、発掘機材の撤収準備をする。

6月18日(水)晴

バックフォーによる埋め戻し作業とユニットハウス等の発掘機材の撤収をする。

6月19日(木)晴

排土置場のブルーシートを撤去し、現地調査終了。

【発掘調査参加者】 (50音順)

今江幸子 今江すみ子 紙谷百合子 柴田米子 竹沢正男



作業風景



埋め戻し作業

III 遺構と遺物

1. 調査の概要

今回の調査で本遺跡の調査も第16次を数える。史跡指定地（吉崎・次場弥生公園）から南東へ約200mに位置し、本遺跡の南西端にあたる。分布調査の成果をもとに、調査区域約150m²を設定した。調査区には5×5m方眼のグリッドを任意に割り付け、南北方向にアルファベットを、東西方向にアラビア数字を付した。この座標が交差する北東隅の杭をグリッド名とした。

調査区域の現況は、道路と同じレベルまで盛土、整地されていた。調査区域での層序は第1層がこの盛土で約90cmの厚さで搬入され、その下に濁灰色粘土の旧水田耕作土（第2層）、床土と思われる黄灰褐色粘質土層（第3層）があり、この第3層に各時期の遺物が含まれていた。また調査区の南西側に黒褐色粘砂に地山砂ブロックが混入した層（第5層）を検出したが、この層が包含層の一部ではないかと考えられる。

これらの層を取り除いた下から、中世、古代、弥生時代とみられる遺構や遺物が出土したが、弥生時代中期とみられるものが大半を占めている。おもな遺構は土坑32基、溝7条、小穴多数がある。基盤は淡灰色（淡黄灰色）細砂層で各遺構はこの基盤砂層に掘り込まれていた。また遺構検出面は平坦で、標高が1.4m前後である。

なお、遺構名は発掘調査時に付けた名称をそのまま使用しているので、土坑と小穴（ピット）の区別などは主観的であり、統一されたものではない。

2. 土坑状遺構

SK01（第7、9図）

調査区の北西隅A・B-3・4区に位置する。T字形を呈するものとみられるが部分調査で、溝となる可能性もある。上端での規模は最短幅1.05m、深さ0.52mを測る。覆土は灰褐色系の粘質土で比較的に新しい様相である。

出土遺物には口縁部端に綾杉状の刻み目を施した鉢（1）や石錐の未製品とみられるもの（5）、須恵器の壊（7、6）などがある。この他に拳大前後の自然石が出土した。

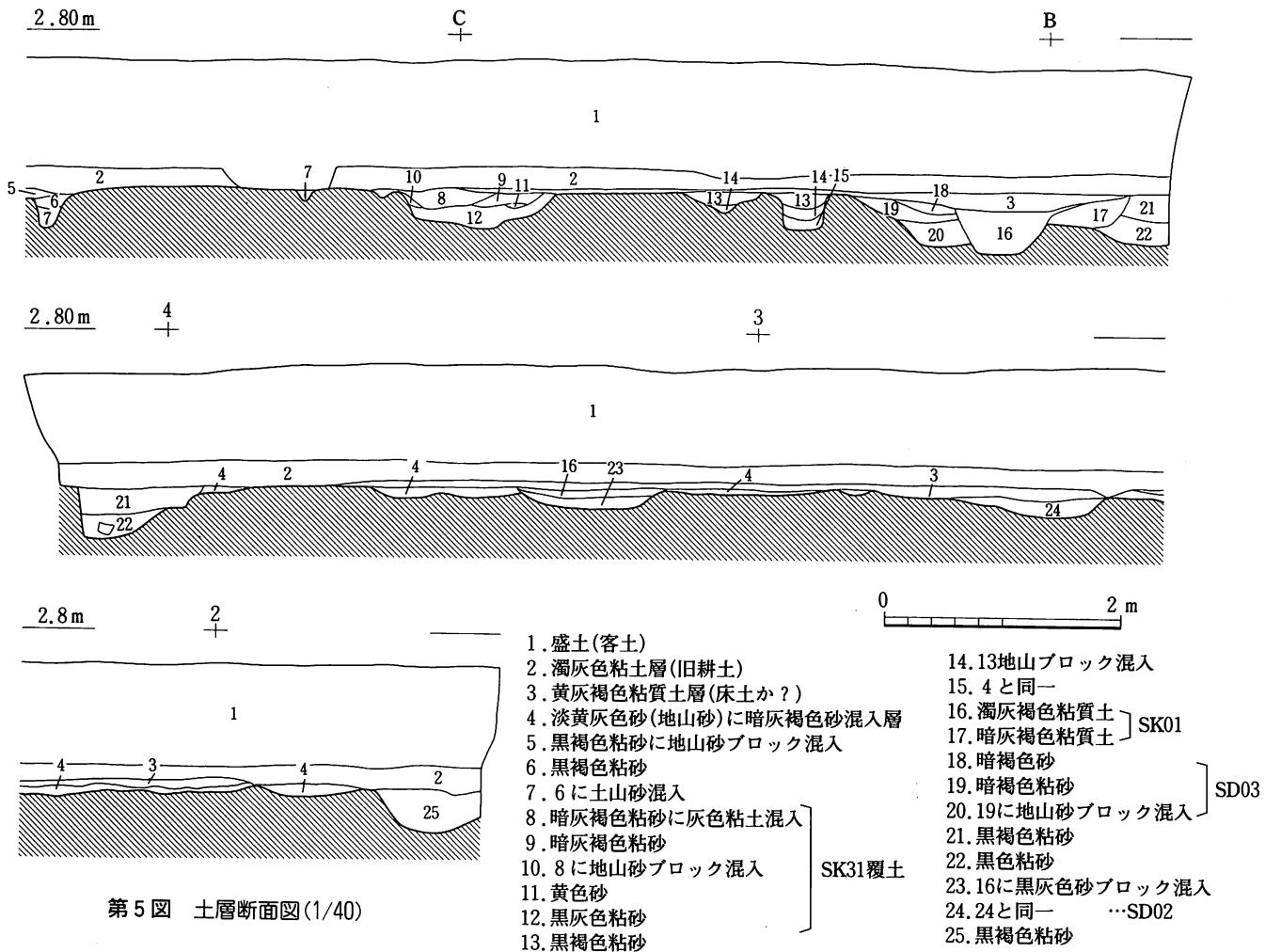
本坑の所属時期はSD01を切っていることから、平安時代後期以降と考えている。

SK02（第8図）

C-1・2区に位置する。部分調査であるが上端で幅1.75m、深さ0.21mを測る。覆土はSK01と同じ灰褐色系の粘質土で、SK03に切られている。弥生土器の細片が出土したが図化できたものはない。

SK03（第8、10図）

C-1・2区に位置し、SK02を切って並列する。略円形を呈すると考えられ、上幅が2.80m、



第5図 土層断面図(1/40)

深さ0.67mを測る。覆土は灰褐色粘質土と黒褐色粘砂、基盤層がブロック状に混合されたもので調査区内では最も新しい遺構であると考えている。口縁端部に刻み目を施した甕(9)、壺(10)などが出土したがこれらは黒褐色粘砂に含まれていたものである。

SK04 (第8、11図)

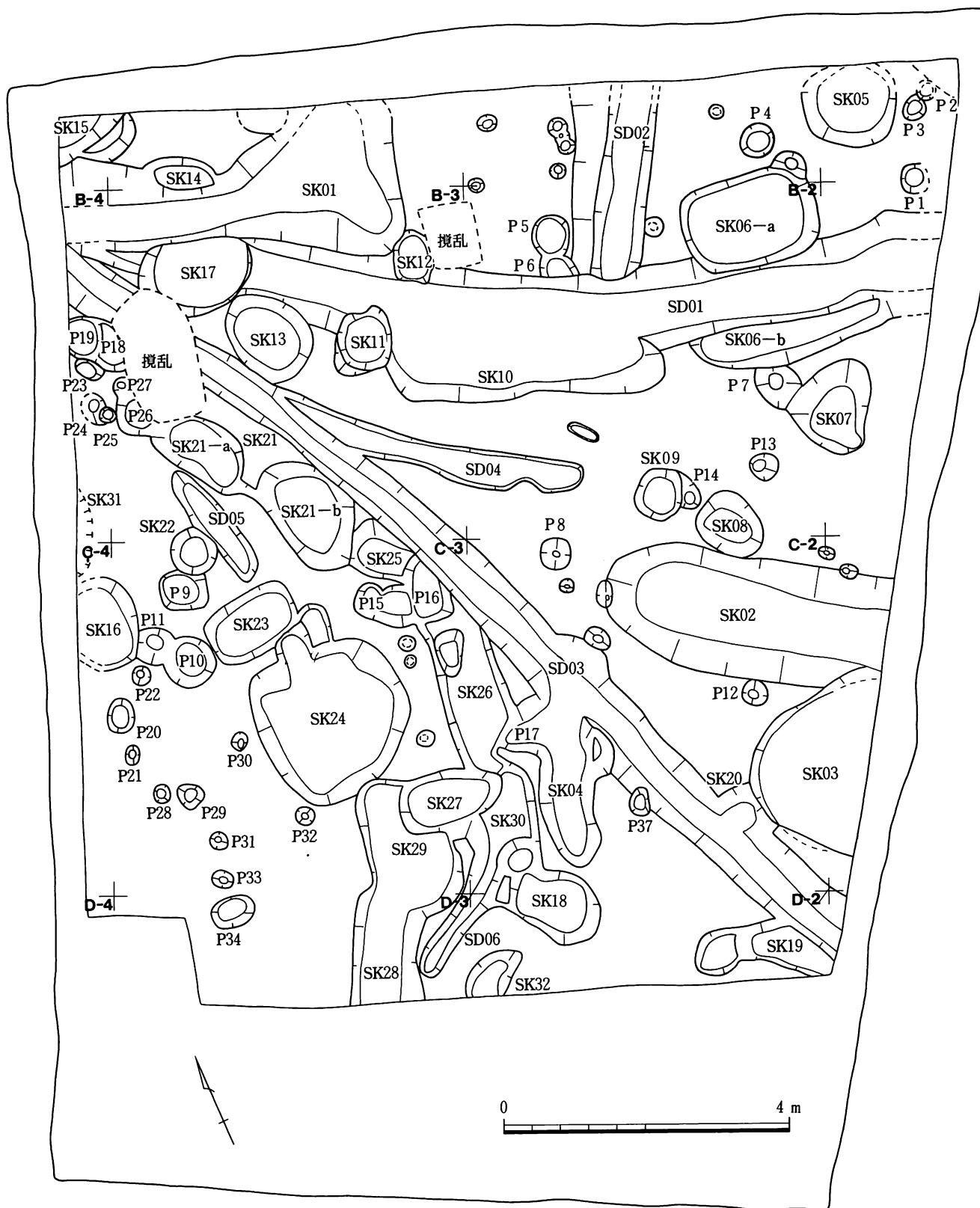
C-2区に位置し、歪な長楕円形を呈する。上端で3.32×0.85m、深さ0.44mを測る。覆土はSK03とほぼ同じで、周辺の遺構を切り込んでいる。弥生土器が数点出土している。

SK05 (第12、13図)

A-1・2区に位置する。部分調査であるが円形を呈するものとみられる。上端で径が約1.32m、深さ0.41mを測る。口縁外面に沈線が巡る鉢(15)や高杯(16)などが出土したがいずれも小片で、遺構の時期を決めるまでには至らない。

SK06-a (第14~16図)

B-2区に位置する。検出当初はSK06-bと同一遺構と考えたが調査の結果、別遺構であることが判った。隅丸長方形を呈し、上端で1.90×1.32m、深さ0.44mを測る。南側がSD01に切られる。完形品はないが、比較的多くの遺物が出土した。口縁端に刻み目が施された壺や甕や体部に櫛描直線文や波状、扇形、擬流水、廉状文など施すものがある。また上下が欠損した磨製石斧、砥石などが出土した。本坑の所属時期は弥生時代中期後葉と考えられる。



第6図 調査区全体図(1/80)

SK06-b (第14、17図)

B-1・2区に位置し、SD01を挟んでSK06-aと対峙する。長楕円形を呈し、長さが上端で2.72m、深さ0.18mと浅い。北側がSD01に大きく切られている。口縁端部に刻み目が施されるもの(44~46)や波状文、直線文を施すもの(47)などがあるが何れも小片である。また石鏸が2点(49、50)出土した。SK06-aとほぼ同時期と考えている。

SK07 (第14、18図)

B-1・2区に位置する。隅丸の三角形を呈し、上幅1.20m前後、深さ0.26mを測る。覆土は黒褐色粘砂が下層に濁暗灰褐色粘砂が上層に堆積し、土器は主に下層から出土した。P7を切っている。51は口縁を外側に屈曲し、その突帯部分に格子状刻み目を施した鉢である。その他に波状口縁の甕(52)などがある。本坑の所属時期は弥生時代中期中葉とみられる。

SK08 (第19、20図)

B-2区に位置する。楕円形を呈し、上端での規模は1.00×0.78m、深さ0.25mを測る。大きく外方に開く口縁がもつ甕(56)の他、体部片が数点出土した。

SK09 (第19、21図)

B-2区に位置し、南東側にSK08が並ぶ。略方形を呈し、上端で0.70×0.76m、深さ0.22mを測る。黒褐色粘砂層に遺物が含まれ、57と58は同一個体とみられる甕で口縁端部に刻み目、肩部に刺突文が同じ工具(ヘラ)で施される。この他に口縁端部に刻み目のあるものや無文の甕の小片、腐食した木片が出土した。所属時期は弥生時代中期後葉である。

SK10 (第22、23図)

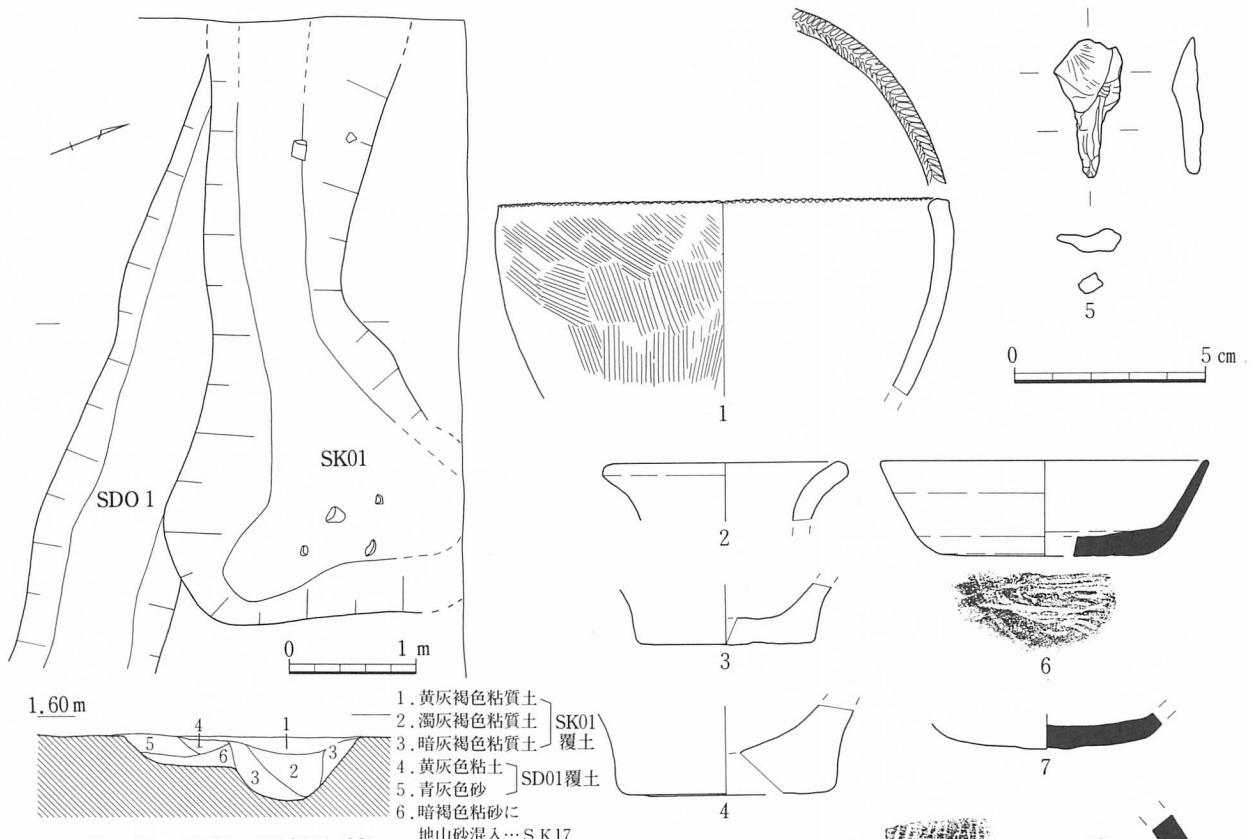
B-2・3区に位置する。北側をSD01が並行に流れ、本坑の半分以上を切っている。西側端にはSK11が切り込む。平面形は歪で2基の土坑が重複しているものともみられたが、覆土断面の観察では確認できなかった。上端での規模は最長で3.95m、深さ約0.20mを測る。遺物は口縁端部に刻み目を施す甕(62~66)があるが、調整は比較的に粗いハケ目調整のものが多い。壺では櫛描直線、波状文を施すものがあるが小片である。覆土上層(第2層)から扁平片刃の磨製石斧(72)が出土した。本坑の所属時期は弥生時代中期中葉と考えている。

SK11 (第22、24図)

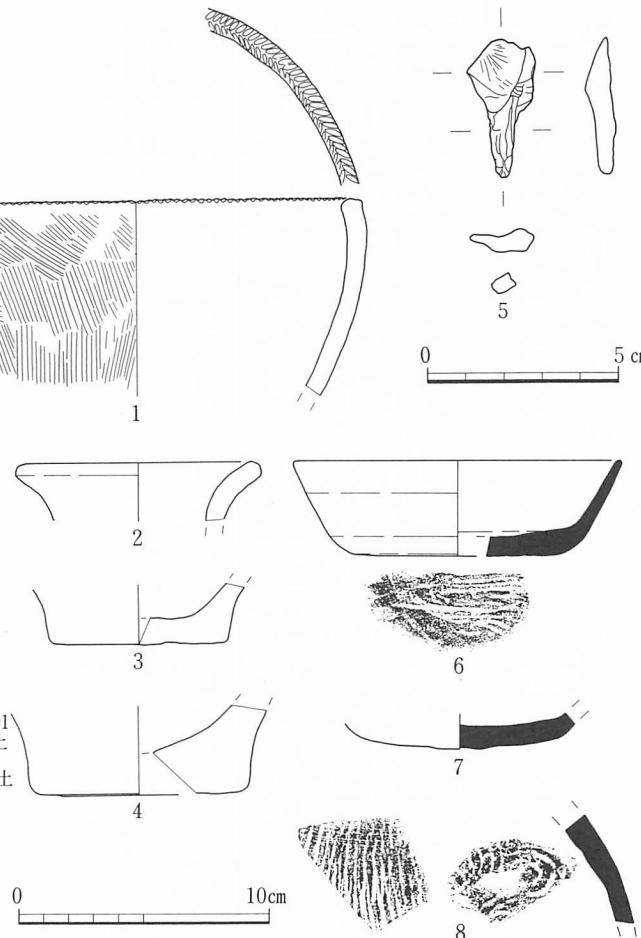
B-3区に位置する。平面形は歪んだ方形を呈す。北側をSD01に切られるが残存の規模で0.96×0.83m、深さ0.48mを測る。覆土第3層の中間よりやや下方で須恵器の甕(76)の体部片(15×13cm)が内面を上に向けた状態で出土した。内面の器壁は使用痕が認められ平滑になっている。その他に高杯の脚部(73)、土師器の椀ないし皿の底部片、土錘などがある。須恵器は2次的に使用されたものとみられ、土師器から本坑の所属時期をみると11世紀末前後と考えられる。

SK12 (第22、25図)

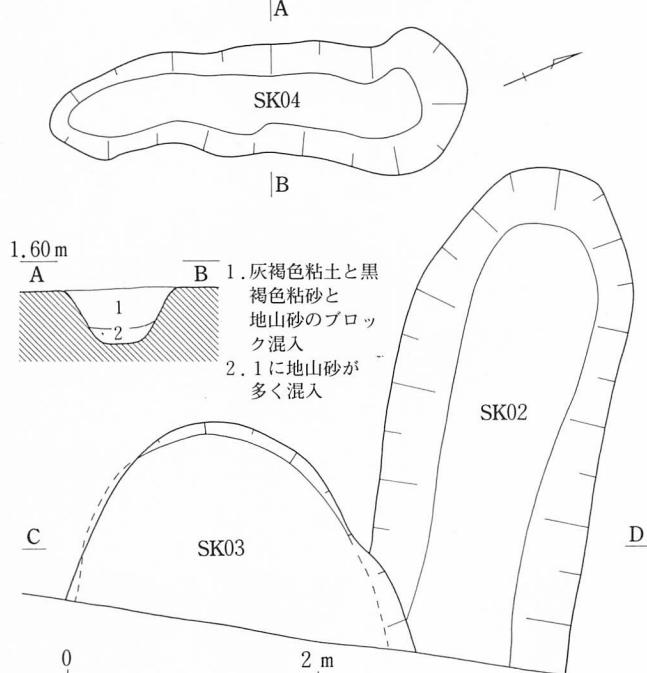
B-3区に位置する。周りをSK01、SD01と攪乱に切られる。平面形は楕円形を呈していたものとみられ、残存での規模は0.65×0.57m、深さ0.28mを測る。側壁は垂直に近く、底部は平坦である。覆土には比較的多くの炭化物が含まれ、最下層(第5層)では厚さ2cmの炭化物が層状に堆積していた。遺物は甕、壺などがあるが小片が多く、その他に石鋸が1点出土した。所属時



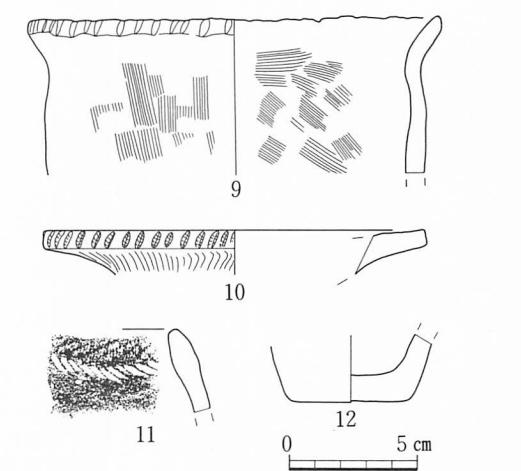
第7図 SK01・SD01(1/60)



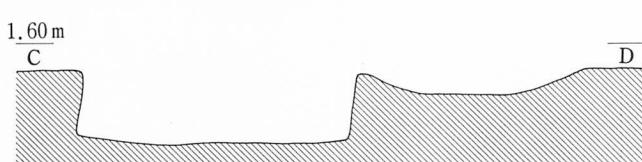
第9図 SK01出土遺物(1/3-1/2)



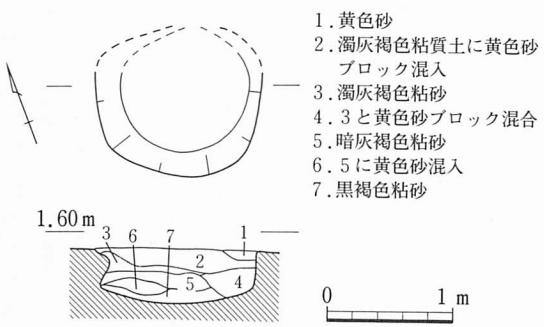
第8図 SK02・03・04(1/60)



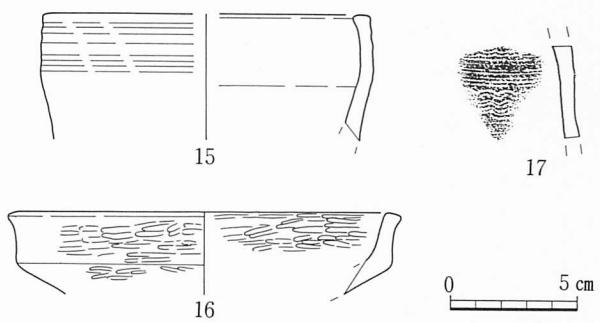
第10図 SK03出土遺物(1/3)



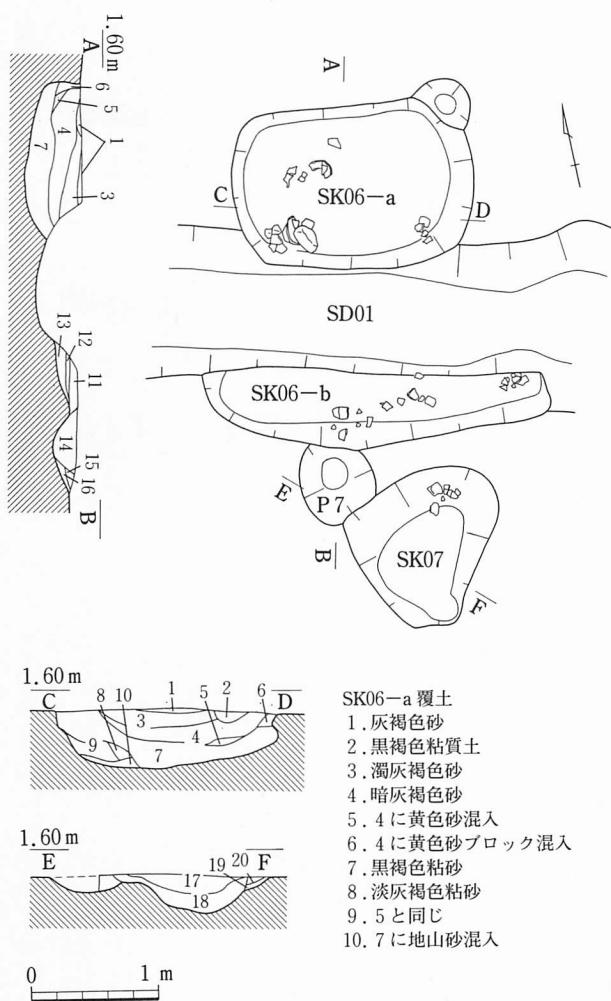
第11図 SK04出土遺物(1/3)



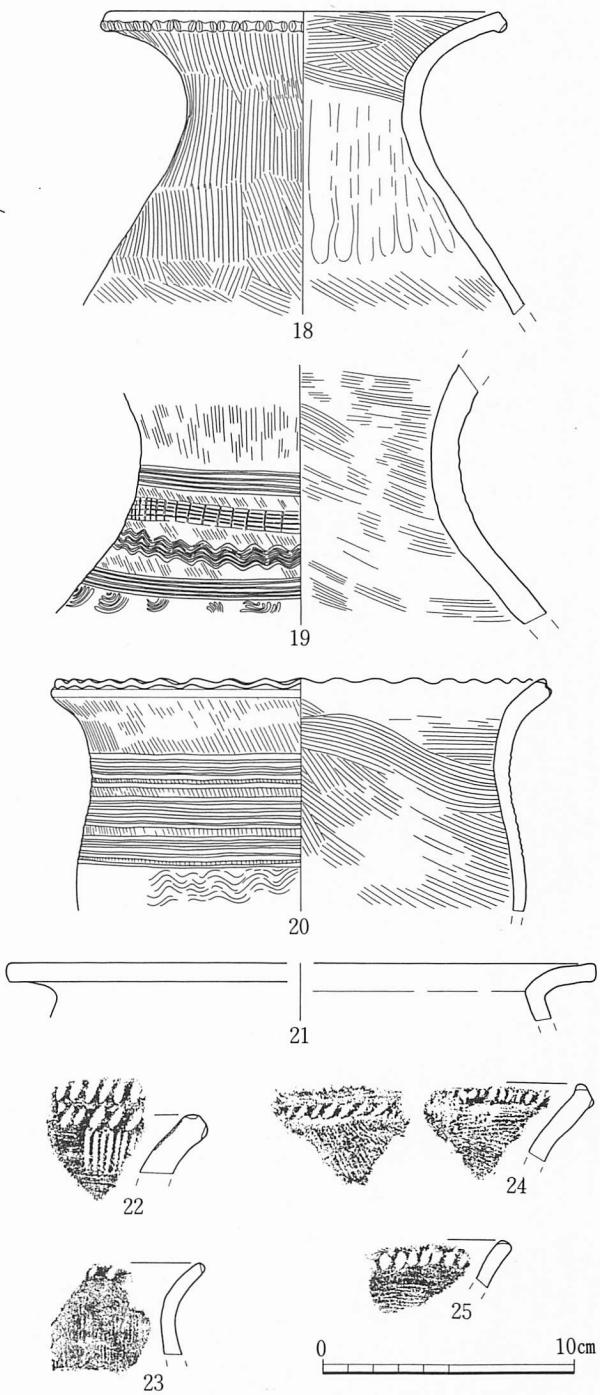
第12図 SK05(1/60)



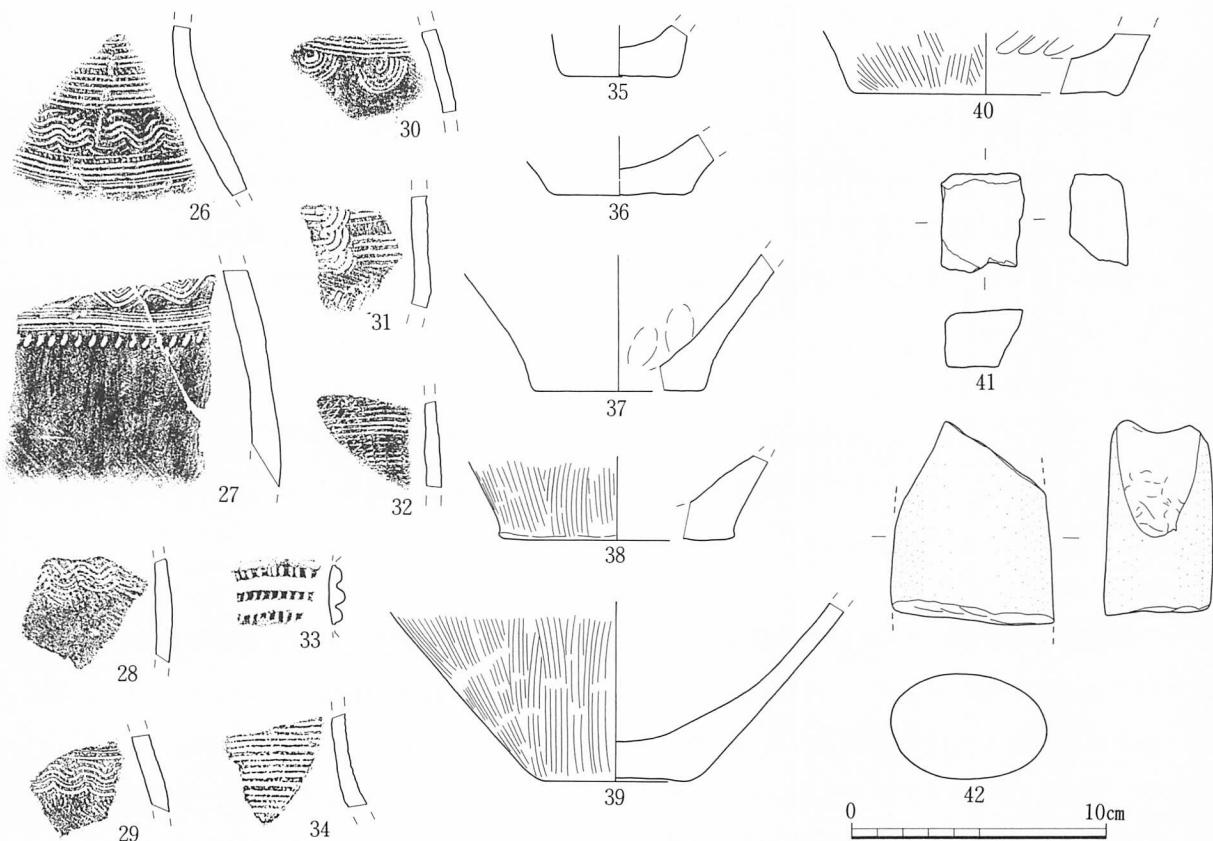
第13図 SK05出土遺物(1/3)



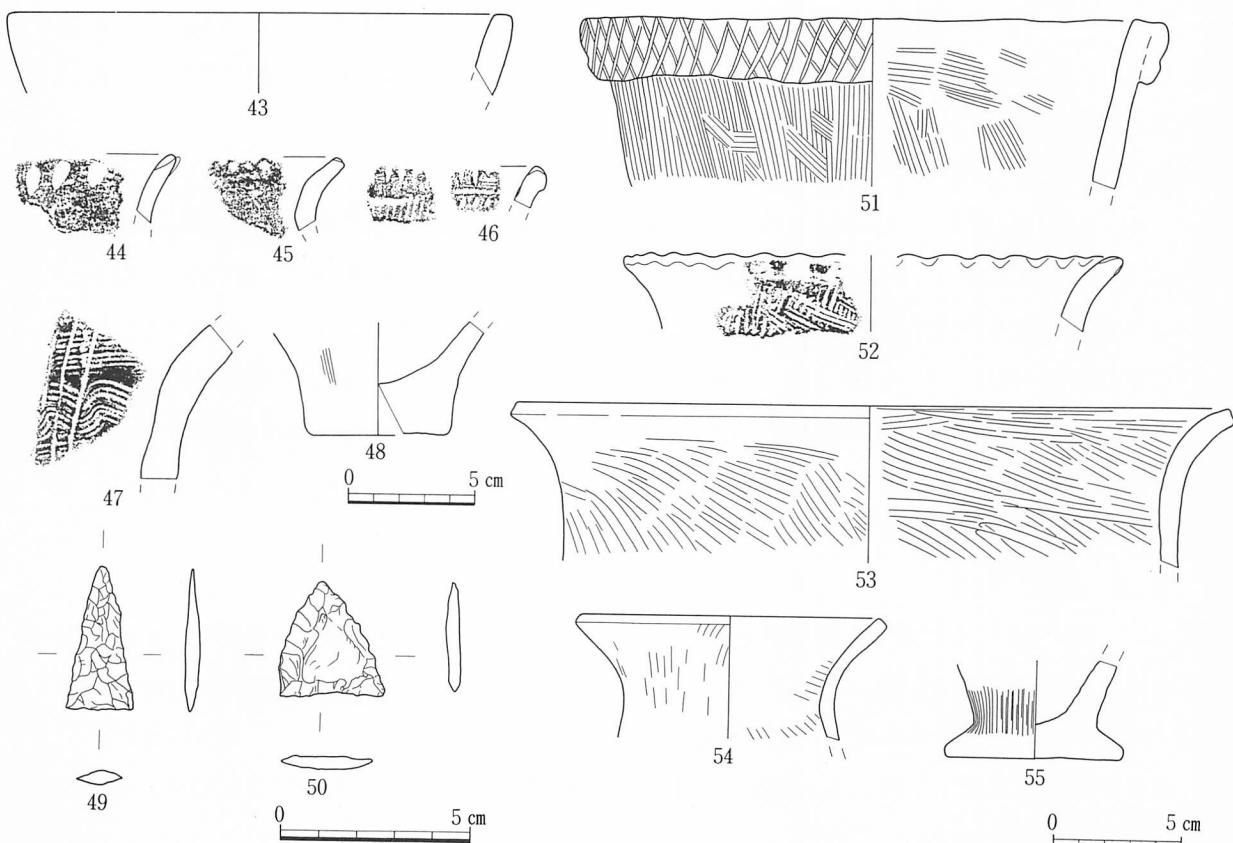
第14図 SK06-a・06-b・07, Pit7(1/60)



第15図 SK06-a 出土遺物 1 (1/3)



第16図 SK06-a 出土遺物 2 (1/3)



第17図 SK06-b 出土遺物(1/3-1/2)

第18図 SK07出土遺物(1/3)

(略)

期は弥生時代中期中葉と考えられる。

SK13 (第26、32図)

B-3区に位置する。長軸方向の両端をSD01とSD03に切られる。平面形は橢円形を呈し残存の規模で $1.30 \times 1.05m$ 、検出面からの深さ0.17mを測る。遺物はおもに暗灰褐色粘土層からのもので、口縁部に刻み目を施す甕(82)と壺(83)、体部に直線文、廉状文、波状文を施す壺(84)の体部片がある。本坑の所属時期は土器とSD03に切られていることなどから、弥生時代中期中葉と考えている。

SK14 (第27、33図)

A-3区に位置する。規模はSK01にほとんどが切られて不明であるが深さは0.30m以上とみられる。覆土は他の弥生時代の遺構覆土と同じ暗褐粘砂である。遺物には外面を削り調整した底部片(86)が1点出土した。

SK15 (第28、34図)

調査区の北側隅、A-4区に位置する。部分的な調査のため規模は不明であるが南側に半円形を呈する張り出しが付き、段状に落ち込む。深さは上段が0.18m、下段で0.40mを測る。2基の土坑が重複する可能性も考えられる。覆土は濃い黒褐色粘砂(第1層)と黒色粘砂(第2層)で、第2層から口頸部を欠損する壺(87)が出土した。胴部が球形を呈し、内外面がハケ調整される。内面にはその後にナデ上げ調整され、縞模様になっている。その他に壺の底部片(88)がある。所属時期は弥生時代中期後葉である。

SK16 (第29・35図)

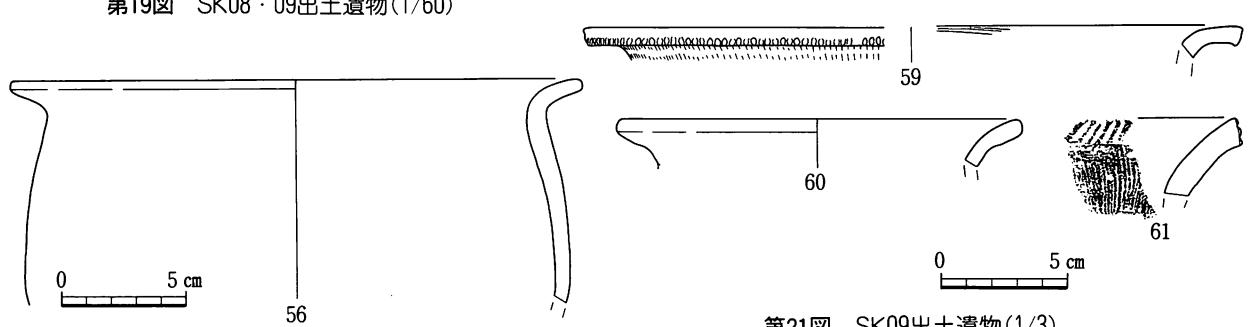
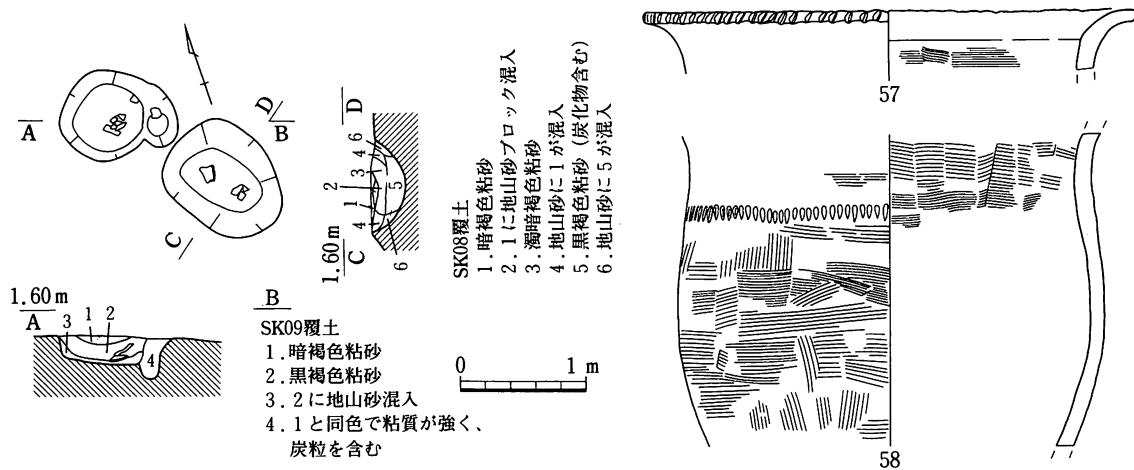
C-3・4区に位置する。部分調査であるが平面形は橢円形を呈するものとみられる。長軸で1.33m、深さ0.23mを測る。遺物は櫛描直線、廉状文を施した体部の細片(89)の他、少量の土器が出土したが、本坑の時期を特定するには至らない。

SK17 (第27、36図)

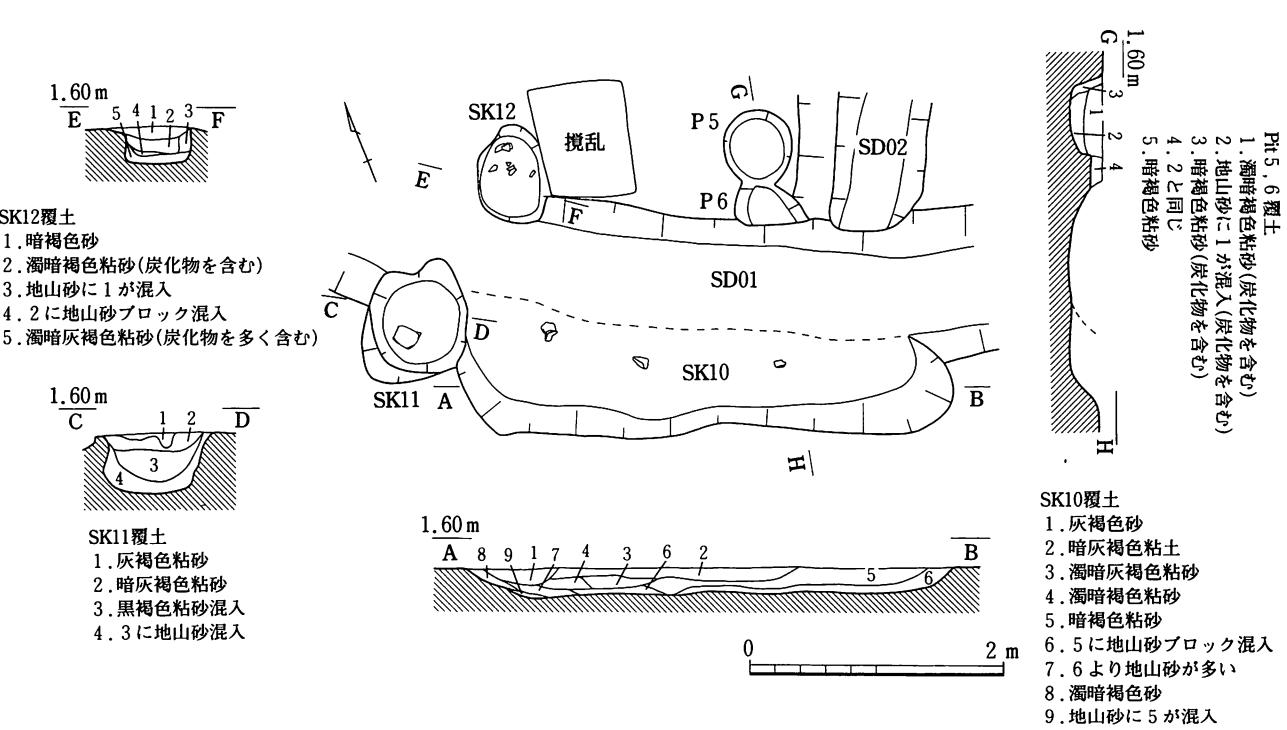
B-3区に位置する。北側をSK01に切られ、西側が搅乱をうける。中央にSD01が通る状況で検出した土坑である。平面形は橢円形を呈したものとみられ、残存の規模で長軸1.56m、深さ0.12mを測る。残り少ない覆土から多くの土器が出土した。大きく外方に開く口縁で内外面に刻み目を施す壺(90)、ラッパ状に開く口縁で、内面に縦方向にハケ状具による施文が約8cm間隔に8本(1単位5条)に施される壺(91)、外面に縄文と櫛描直線文を施す体部の細片(94)、土製紡錘車(96)などが出土した。本坑の所属時期は、僅かな範囲の土層観察であるがSK13を切っているがほぼ同時期と考えている。

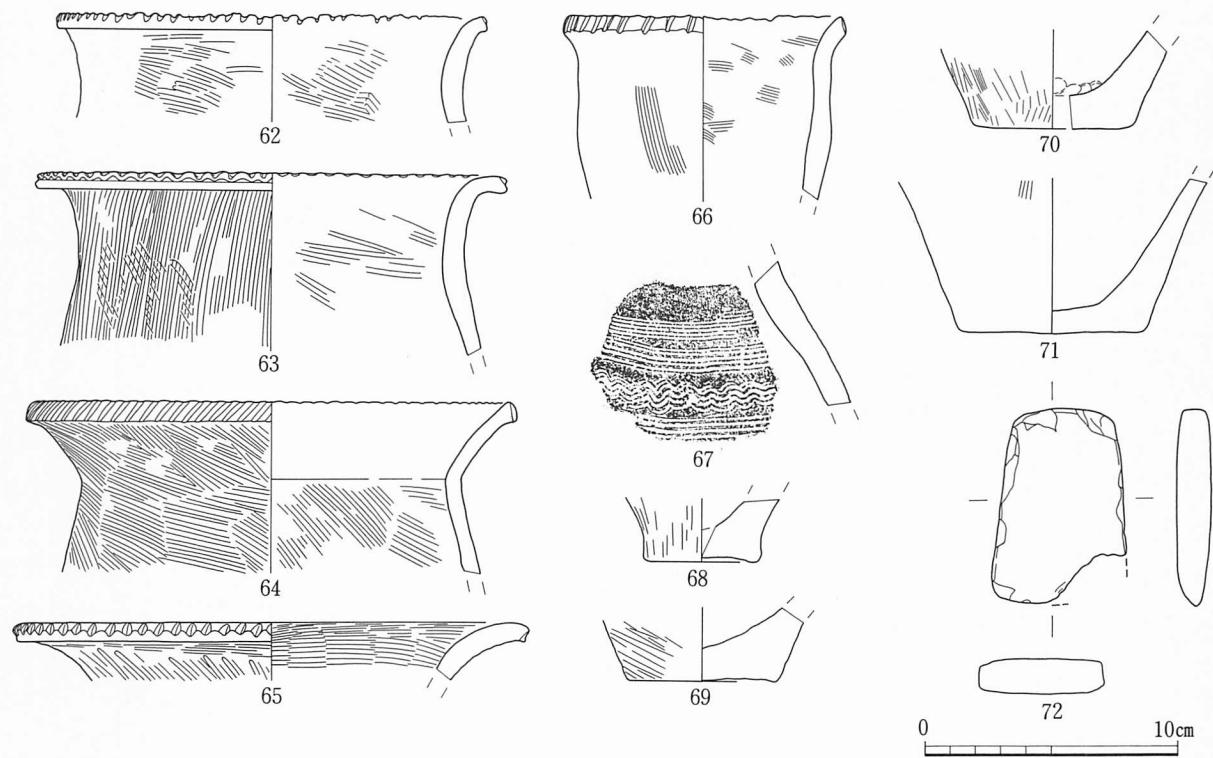
SK18 (第37、39図)

C・D-2区に位置する。北西隅をSK30に切られる。平面形は歪な橢円形を呈したものとみられる。規模は上端で $1.88 \times 0.90m$ 、深さ0.22mを測る。炭化物を含んだ黒褐色粘砂の覆土から、土器の小片が少量と長さ12~14cmで平滑な使用面がある石(砥石?)が2点、拳大の自然石が1点と軽石が2点出土した。出土遺物から本坑の所属時期を特定することはできないが、周囲の状況から弥生時代中期としておく。

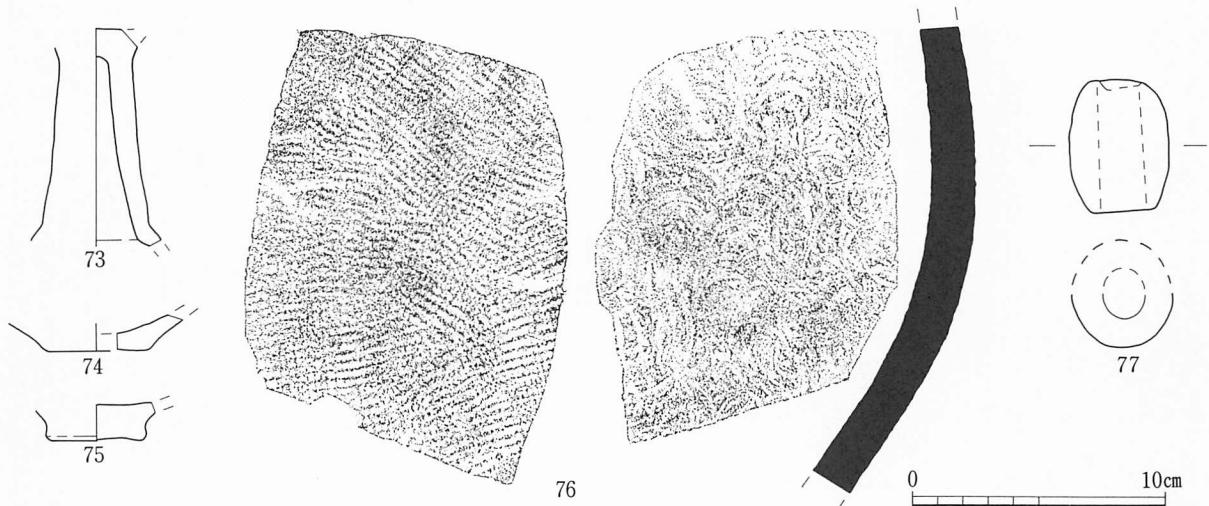


第21図 SK09出土遺物(1/3)

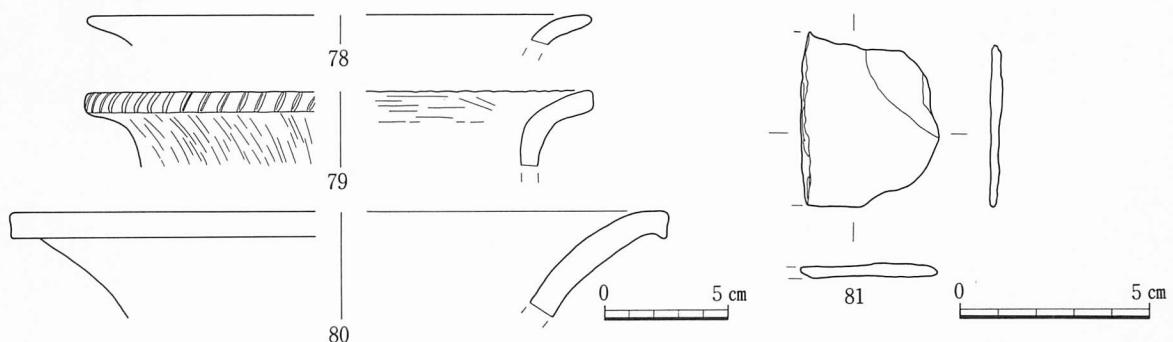




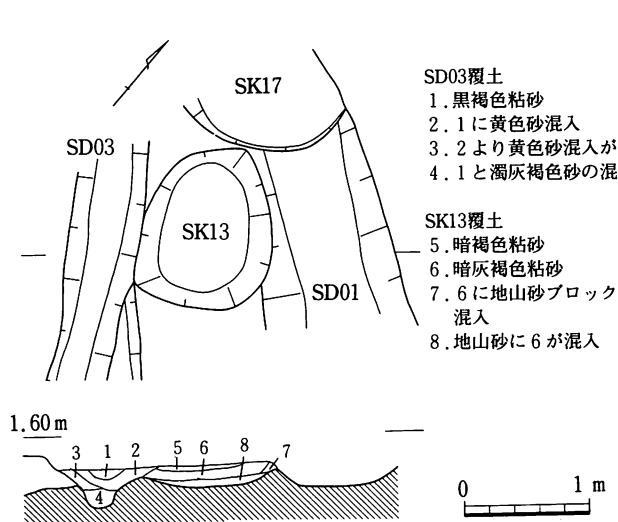
第23図 SK10出土遺物(1/3)



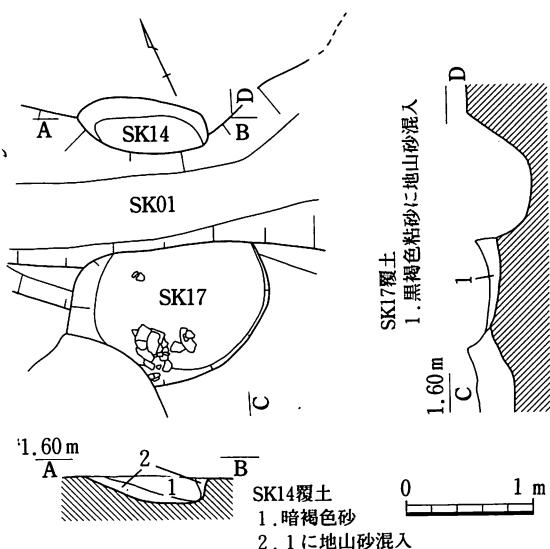
第24図 SK11出土遺物(1/3)



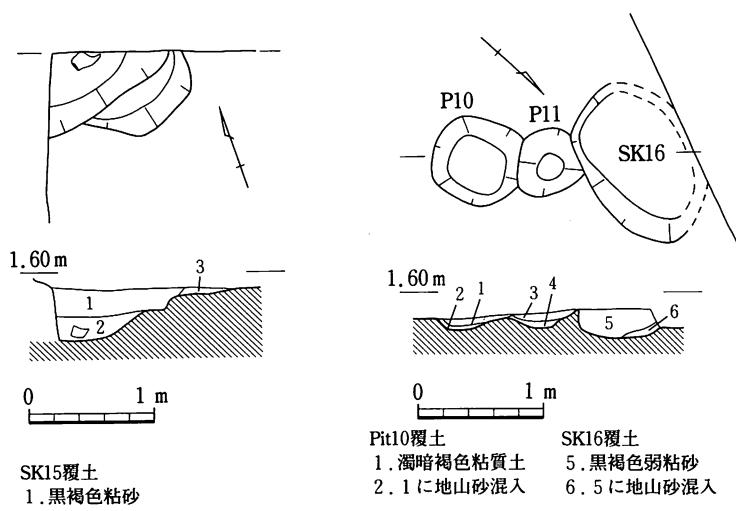
第25図 SK12出土遺物(1/3・1/2)



第26図 SK13, SD03(1/60)

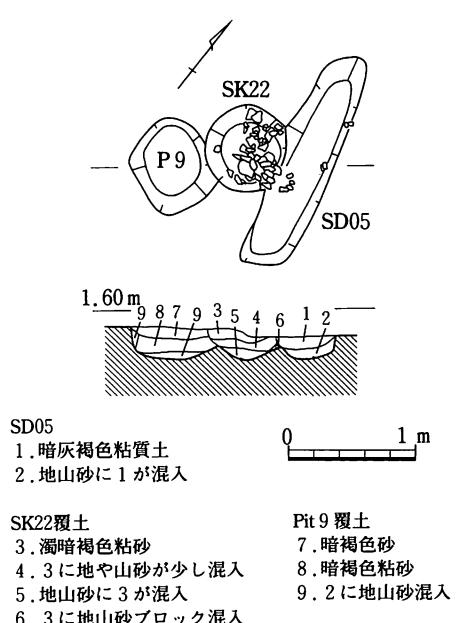


第27図 SK14 · 17(1/60)

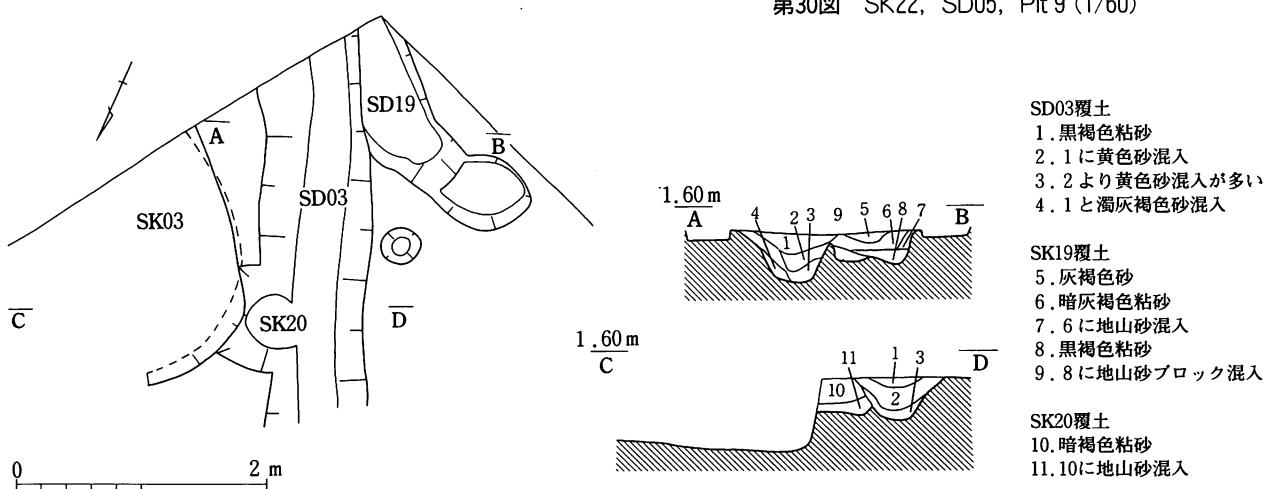


第28図 SK15(1/60)

第29図 SK16, Pit10 · 11(1/60)



第30図 SK22, SD05, Pit 9 (1/60)



第31図 SK19 · 20, SD03(1/60)

SK19 (第31、38図)

D-2区に位置する。部分調査であるが平面形は細長い歪な長円形を呈するものとみられる。2基の遺構が重複したものかもしれないが確認できなかった。規模は上端で幅0.58m、深さは段状になっていて上段で0.11m、下段で0.24mを測る。東側をSD03が切って流れる。遺物には口縁端部に刻み目、内面に縦方向の直線文、体部に直線文、波状文を施した小形の甕(98)や石鎌(100)などが出士した。本坑の所属時期は弥生時代中期中葉を考えている。

SK20 (第31図)

C-2区に位置する。東側がSK03、西側をSD03に切られ、平面形は不明である。深さ0.28mを測り、暗褐色粘砂の覆土である。出土遺物はなく時期の特定は困難であるが、切り合い関係から弥生時代中期中葉と考えられる。

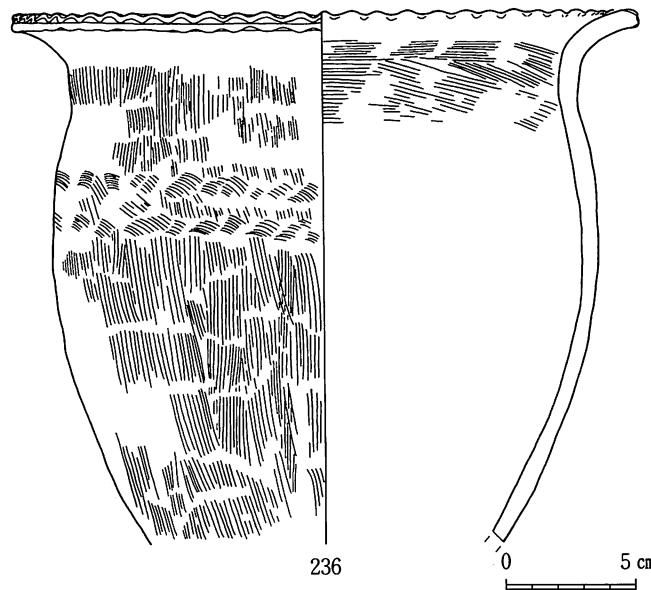
SK21 (第39、40図)

検出時は溝状であったが発掘を進める段階で底にいくつかの窪みがみられたのでそれぞれに遺構番号を付けた。これらの土坑を連結土坑群とした。この中で比較的広範囲なB・C-3区に位置するものをSK21とした。その中で北側をSK21-a、南側をSK21-bとした。東側を本坑を切ってSD03が流れる。北側が搅乱をうけるため規模は定かでないが、全長で3.30m以上測れる。SK21として取り扱った遺物は上層(第1~5、8~13層)から出土したものである。口縁端部に刻み目、外面に綾杉状に刻み目を施す壺の口縁小片(101)、波状口縁の甕(102)、口縁付近に2個1対の小孔が穿たれた鉢(103)がある。この鉢と同一個体(接合)がSD03から出土した。この他に欠損した石鋸などが出土した。

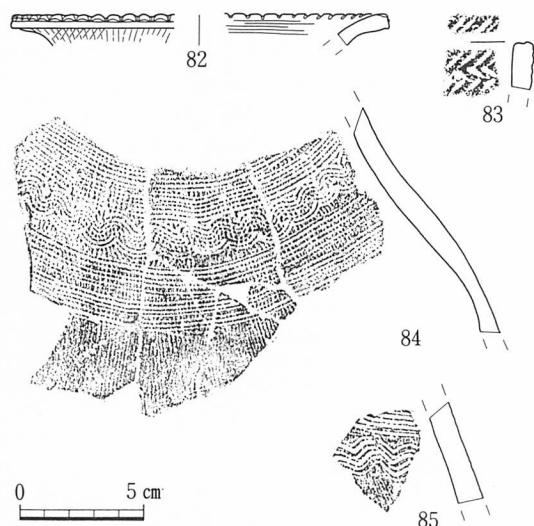
SK21-aは平面形が歪な楕円形を呈し、規模は1.37×0.82m、上端からの深さで0.35mを測る。坑底は比較的に平坦である。遺物は底部片など少量が出土した。

SK21-bは南側に同じ連結土坑群のSK25に接している。土層観察で本坑がSK25を切っているのが確認された。平面形は楕円形を呈し、規模は残存で1.75×1.04m、深さ0.29mを測る。SK21の坑底からの深さは0.13mで平坦な坑底である。遺物には口縁端部に刻み目を施す甕(108・110)や波状口縁の甕(109)の他に底部とした112は指オサエで成形された小形のもので支脚とも考えられる。土製の紡錘車も出土している。

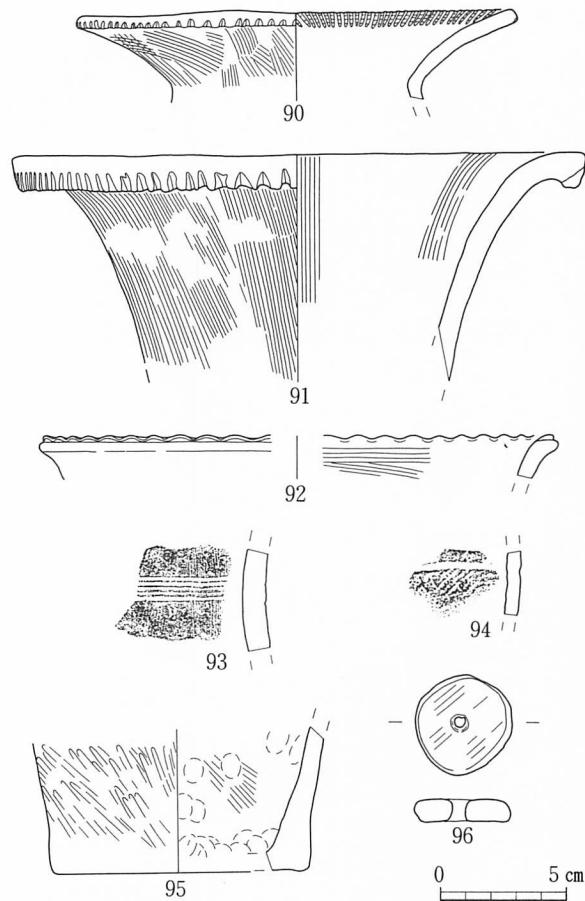
土層観察ではSK21-aがSK21-bを切っていることが判るがこれらは一連の土坑であるとみ



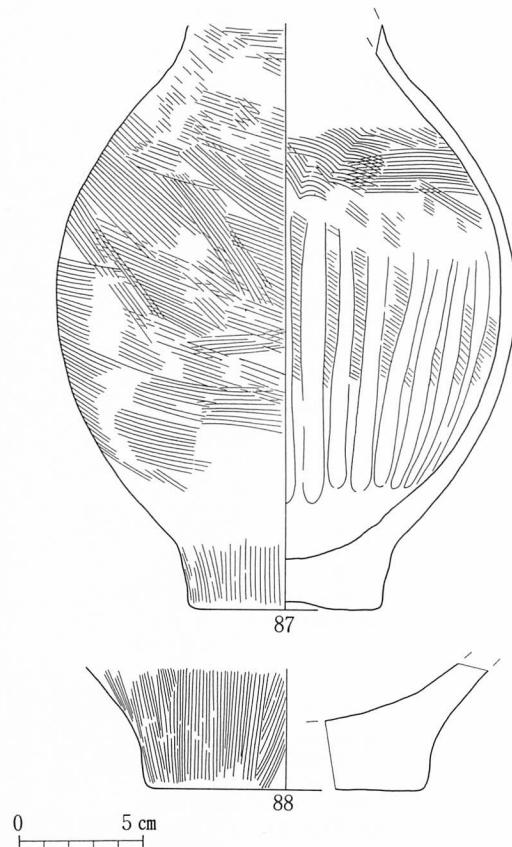
第36-2図 SK17出土遺物(1/3)



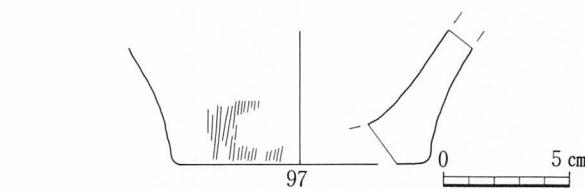
第32図 SK13出土遺物(1/3)



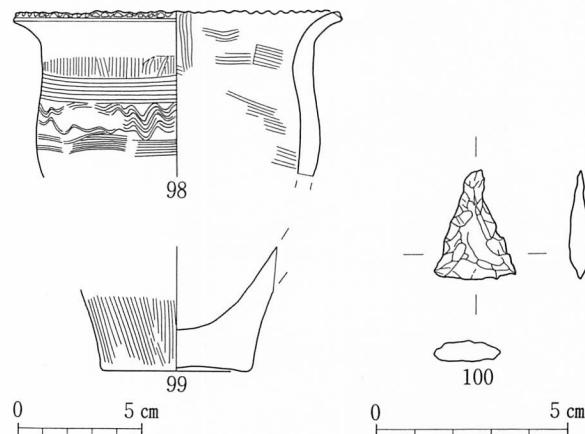
第36図 SK17出土遺物(1/3)



第33図 SK14出土遺物(1/3)

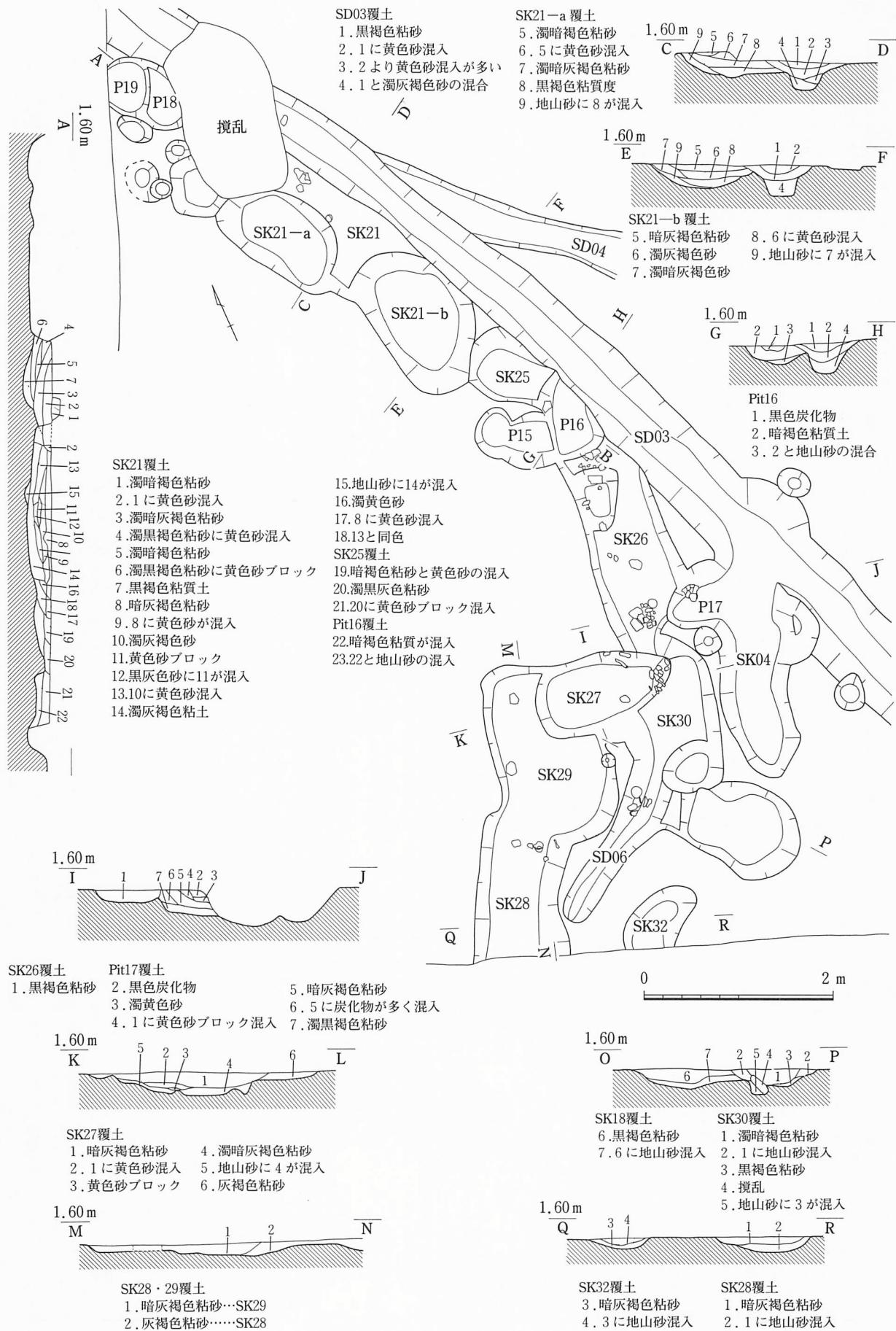


第37図 SK18出土遺物(1/3)

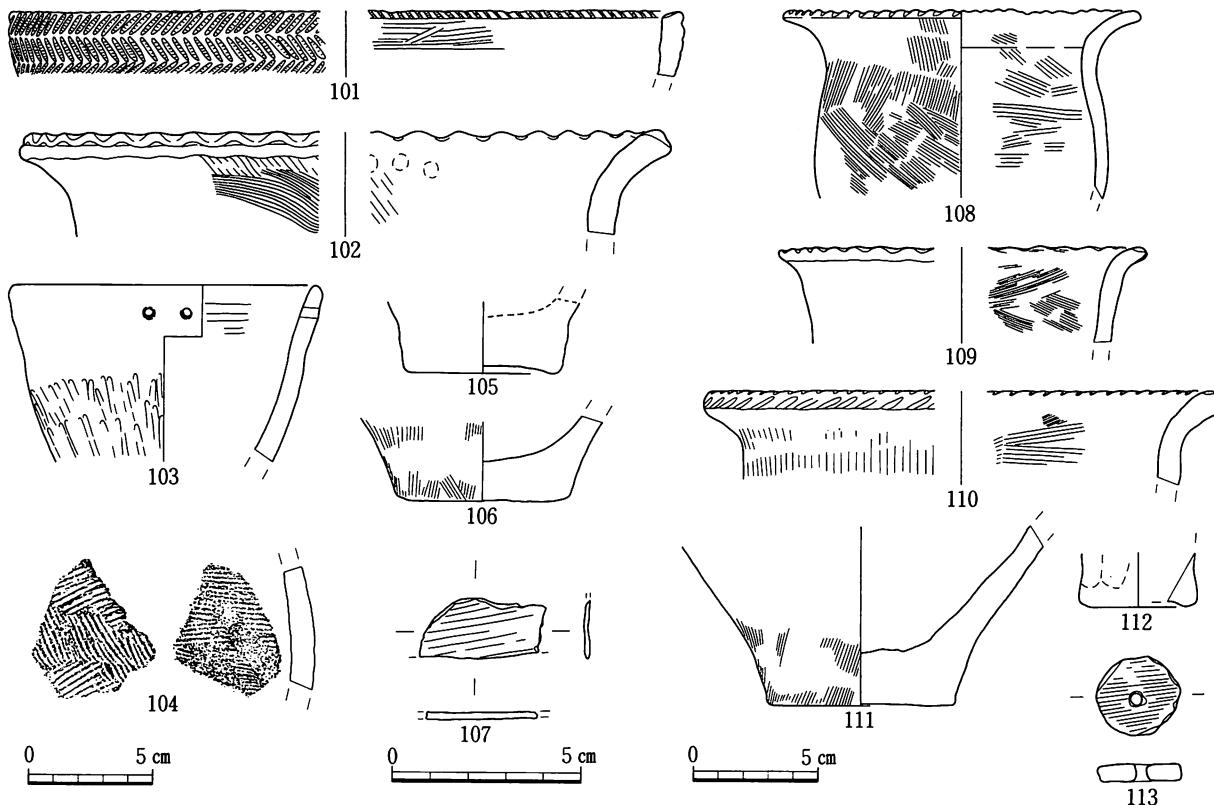


第34図 SK15出土遺物(1/3)

第38図 SK19出土遺物(1/3・1/2)

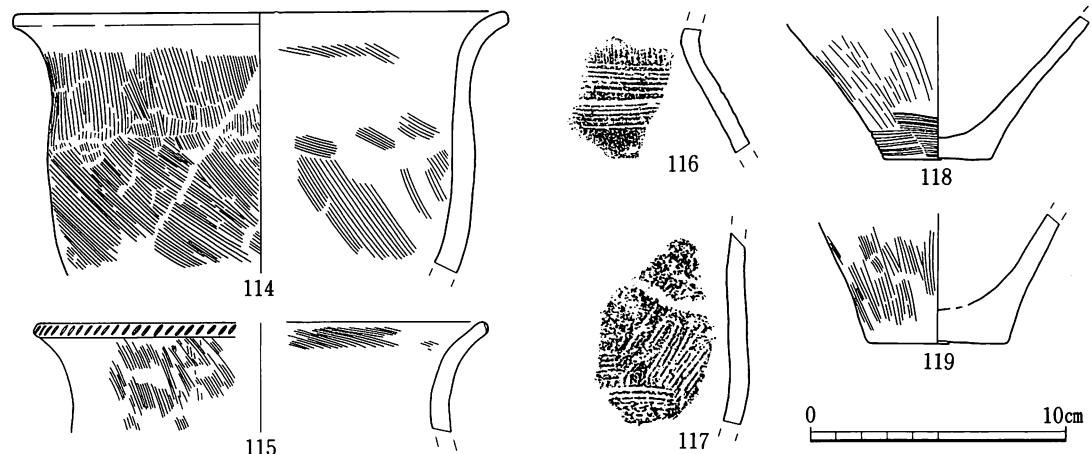


第39図 連結土坑群[SK18-21, 25-30, 32, Pit15-19] (1/60)



第40図 SK21出土遺物(1/3·1/2)

第41図 SK21-b 出土遺物(1/3)



第42図 SK22出土遺物(1/3)

られ、所属時期は同じ弥生時代中期中葉が考えられる。

SK22（第30、42図）

B-3区とC-3区の境界に位置する。平面形は円形を呈する。規模は上端で径0.67m、検出面からの深さが約0.20mを測る。北東側をSD05が切り込み、南西側はP9と接する。遺物は濁暗褐色粘砂（第4層）である最上層から出土した。調査で検出された遺構は当時の生活面での検出は大変にむずかしく、本坑のように土器が検出面より浮き上がった状態で検出されたものも多かった。土器は小片となったものがほとんどで、内外面をハケ調整される甕で口縁端部に刻み目が施されないもの（114）と施されたもの（115）がある。他に体部（116）や底部近くに直線文を施す小片などが出土した。所属時期は弥生時代中期中葉である。

SK23（第43、44図）

C-3区に位置する。平面形は長方形を呈する。規模は上端で1.33×0.86m、深さ0.28mを測る。黒褐色粘砂（第2層）より多くの土器が出土した。120は外方へ水平に開く口縁で胴部がやや膨らむ搬入品とみられる甕である。内外面がハケ調整で体部に櫛描の刺突文が施される。121はハケ調整される甕である。体部上半に煤が付着し、使用痕が明瞭に残っている。この他に口縁端部に刻み目を施す甕（122、123）や櫛描波状文、直線文、三角刺突文を施す壺の体部小片（124）などが出土した。所属時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

SK24（第43、45図）

C-3区に位置する。平面形が方形を呈し、上端での規模は2.12×2.20m、深さ0.28mを測る。本坑の北側中央にSD07が切り込んでいて、南側はSK29と接する。覆土は暗灰褐色の粘砂で坑底は平坦である。遺物にはミガキ調整される鉢（134、143）、突帯や口縁部に刻み目を施すものや、櫛描の直線文、波状文、廉状文を組み合せたもの（139）、扇形文、擬流水文を施す体部小片などが出土した。本坑の所属時期は弥生時代中期中葉である。

SK25（第39、46図）

B・C-3区に位置する連結土坑群の一つである。北側がSK21、南側にP16が接し東側をSD03が流れる。平面形は不明で深さが0.18mを測る。遺物には口縁に刻み目が施される甕（146）などがあるが出土量は少ない。本坑の所属時期はSK21などと同様である。

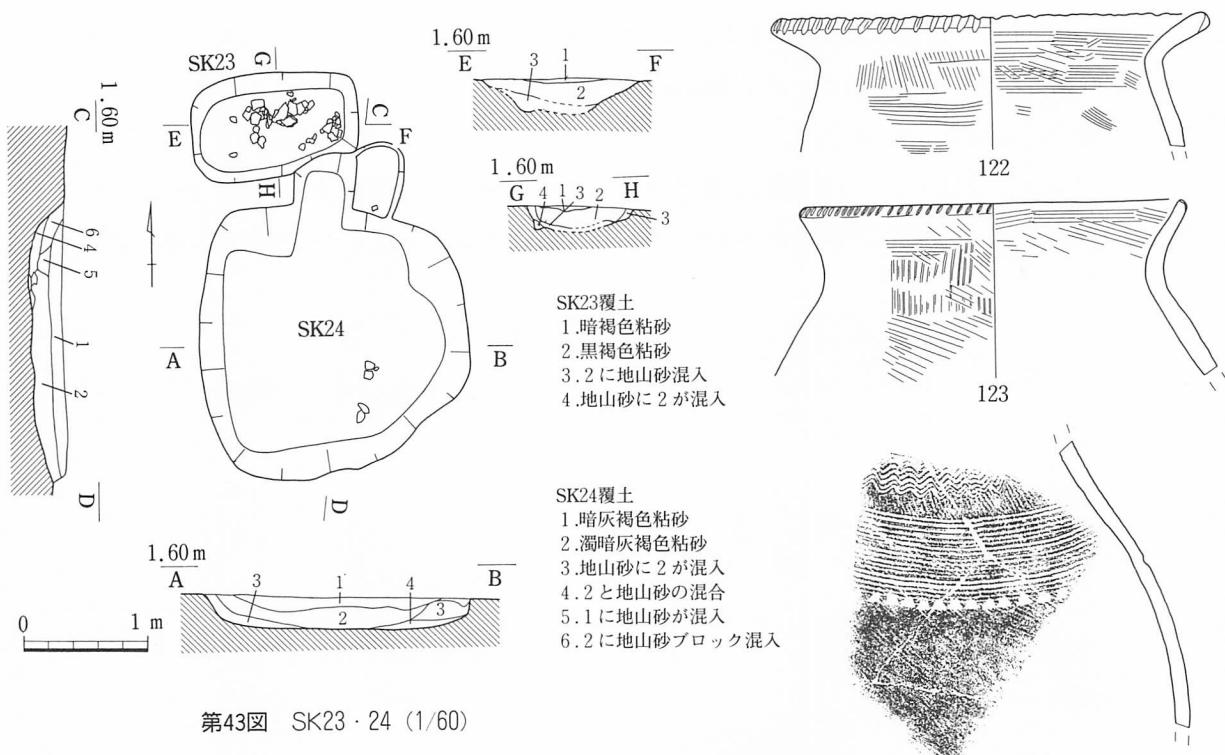
SK26（第39、47図）

C-2・3区に位置する。同じく連結土坑群である。上端での幅が約1.00m、深さ0.14mを測る。覆土は黒褐色粘砂の単層で、口縁端に刻み目を施す甕（148）や円錐形突起を貼付する壺（149）、甕の底部を穿孔し餌としたもの（150）などが出土した。

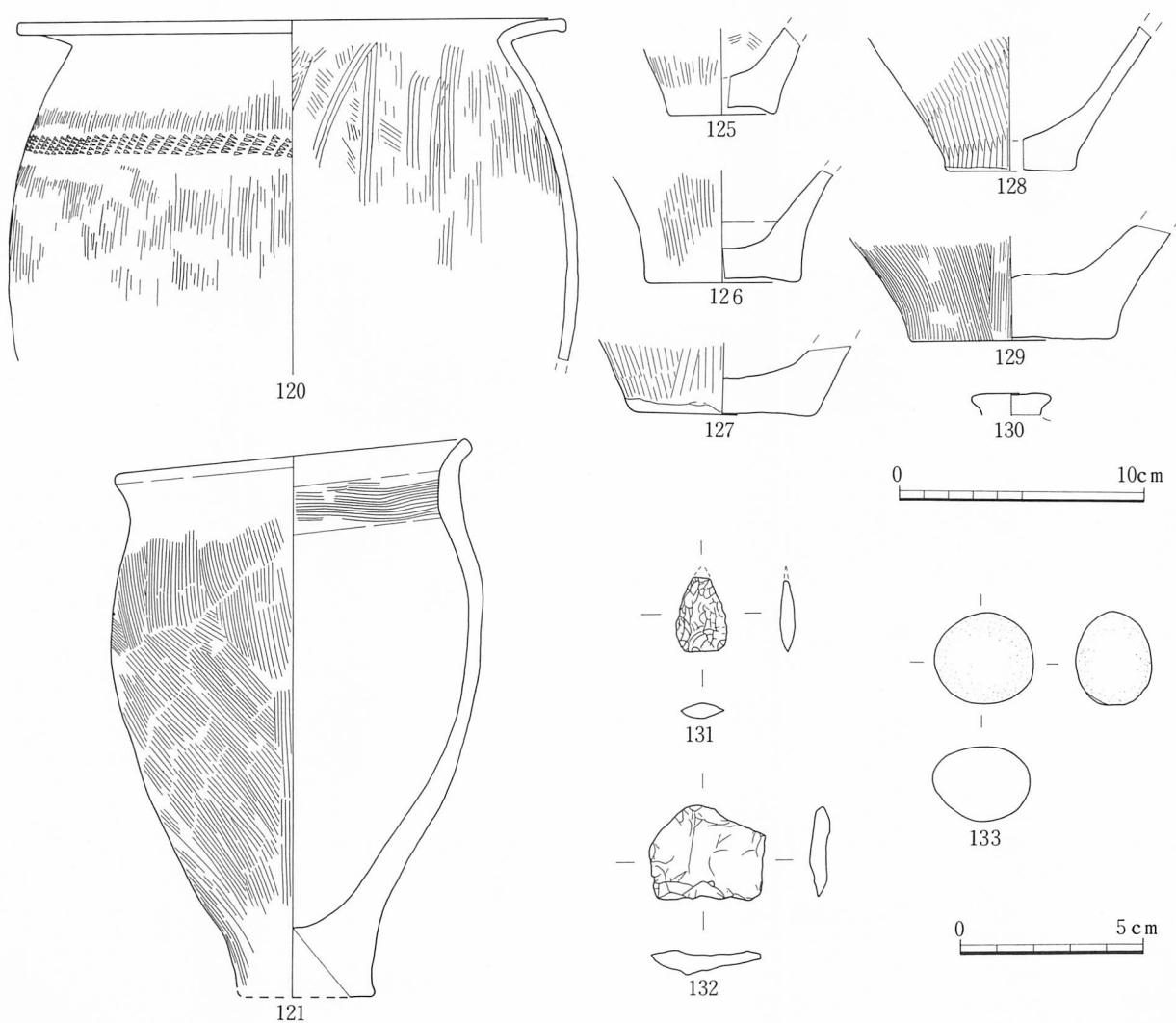
SK27（第39、48図）

C-2・3区に位置する。連結土坑群の中にあって平面形の長軸方向が直交する土坑である。上端で1.68×1.02m、深さ0.26mを測る。遺物は波状口縁の壺（153）、内傾する口縁で端部に刻み目を施す鉢（154）、櫛描文様が施される壺（155）、口縁に刻み目をもつ甕（157、158）などがあり、また緑色凝灰岩で玉の未製品が1点出土した。所属時期は弥生中期中葉と考えられる。

SK28（第39、49図）



第43図 SK23・24 (1/60)

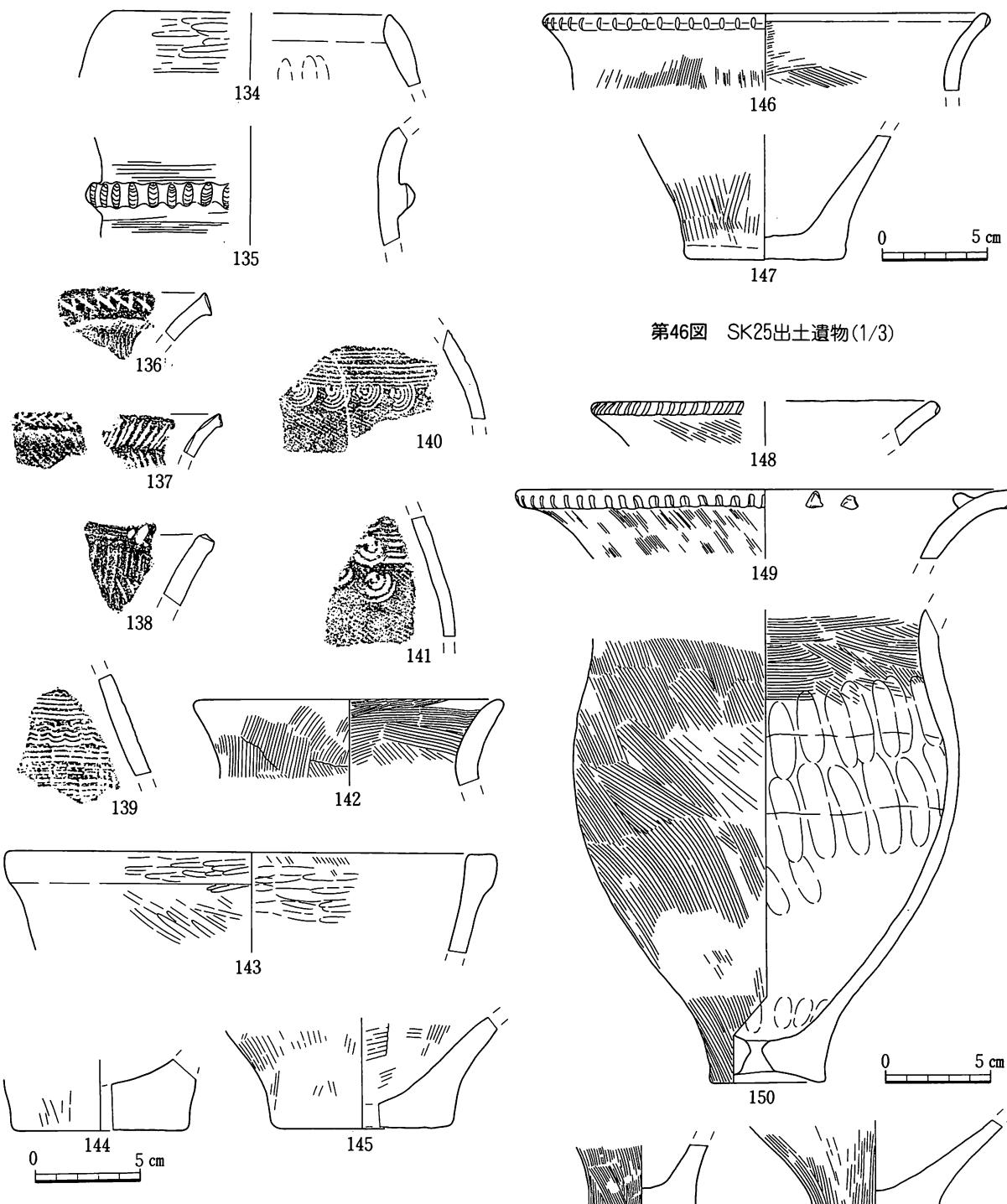


第44図 SK23出土遺物 (1/3・1/2)

D-3区に位置する。部分調査で平面形は不明であるが、溝状に長い土坑とみられる。上端での幅0.96m、深さ0.16mを測る。出土遺物は少量である。

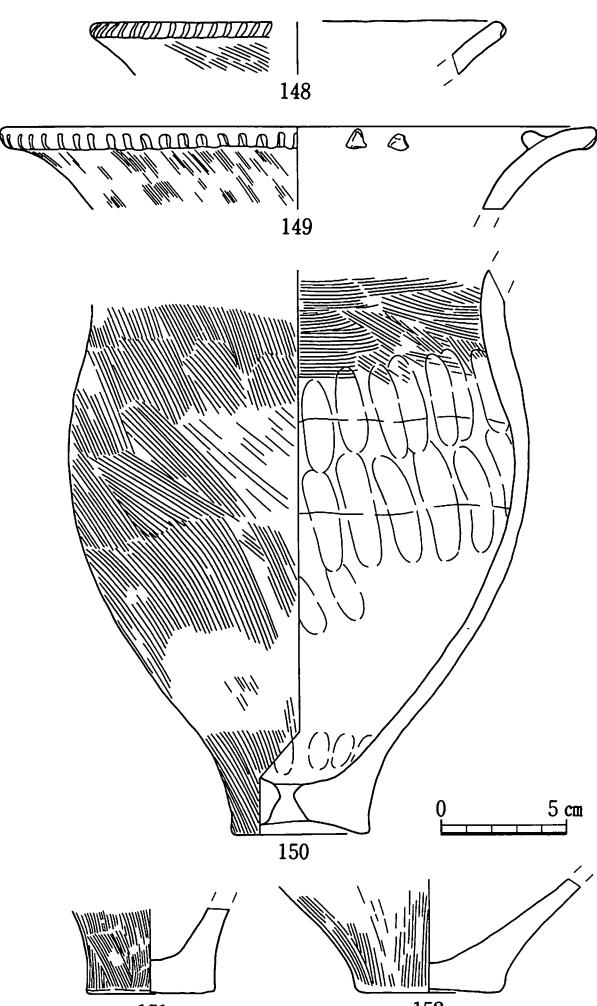
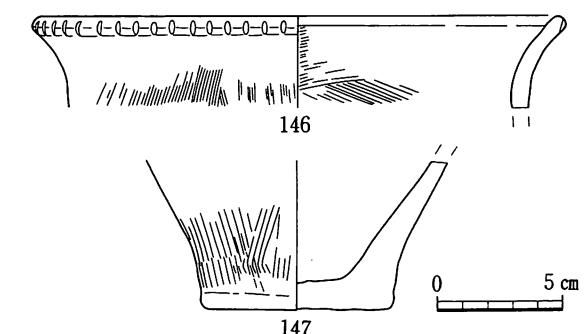
SK29 (第39、50図)

C・D-3区に位置する。平面形は台形を呈するものとみられ、規模は上端で2.05×1.24m、深さ0.12mと浅い。SK27に切られ、SK24、28に接する。遺物は少なく、口縁端部に格子状の刻

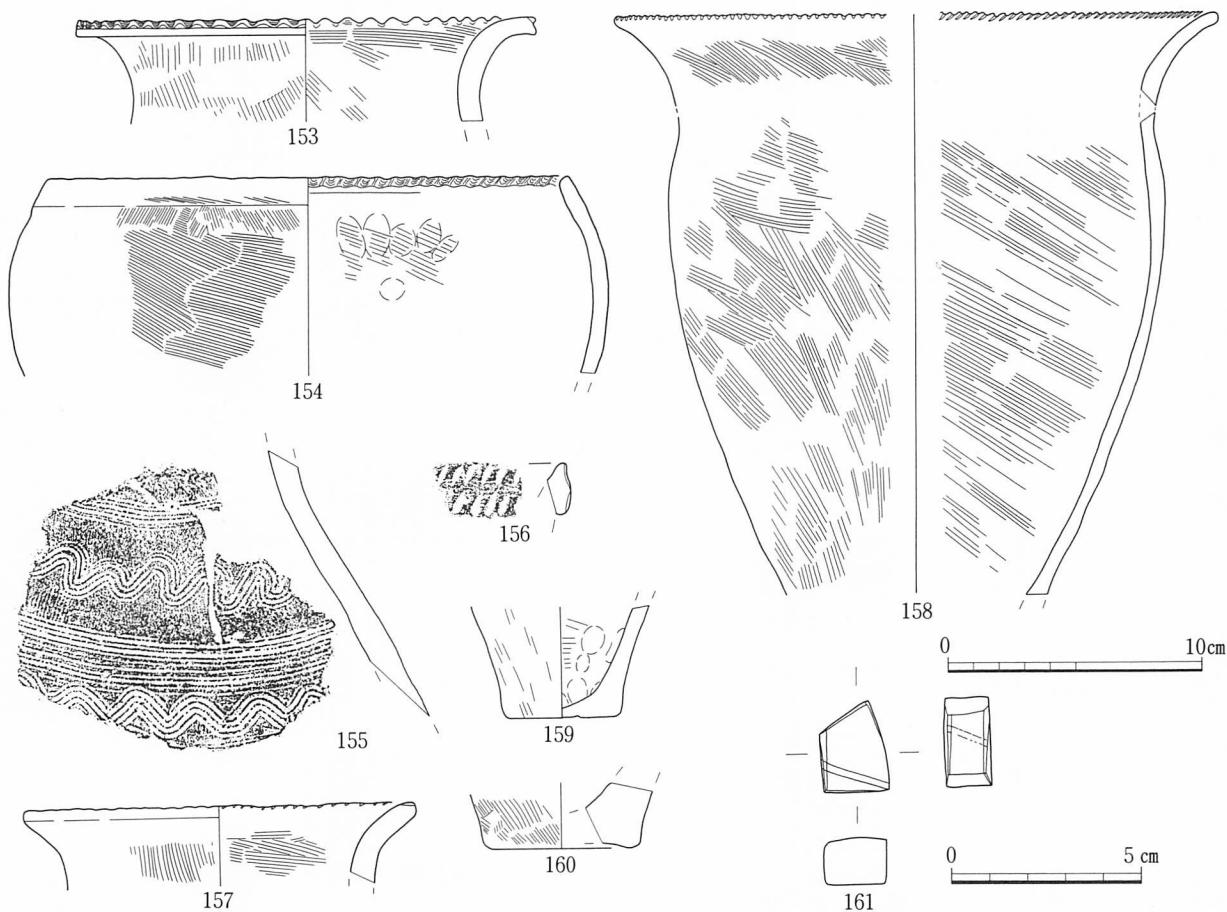


第45図 SK24出土遺物(1/3)

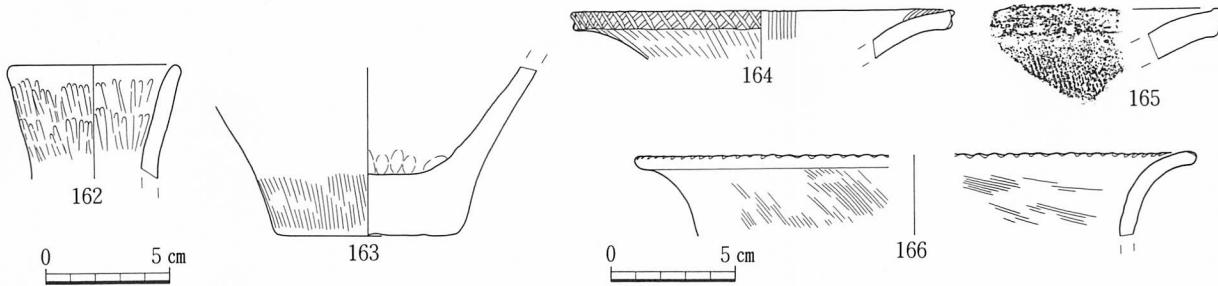
第46図 SK25出土遺物(1/3)



第47図 SK26出土遺物(1/3)



第48図 SK27出土遺物(1/3·1/2)



第49図 SK28出土遺物(1/3)

第50図 SK29・30出土遺物(1/3)

み目と内面に縦方向に櫛描が施された壺（164）などがある。

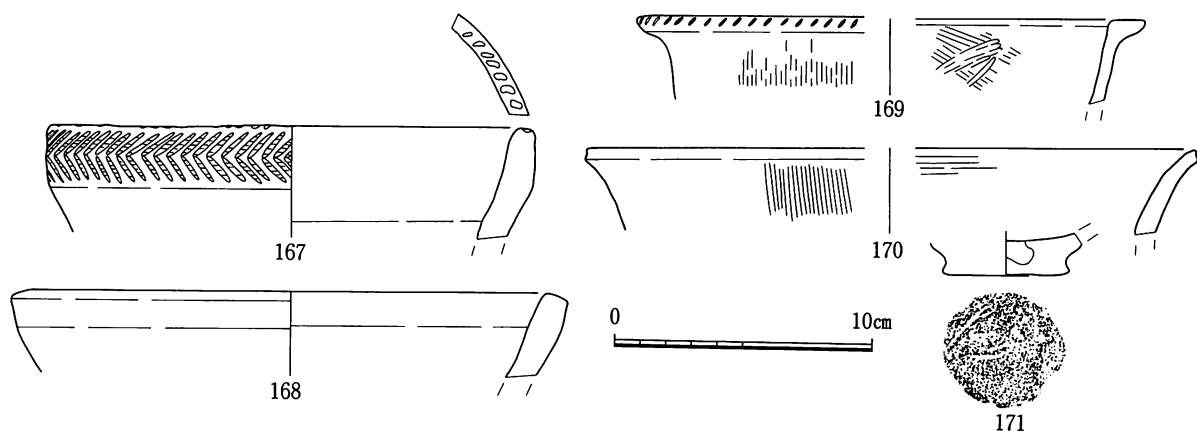
SK30（第39、50図）

C-2区に位置する連結土坑の一つである。深さ約1.20mを測る。遺物は少なく図示できたのは口縁に刻み目を施す甕（166）1点だけである。

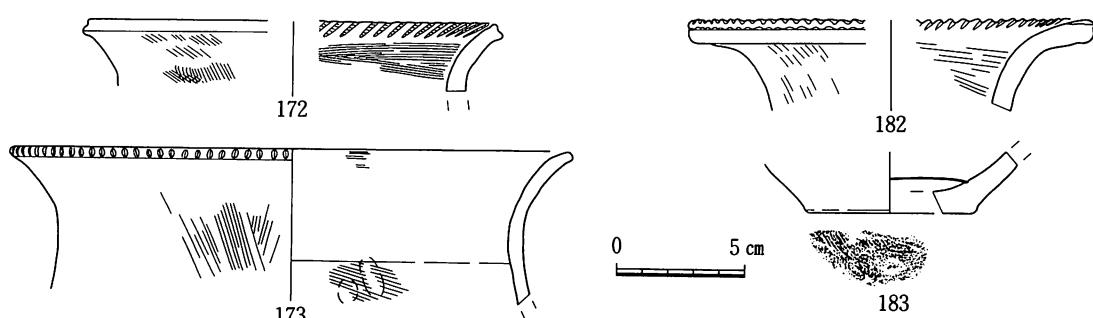
SK31（第5・6図）

B・C-4区に位置する。部分調査で排水用の溝を設けた時に掘削してしまった土坑である。覆土は主に暗灰褐色粘砂である。遺物はない。

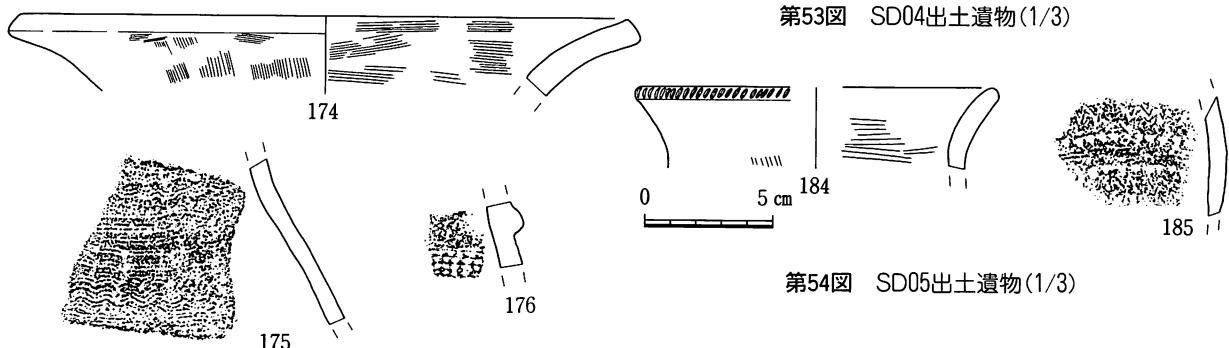
SK32（第39図）



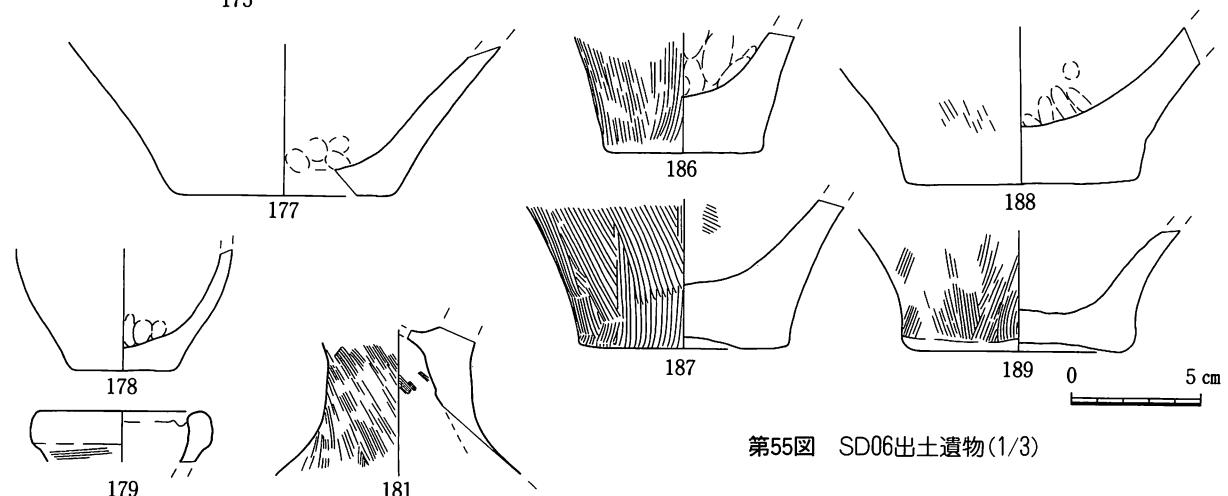
第51図 SD01出土遺物(1/3)



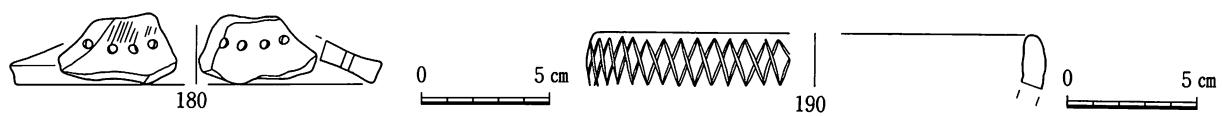
第53図 SD04出土遺物(1/3)



第54図 SD05出土遺物(1/3)

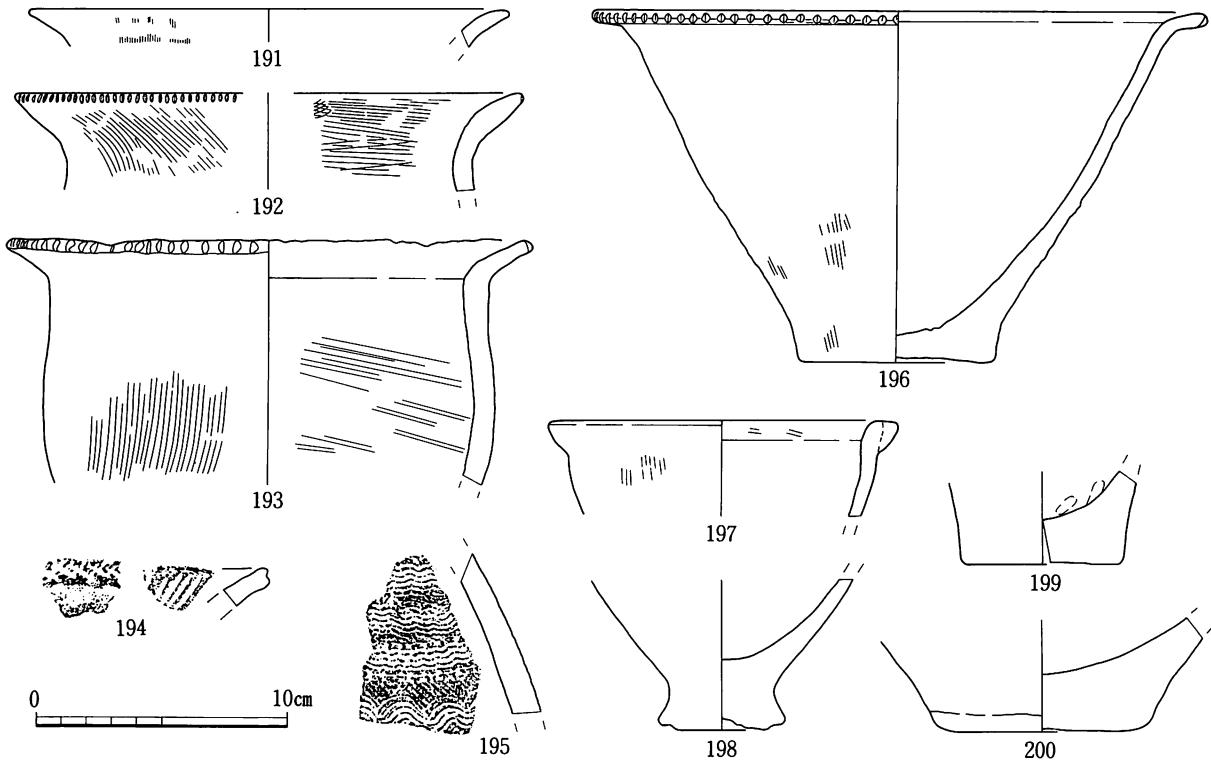


第55図 SD06出土遺物(1/3)



第52図 SD03出土遺物(1/3)

第56図 SD07出土遺物(1/3)



第57図 各 Pit 出土遺物(1/3)

D-2区に位置する。部分調査で平面形は不明である。上端での幅0.52m、深さ0.11mを測る。遺物は土器の細片が少量出土した。

3. 溝状遺構

SD01 (第6、7、51図)

調査区の北側を北西から東へ緩やかに湾曲して流れる溝である。上端での幅は1.3m前後、深さ0.24~0.27mを測る。覆土は濁灰褐色粘質土で上面を青灰色砂と黄灰色粘土で埋られていた。SK01に切られる他は全ての遺構を切っている。遺物は弥生土器と土師器(171)などが出土地した。本溝の所属時期は平安時代後半以降と考えられる。

SD02 (第6図)

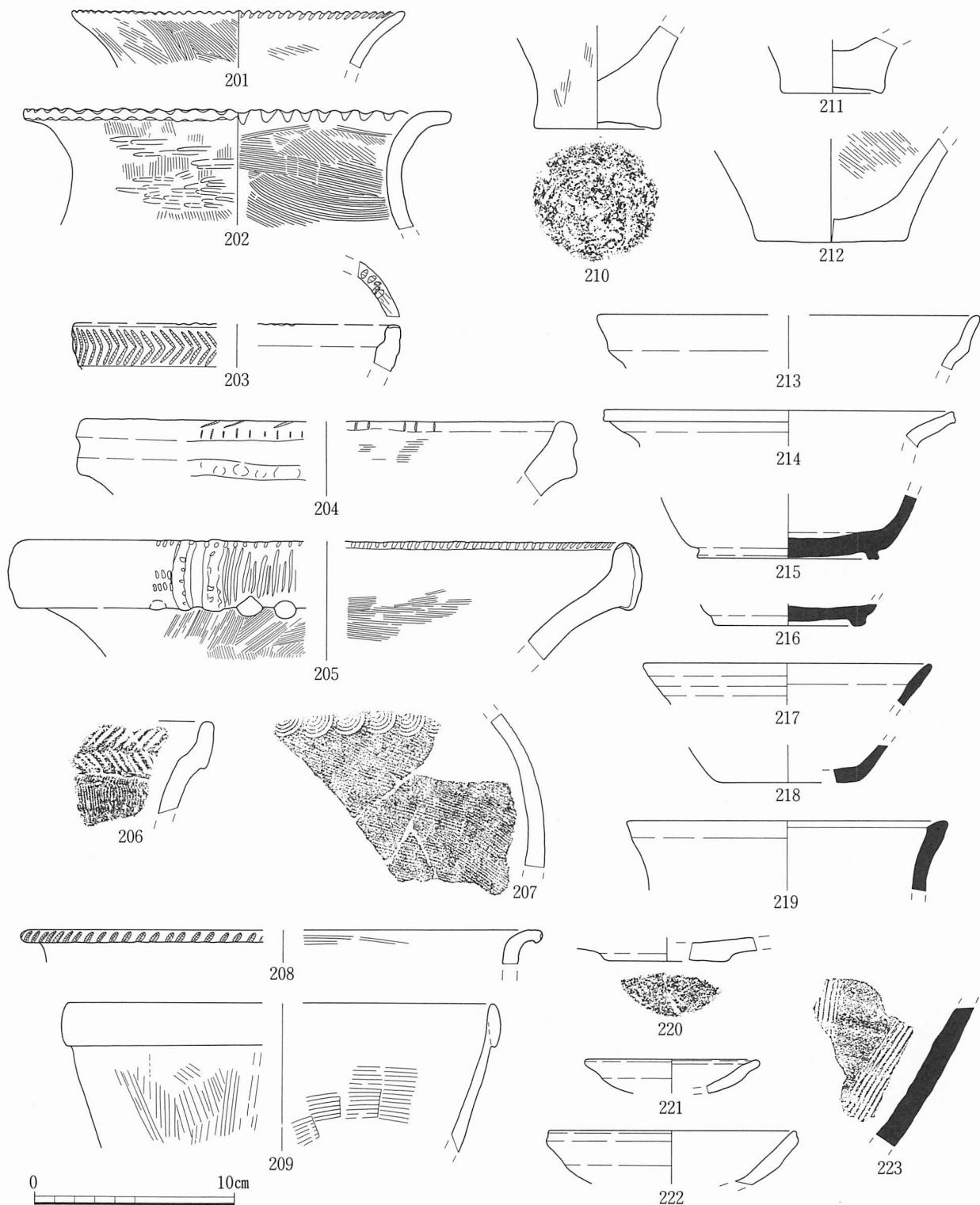
A・B-2区に位置する。北東からSD01に流れ込む溝である。上端で幅は1.1m前後、深さ0.15m前後を測る。SD01と同時期と考えている。

SD03 (第31、39、52図)

本調査区を対角線状に南北に伸びる溝である。上端の幅0.7~0.8m、深さ0.35~0.40mを測り、溝底の高低は少ない。遺物には口縁に刻み目を施す甕(172、173)や直線文、波状文を施す壺(176)などがある。本溝の所属時期は弥生時代中期後葉と考えている。

SD04 (第6、53図)

B-2・3区を南東から北西に伸びる浅い溝である。本溝の所属時期はSD01とほぼ同時期と

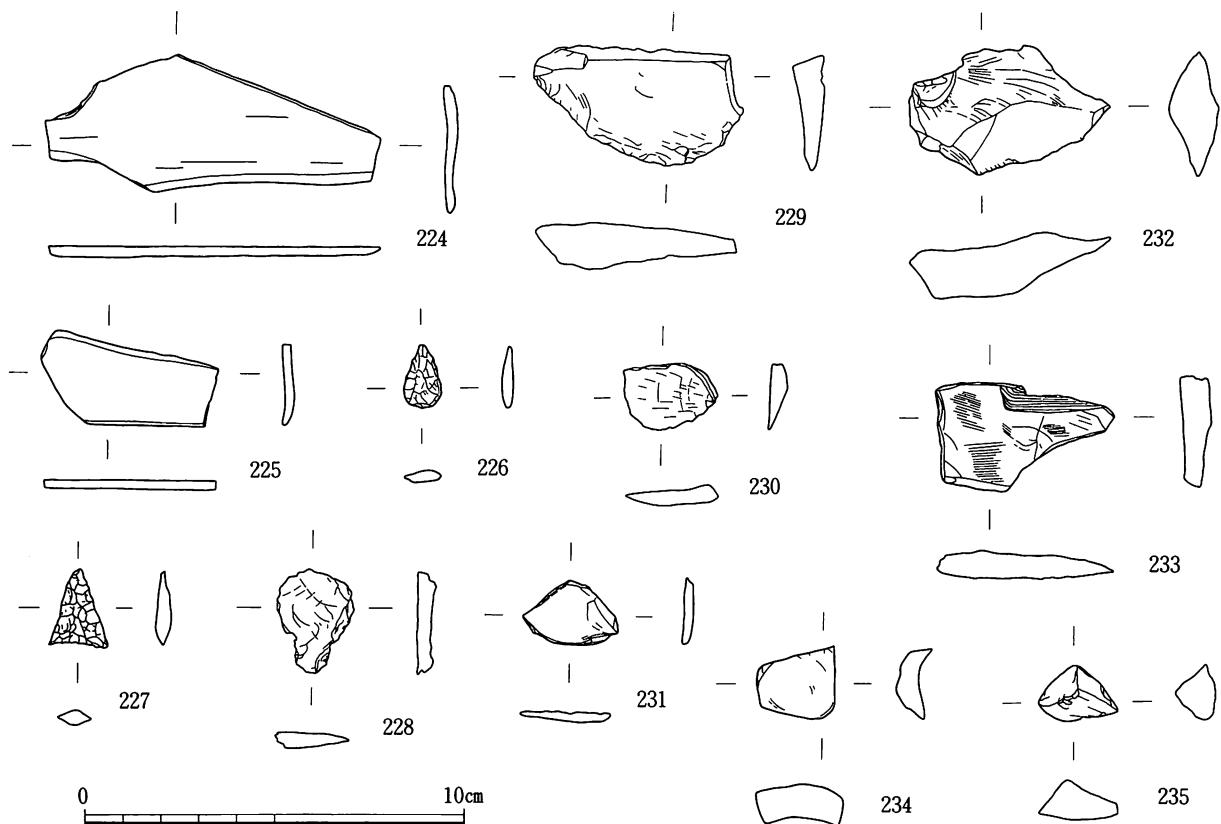


第58図 包含層出土遺物 1 (1/3)

考えている。

SD05 (第30、54図)

B・C-3区を南北に伸びる。本来はSD07と続く溝であったと考えられる。SK22を切り、覆土は暗灰褐色粘質土である。弥生時代中期の土器が出土した。



第59図 包含層出土遺物 2 (1/3)

SD06 (第39、55図)

D-3区に位置する。連結土坑群から南西へつながる溝である。弥生土器の底部片や炭化物と骨片が出土した。本溝は連結土坑群と一体のものと考えている。

SD07 (第43、56図)

C-3区に位置する。前述したとおり、SD05と続く溝と考えられる。口縁部に格子状の刻み目が施された壺（190）とおもわれる口縁片がある。

4. その他の遺構と遺物

ピット (第6、22、29、30、39、57図)

ピットは直径約0.2~0.6m、深さ0.5~0.3mで平面形が円形や楕円形のものが多い。遺物は土器の細片が少量出土するものがほとんどであったが、P17からは口縁部に刻み目を施す「逆八の字」に開く鉢（196）が出土した。

他の遺物 (第58、59図)

遺構検出時に出土したものや境乱内からのものなど遺構出土以外の遺物をすべて包含層出土遺物とした。弥生時代中期の遺物が大半で硬玉（ヒスイ）の原石や碧玉原石、その他に弥生時代後期末葉の土器、須恵器の杯や瓶、土師器の底部、中世土師器の皿、珠洲焼の鉢などの小片がある。

IV おわりに

本調査区から検出された土坑は32基である。平安時代以降と見られる土坑が5基、弥生時代後期が2基でその他は弥生時代中期である。ここで検出資料が最も多かった中期の遺構と遺物についての調査成果を若干述べておわりとしたい。

数多く検出された土坑で連結土坑群としたものがある。部分調査で全体をうかがうことはできないが、周溝をともなう平地式建物と考えている。遺構名でSK18、21、23~30、32、SD05、06、P15、16、26などがそれにあたる。内径は推定で10m前後で深さが約10~30cmである。周溝の内側にはピットが検出されているが規模で径50cm前後、深さ30cm前後のもの(P20、29、33)と径が30cm前後、深さ20~30cmのもの(P21、22、28、30~33)がある。主柱穴を前者と考えているがおそらく6本ないしそれ以上の「多主柱穴」になっているものとみられる。この周溝をともなう平地式建物については「上荒屋遺跡I」^{注(1)}でこれまで確認されている弥生時代の建物跡をあげて詳しく考察されている。周溝については『ほとんどの建物でいわゆる「土坑が連なった状態」で、周溝の幅、深さともひとつの溝でかなり幅のある数値となっている。このことから周溝が当初から溝として作られたのではなく壁、あるいは周堤を作るため周囲から土を取った結果、土坑状となり……上屋の構造と共に考える必要がある。』と考察している。本調査区で検出した連結土坑群も当然同様な意図で掘削されたものである。この他にも同様な土坑とみられるものがあるが判然としない。吉崎・次場遺跡からこれまで周溝をともなう平地式建物は、第13次調査で後期に属するものが2棟^{注(2)}、第14、15次調査(史跡指定地)で中期のものが3棟^{注(3)}が確認されている。

一方遺物をみると、従来弥生時代中期の土器は畿内Ⅱ様式土器の影響下にあるものを矢木ジワリ式、Ⅲ様式にほぼ併行するものを小松式、Ⅳ様式併行土器を戸水B式としている。増山氏は「小松式土器の再検討」^{注(4)}で畿内第Ⅱ様式~第Ⅲ様式期を1~5期の5段階に細分する編年案を提示している。ここで本調査区出土土器を増山編年に従ってどの位置に対応するかについて簡単に触れておきたい。

SK21、22の中に若干条痕文系土器が含まれるが櫛描文系土器と口縁端部に刻み目を施し、ハケメ調整されるものが大半を占めている。櫛描文系土器の文様構成は直線文を主体として波状文、簾状文、扇形文、擬流水文、三角形刺突文などを組合せるものがみられるが4期に盛行する北陸独自の文様とされる斜行短線文が含まれていなく、壺や甕の口縁内面に施される綾杉状刺突も僅かにみられるが極めて少ない。^{注(5)}器種は壺と甕と鉢であるが壺の中に無頸壺が1点みられる。以上のことから本調査区で検出された中期の土坑出土土器は3期を中心とした土器群で、また3期から4期への過渡的な要素を含む土器もあり、3~4期を整理する上でその一端を示す資料と考えている。また120の甕は中国地方の特徴をもつ資料^{注(6)}で他にも数は少ないと搬入品とみられるものが数点あり遠方との地域間交流がうかがえる。

その他では、北陸地方は玉作りの盛んな地域であるが本遺跡からもこれまで数々の玉作り関係

の遺物が出土している。今回の調査からも硬玉（ヒスイ）原石や碧玉原石、玉の末製品、石鋸など玉作りや石器製作を裏付ける資料が得られた。

最後になったが今回、南端にあたる本調査区から居住域（建物跡）が検出されたことで、現次場町集落の東端から現在「吉崎・次場弥生公園」として保存・整備事業が進められている史跡指定地周辺にまで拡がる弥生時代中期の集落構造の一端を知ることができた。集落の中心は指定地から次場町内に位置するという条件はあるが今後、序々に集落の構造があきらかになるものと期待している。

以上、簡単に調査成果を述べてきたが勉強不足で報告に不備な点が多くあることに深く反省するものである。本書を作成するにあたって、久田正弘・安 英樹両氏より有益な御教授をいただいた。深く感謝する次第である。

註

- (1) 久保有希子『上荒屋遺跡Ⅰ』第1分冊 弥生時代編 1995 金沢市教育委員会
- (2) 今井淳一『吉崎・次場遺跡』第13次発掘調査 1994 石川県羽咋市教育委員会
- (3) 今井淳一『石川考古』第241号「羽咋市史跡吉崎・次場遺跡の保存・整備事業」 1997 石川県考古学研究会
- (4) 増山 仁『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌第32号「小松式土器の再検討—小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理—」 1989 石川考古学研究会
- (5) 4期の標式となっている吉崎・次場遺跡Ⅰ—4号溝（福島1987）では斜向単線文、綾杉状刺突を施すものが多くみられる。
- (6) 久田正弘氏より教示。

市内遺跡発掘調査（1998） 吉崎・次場遺跡第16次調査 出土遺物観察表

凡 例

- 番 号** 上段に挿図番号、下段に遺物番号（通し番号）を記入した。
- 出土地点** 上段に出土遺構名またはグリッド名を、下段には取り上げ番号を記入し、ないものまたは不明なものは空白とした。
- 器 種** 弥生土器以外は上段に須恵器、土師器の別を、下段に器種を記入した。
- 法 量** A：口径、B：頸部径、C：体部最大径、D：底径、H：器高で法量（cm）を記入した。石製品等は長さ等を直接記入し、＊印は残存長である。
- 成形・調整** 主として器面内外の最終調整を3部分に分けて記入した。空白は磨耗等で不明なものである。
- 色 調** 『新版標準土色帳』をもとに以下の5グループに分けた。
a：赤色系統—赤橙・赤灰色等
b：黄橙色系統—浅黄橙色等
c：黄褐色系統—黄褐・灰褐色
d：黄色系統—灰白・浅黄色
e：灰色系統—暗灰色
- 胎 土** 砂：砂粒、海：海綿骨片、焼：焼土塊について、その大きさと量を裸眼とルーペ（10×）で観察した。ここでの砂粒とは石英・長石、雲母、岩石粒等の総称である。大きさは1.0mm～2.0mmをMとし、それ以上をL、それ以下をSとし、量は全体を主観的に通有量と思われるものを3：基準に、5：非常に多い、4：多い、2：少ない、1：非常に少ないと表記し、不用なものは空白とした。
- 特記事項** 文様、記号などその他の観察事項を記入した。

出土遺物観察表1

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	成形部 位 外 面 内 面	調整 外 面 内 面	色 調 胎 土	外面/内面 存度	文様、記号、その他特記事項
第9図 1	SK01	鉢	A17.8	口頸部 ハケメ/ナデ、指押え 体部 ハケメ/ナデ、指押え	c/c 砂S2、海2、焼1	1/6	口縁部に綾杉状の刻み目。	
第9図 2	SK01	壺	A9.6	口頸部 ナデ/ナデ	c/c 砂M4、海2、焼1	1/5		
第9図 3	SK01	(底部)	D6.8	底部 ナデ/ナデ	b/e 砂S2、海5、焼0	底部 1/6		
第9図 4	SK01	(底部)	D8.2	底部 ナデ/ナデ	c/c 砂L3、海3、焼0	底部 1/4	黒斑。	
第9図 5	SK01	石錐	長さ3.6 幅1.7 厚さ0.5 重量3.7g					輝石安山岩。
第9図 6	SK01	須恵器 杯	A12.8 D8.0 H3.8	体部 回転ナデ/回転ナデ 底部 ヘラ切り/回転ナデ	e/e 砂S2、海2、焼	1/12 底部1/4	外面底部に数条のヘラ痕。	
第9図 7	SK01	須恵器 杯	D8.4	底部 ヘラ切り/回転ナデ	e/e 砂S2、海3、焼	底部 1/4		
第9図 8	SK01	須恵器 甕		体部 タタキ/タタキ	e/e 砂S2、海2、焼			
第10図 9	SK03	甕	A16.2 B14.6	口頸部 ナデ/ナデ、細かいハケメ 体部 ハケメ/細かいハケメ?	c/c 砂M3、海2、焼	1/12	口縁部に刻み目、外面と内面口頸部 に煤付着。	
第10図 10	SK03	壺	A14.8	口頸部 ハケメ/ナデ	d/d 砂M2、海、焼	1/12	口縁部に刻み目。黒斑あり。	
第10図 11	SK03	鉢		口頸部 ナデ/ナデ	b/b 砂M3、海3、焼1	小片	口縁外面に綾杉文(ハケ)。	
第10図 12	SK03	(底部)	D4.6	底部 ナデ/ナデ	c/d 砂M2、海1、焼	底部 1/2		
第11図 13	SK04	壺		体部 ナデ/ナデ	d/d 砂S3、海2、焼2	細片	棒状具(2本結束)による刺突文。 弧線文。	
第11図 14	SK04	甕		体部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂M3、海3、焼	細片	外面に煤付着。	
第13図 15	SK05	鉢?		口頸部 ナデ/ナデ	d/c 砂S2、海1、焼	小片	口縁外面に5条の凹線。外面赤彩。	
第13図 16	SK05 P-1	高杯	A15.4	杯部 ヘラミガキ/ヘラミガキ	c/c 砂S1、海2、焼	1/6	口縁部に黒斑。	
第13図 17	SK05	壺	D4.6	体部 ナデ/ナデ	c/e 砂L3、海4、焼		櫛描直線、波状文。	
第15図 18	SK06-a P-2	壺	A15.4 B9.2	口頸部 ハケメ/ハケメ 体部 ハケメ/指頭ナデ、ハケ	c/c 砂L4、海3、焼	5/12	口縁部に刻み目。	
第15図 19	SK06-a	壺	B12.0	頸部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂L3、海3、焼		櫛描直線、簾状、波状、扇形文。	
第15図 20	SK06-a	甕	A19.2 B16.6	口頸部 ハケメ/ハケメ 体部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂S2、海2、焼	3/12	口縁部に沈線付加後、波状口縁。 櫛描直線、波状文。外面体部に煤付着。	
第15図 21	SK06-a	甕		口頸部 ナデ/ナデ	d/d 砂M2、海2、焼	小片		
第15図 22	SK06-a	甕		口縁部 ナデ/ナデ	e/c 砂L3、海2、焼	細片	口縁端内外に刻み目(ハケ)。口縁 部内面に刻み目(ハケ)。	
第15図 23	SK06-a P-3	甕		口頸部 ハケメ、ナデ/ハケメ、ナデ	d/d 砂L2、海2、焼1	細片	口縁部に刻み目(ヘラ)。	
第15図 24	SK06-a	甕		口縁部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂L3、海、焼1	細片	口縁端内外に刻み目(ハケ)。	
第15図 25	SK06-a	甕		口縁部 ナデ/ナデ	d/d 砂M3、海、焼	細片	口縁部に刻み目(ヘラ)。外面に煤 付着。	
第16図 26	SK06-a	壺		体部 ナデ/ナデ	d/d 砂M3、海2、焼	小片	櫛描直線、波状文。	
第16図 27	SK06-a	壺		体部 ナデ、ミガキ/ナデ	c/c 砂M3、海4、焼	小片	櫛描波状、直線文。刺突文。黒斑。	
第16図 28	SK06-a	壺		体部 ハケメ、ミガキ/ハケメ	d/d 砂M3、海2、焼	小片	櫛描波状文。	
第16図 29	SK06-a	壺		体部 ミガキ/ハケメ	d/d 砂M2、海1、焼	小片	櫛描直線、波状文。	
第16図 30	SK06-a	壺		体部 ナデ/ナデ、ハケメ	c/e 砂M2、海2、焼	小片	櫛描直線、扇形文。	
第16図 31	SK06-a	壺		体部 ハケメ/ナデ	b/b 砂M3、海3、焼	小片	櫛描擬流水文。 外面に煤付着。	
第16図 32	SK06-a	壺		体部 ナデ/ナデ	b/b 砂L2、海2、焼	小片	櫛描直線、簾状文。	
第16図 33	SK06-a	壺		体部 /ナデ	d/d 砂S2、海2、焼	細片	竹管文。隆起上に刻み目。	
第16図 34	SK06-a	壺		体部 ハケメ/ハケメ	d/d 砂M3、海2、焼	小片	櫛描直線文。	
第16図 35	SK06-a	(底部)		底部 ナデ/ナデ	a/a 砂M3、海3、焼	底部 1/2		
第16図 36	SK06-a	(底部)	D5.6	底部 ナデ/ナデ	e/e 砂L2、海3、焼	底部 1/6		
第16図 37	SK06-a	(底部)	D7.0	底部 ナデ?/ナデ、指オサエ	a/e 砂M4、海3、焼	底部 1/2		
第16図 38	SK06-a	(底部)	D9.2	体部 ハケメ/ 底部 ナデ/	c/e 砂M3、海3、焼	底部 1/12		
第16図 39	SK06-a P-1	(底部)	D6.2	体部 ヘラミガキ/ヘラミガキ 底部 ナデ/ヘラミガキ	c/e 砂M3、海3、焼	底部 完形	黒斑。	

出土遺物観察表 2

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	成形・調整部 外面/内面	色調 胎土	外観度	文様、記号、その他特記事項
第16回 40	SK06-a	(底部)	D10.4	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ、指オサエ	c/c 砂L2、海3、焼	底部 1/6	
第16回 41	SK06-a	砥石	長さ*3.5 幅*3.2 厚さ*2.3 重量40.4g				
第16回 42	SK06-a	磨製 石斧 S-3	長さ*7.8 幅6.3 厚さ4.1 重量332.4g				大型蛤刃。
第17回 43	SK06-b	鉢	A10.0	口縁部 ナデ/ナデ	c/c 砂M2、海3、焼	1/12	
第17回 44	SK06-b	甕		口縁部 ハケメ/ナデ	c/c 砂M3、海1、焼1	小片	波状口縁。口縁端内に刻み目(ヘラ)。
第17回 45	SK06-b	甕		口頸部 ナデ、ハケメ/	d/d 砂M2、海2、焼	小片	口縁端刻み目。
第17回 46	SK06-b	甕		口頸部 ハケメ/ナデ	e/e 砂M3、海3、焼	小片	口縁端刻み目(ヘラ)、沈線、三角形刺突文。
第17回 47	SK06-b	壺		頸部 ナデ?/ナデ、ヘラミガキ	c/c 砂M3、海3、焼	小片	櫛描直線、波状文。ヘラ状具による継方向に沈線(3条以上)。
第17回 48	SK06-b	(底部)		底部 ナデ/ナデ	d/d 砂M3、海2、焼	底部 1/4	内面に煤付着。
第17回 49	SK06-b	石鎚	長さ3.8 幅1.8 厚さ0.4 重量2.2g				完形 輝石安山岩。
第17回 50	SK06-b	石鎚	長さ3.0 幅2.8 厚さ0.3 重量3.6g				完形 輝石安山岩。
第18回 51	SK07	壺?	A23.0	口縁部 ハケメ/ハケメ	e/e 砂M3、海3、焼	1/6	口縁部に格子状刻み目(ヘラ)。
第18回 52	SK07	甕		口頸部 ハケメ/ナデ	d/d 砂M4、海2、焼2	小片	波状口縁。
第18回 53	SK07	甕	A28.6 B24.2	口頸部 ハケメ/ハケメ	b/b 砂M2、海2、焼	1/6	黒斑。口縁外面に煤付着。
第18回 54	SK07	壺	A11.8 B8.4	口頸部 ナデ/ケズリの後ナデ	c/c 砂S2、海3、焼	1/3	
第18回 55	SK07	(底部)	D6.8	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ	b/e 砂M3、海3、焼	底部 1/2	
第20回 56	SK08	甕	A22.6 B19.8 C21.6	口頸部 ナデ/ナデ 体部 ナデ/ナデ	d/d 砂M2、海3、焼	1/6	
第21回 57	SK09	甕	A19.4	口頸部 ナデ、ハケメ/ナデ、ハケメ	c/c 砂M2、海3、焼	1/12	口縁部刻み目(ヘラ)。外面に煤付着。58と同一個体。
第21回 58	SK09	甕	B15.6 C16.8	体部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂M2、海3、焼	体部 1/4	肩部に刺突文(ヘラ)。外面に煤付着。57と同一個体。
第21回 59	SK09	甕		口頸部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂M2、海2、焼	小片	口縁部に浅い沈線と刻み目(ヘラ)。口縁外面に煤付着。
第21回 60	SK09	甕	A16.0	口頸部 ナデ/ナデ	c/c 砂M2、海3、焼	1/12	外面に煤付着。
第21回 61	SK09	甕		口頸部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂M3、海2、焼	細片	口縁部に刻み目(ハケ)。
第23回 62	SK10	甕	A17.0 B15.0	口頸部 ハケメ/ハケメ	b/b 砂M3、海2、焼	1/12	口縁部に刻み目(ヘラ)。外面に煤付着。
第23回 63	SK10	壺	A18.4 B15.2	口頸部 ハケメ/ハケメ、ナデ	c/c 砂M2、海1、焼	1/6	口縁端部に沈線付加後、刻み目(ハケ)。外面に煤付着。
第23回 64	SK10	甕	A18.8 B15.0	口頸部 ハケメ/ハケメ、ナデ	c/c 砂M4、海2、焼	1/6	口縁部に刻み目(ハケ)。外面に煤付着。
第23回 65	SK10	甕	A20.0	口頸部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂M3、海3、焼	1/6	口縁部に刻み目(ハケ)。外面に煤付着。
第23回 66	SK10	壺	A11.0 B10.0 B10.1	口頸部 ハケメ/ナデ、ハケメ 体部 ハケメ/ナデ、ハケメ、指オサエ	c/c 砂M2、海2、焼	1/6	口縁部に刻み目。外面に煤付着。
第23回 67	SK10	壺		体部 ミガキ、ハケメ/ナデ	c/c 砂M3、海2、焼	小片	櫛描直線、波状文。
第23回 68	SK10	(底部)	D4.2	体部 ハケメ/ 底部 指オサエ、ナデ/ナデ	c/b 砂M2、海2、焼	1/2	外面に煤付着。
第23回 69	SK10	(底部)	D6.0	体部 ハケメ/ナデ/ 底部 ナデ/ナデ	c/c 砂M3、海3、焼	1/6	外面に煤付着。
第23回 70	SK10	(底部)	D6.2	体部 ハケメ/ナデ/ 底部 ナデ/ナデ、指オサエ	c/c 砂L3、海3、焼	1/4	
第23回 71	SK10	(底部)	D7.2	体部 ナデ/ナデ/ 底部 ナデ/ナデ	c/d 砂L2、海3、焼	1/4	内面に煤付着。
第23回 72	SK10	磨製 石斧	長さ7.7 幅5.3 厚さ1.4 重量94.3g				扁平片刃。
第24回 73	SK11	高杯		脚部 ミガキ?/ナデ	b/d 砂M2、海2、焼2	脚部 完	
第24回 74	SK11	土師器 碗?	D3.8	底部 糸切り/ナデ	d/d 砂M1、海2、焼	底部 完	
第24回 75	SK11	土師器 皿?	D3.5	底部 ナデ/ナデ	d/d 砂M3、海3、焼1	底部 完	
第24回 76	SK11	須恵器 甕		体部 タタキ/タタキ	e/e 砂M2、海3、焼	小片	内面に使用痕。
第24回 77	SK11	土錐	長さ5.2 幅4.0 孔径1.2		d/d 砂S、海2、焼	1/2	
第25回 78	SK12	甕		口縁部 ナデ/ナデ	d/d 砂M2、海1、焼	小片	

出土遺物観察表 3

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	成形・調整部 外面/内面	色調 胎土	外面/内面 胎土	遺存度	文様、記号、その他特記事項
第25図 79	SK12 P-1	甕		口頸部 ハケメ?/ナデ	d/d 砂M3、海2、焼	小片		口縁端部に刻み目(ヘラ)。
第25図 80	SK12 P-1	壺		口頸部 ナデ、ヘラミガキ/ヘラミガキ	b/b 砂M2、海2、焼	小片		
第25図 81	SK12 未製品	石鋸	長さ*3.6 幅4.6 厚さ0.2 重量9.4g					
第32図 82	SK13	甕		口縁部 ハケメ/ナデ	c/d 砂S、海2、焼	小片		口縁端部内面に刻み目(ヘラ)。
第32図 83	SK13	壺		口頸部 ナデ/ナデ	d/d 砂S、海3、焼	細片		口縁に綾杉状刻み目(ハケ)。口縁端部に刻み目(ハケ)。
第32図 84	SK13	壺		体部 ハケメ/ナデ	c/c 砂M3、海3、焼	小片		櫛描直線、簾状、波状文。
第32図 85	SK13	壺		体部 ハケメ/ナデ	e/c 砂M3、海3、焼	細片		櫛描直線、波状文。
第33図 86	SK14	(底部)	D9.8	底部 ケズリ/ナデ?	c/c 砂S3、海3、焼	1/6		
第34図 87	SK15	壺	C18.2 D7.2	体部 ハケメ/ハケメの後ナデア ゲミガキ	c/c 砂M3、海3、焼	体部 2/3		
第34図 88	SK15	(底部)	D10.6	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ	b/c 砂L3、海3、焼	底部 1/3		黒斑。
第35図 89	SK16	壺		体部 ナデ/ナデ	c/c 砂M4、海3、焼	細片		櫛描直線、簾状文。
第36図 90	SK17	壺	A16.8 B9.8	口頸部 ハケメ/ナデ	d/d 砂M2、海3、焼	1/5		口縁端部に刻み目(ヘラ?)、内面に刻み目(ハケ)。
第36図 91	SK17 P-2	壺	A22.4	口頸部 ハケメ/ナデ	c/c 砂M3、海3、焼	1/2		口縁端部に刻み目(ヘラ)。内面に施文(ハケ)。
第36図 92	SK17	甕		口縁部 ナデ/ハケメ	c/c 砂L2、海2、焼	小片		波状口縁(端部に沈線を付加後、上端を押える)。外間に煤付着。
第36図 93	SK17	壺		体部 ハケ/ナデ	c/c 砂M3、海3、焼	小片		櫛描直線文。
第36図 94	SK17	(体部)		体部 繩文/	b/c 砂M3、海、焼	細片		沈線(繩文系成形壺)。
第36図 95	SK17 P-3	(底部)		体部 ヘラミガキ/指オサエ、ナデ 底部 ナデ/	c/c 砂M2、海2、焼	底部 1/12		
第36図 96	SK17 P-2	土製 紡錘車	直徑3.8 孔径0.6 厚さ0.9 重量14.2g	ハケメ/ハケメ	d/d 砂M2、海3、焼	完形		
第37図 97	SK18 P-1	(底部)	D9.7	体部 ハケメ後ナデ/ナデ 底部 ナデ?/ナデ?	d/c 砂M3、海3、焼	底部 1/12		
第38図 98	SK19	甕	A13.0 B10.8 C11.2	口頸部 ナデ、ハケメ/ハケメ 体部 ハケメ?/ハケメの後ナデ	c/c 砂M3、海2、焼	1/4		櫛描直線、波状文。口縁端部に刻み目。内面に施文(櫛)。外間に煤付着。
第38図 99	SK19	(底部)	D5.8	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ、指オサエ	e/e 砂M3、海4、焼	底部 ほぼ完		内間に煤。
第38図 100	SK19	石鎚	長さ2.8 幅2.2 厚さ0.5 重量2.6g			完形		輝石安山岩。
第40図 101	SK21	壺		口縁部 /ハケメ	c/c 砂M2、海3、焼	小片		口縁端部に刻み目(ハケ)。口縁外 面に綾杉文(ハケ)。
第40図 102	SK21	甕		口頸部 ハケメ/ナデ、指オサエ、 ハケメ	b/b 砂M3、海2、焼	小片		口縁端部に沈線付加後、波状口縁。
第40図 103	SK21	鉢	A12.2	口縁部 ナデ/ナデ 体部 ヘラミガキ/ナデ	c/c 砂M2、海1、焼	1/6		内面に付着物。黒斑。 小孔(2個1対)。
第40図 104	SK21	(体部)		体部 ハケメ/ハケメ	e/e 砂M2、海2、焼	小片		外間に綾杉状にハケメ
第40図 105	SK21-a P-2	(底部)	D5.8	底部 ナデ、指オサエ/	c/ 砂M3、海4、焼	底部 ほぼ完		
第40図 106	SK21	(底部)	D6.8	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/指頭ナデ	c/c 砂M3、海2、焼	底部 完形		
第40図 107	SK21	石鎚	長さ*3.2 幅*2.6 厚さ0.1 重量1.5g					紅麻石片岩
第41図 108	SK21-b	甕	A14.0 B10.4 C11.4	口頸部 ハケメ/ハケメ 体部 ハケメ/ハケメ	d/d 砂S、海2、焼	1/12		口縁端部に刻み目(ハケ)。
第41図 109	SK21-b	甕		口頸部 ナデ、ハケメ/ナデ、ハケ メ	c/c 砂M2、海3、焼	小片		波状口縁。外間に煤付着。
第41図 110	SK21-b	甕		口頸部 ナデ/ナデ、ハケメ 体部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂M3、海3、焼	小片		口縁端部内外に刻み目(ハケ)。 内間に煤付着。
第41図 111	SK21-b	(底部)	D7.0	体部 ハケメの後ヘラミガキ/ナデ? 底部 ナデ/ナデ?	c/c 砂M2、海3、焼	底部 完形		
第41図 112	SK21-b	(底部)	D3.8	体部 ナデ、指オサエ/ 底部 ナデ/	c/c 砂M3、海3、焼	在部 1/3		
第41図 113	SK21-b	土製 紡錘車	直径3.2 孔径0.4 厚さ0.7 重量8.2g	ハケメ/ナデ	e/c 砂S、海2、焼	完形		外間に煤付着。
第42図 114	SK22 P-1	甕	A19.6 B16.6 C16.9	口径部 ナデ/ナデ 体部 ハケメ/ハケメ	b/b 砂L3、海2、焼	1/6		外間に煤付着。内間に炭化物付着。
第42図 115	SK22	甕		口頸部 ハケメ/ハケメ 体部 ハケメ/ナデ	d/d 砂M2、海2、焼	小片		口縁端部に刻み目。黒斑。
第42図 116	SK22	壺		頸部 ハケメ/ナデ 体部 ナデ/ナデ	e/c 砂M2、海2、焼	小片		櫛描直線文。
第42図 117	SK22	(体部)		体部 ハケメ/ハケメ	a/b 砂M2、海1、焼	小片		外間に櫛状具によるハケ目。煤付着。

出土遺物観察表 4

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	成形・調整部 外面/内面	色調 胎土	外面/内面 底 部	遺存度	文様、記号、その他特記事項
第42図 118	SK22 P-2	(底部)	D4.0	体部 ハケメ/ナデ 底部 ハケメ/ナデ	b/b 砂 M4、海4、焼	底 部		
第42図 119	SK22	(底部)	D5.6	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ	a/c 砂 M3、海3、焼	底 部 2/3	外 面に赤彩?	
第42図 120	SK23 P-3	甕	A22.8 B18.2 C19.4	口頸部 ナデ/ナデ 体部 ハケメ/ハケメ	d/d 砂 S、海2、焼1	1/2	体部に刺突文(ハケ)。外面に煤付着。	
第44図 121	SK23 P-2	甕	A14.7 D5.6 H22.2	口頸部 ナデ/ナデ、ハケメ 体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ	b/e 砂 M3、海3、焼	底 部 ほぼ 完 形	外 面に煤付着。	
第44図 122	SK23 P-1	甕	A17.0 B13.4	口頸部 ナデ、ハケメ/ハケメ 体部 ハケメ/ハケメ 底部 ナデ/ナデ	c/d 砂 M3、海2、焼	1/6	口縁端部に刻み目(櫛)。体部に櫛描直線、簾状文。口縁外面に煤付着。	
第44図 123	SK23 P-4	甕	A14.8 B13.2	口頸部 ハケメ/ハケメ 体部 ハケメ/ハケメ、ナデ	c/c 砂 M3、海3、焼	1/2	口縁端部に刻み目(ハケ)。	
第44図 124	SK23 P-2	壺		体部 ハケメの後ヘラミガキ/ハ ケメ、ナデ	c/c 砂 M2、海2、焼	小片	櫛描波状、直線、三角形刺突文。黒 斑。	
第44図 125	SK23	(底部)	D4.6	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ	a/e 砂 M3、海3、焼	1/3		
第44図 126	SK23 P-3	(底部)	D6.4	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ	b/e 砂 M3、海3、焼	1/6	外 面に炭化物付着。	
第44図 127	SK23 P-1	(底部)	D7.4	体部 ヘラミガキ/ 底部 ナデ/ナデ	c/e 砂 M2、海2、焼	2/3		
第44図 128	SK23 P-4	(底部)	D5.0	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ	a/e 砂 M3、海3、焼	1/2		
第44図 129	SK23 P-2	(底部)	D8.1	体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ、指オサエ	b/e 砂 M3、海3、焼	底 部 ほぼ完	内 面に炭化物付着。	
第44図 130	SK23		径3.2	ナデ/	c/ 砂 M3、海3、焼			
第44図 131	SK23	石鎚	長さ2.0 幅1.4 厚さ0.3 重量1.3g					
第44図 132	SK23	石器剥片	長さ3.1 幅2.5 厚さ0.5 重量4.9g				石鎚素材?	
第44図 133	SK23	石	長径2.7 短径2.5 重量18.8g				丸く磨かれた石。	
第45図 134	SK24	鉢		口縁部 ヘラミガキ/ナデ 体部 ハラミガキ/ナデ、指オサエ	d/d 砂 M3、海2、焼	小片		
第45図 135	SK24	壺		頸部 ナデ、ハケメ/ナデ	d/d 砂 M4、海2、焼	小片	有刻突帶。	
第45図 136	SK24	壺		口頸部 ハケメ/ナデ	c/c 砂 M2、海3、焼	小片	口縁部に格子状刻み目。外 面に炭化物付着。	
第45図 137	SK24	甕		口頸部 ハケメ/	c/c 砂 M2、海2、焼	小片	口縁端部に綾衫状刻み目。口縁内面 に綾衫文(ハケ)。	
第45図 138	SK24	鉢		口頸部 ヘラミガキ/ナデ	c/c 砂 M3、海2、焼	小片	口縁端部に刻み目。	
第45図 139	SK24	壺		体部 /ナデ	c/c 砂 M2、海2、焼	小片	櫛描直線、簾状、波状文	
第45図 140	SK24	壺		体部 ハケメ/ナデ	b/c 砂 M2、海2、焼	小片	櫛描直線、扇形文。	
第45図 141	SK24	壺		体部 ハケメ/ハケメ、ナデ	c/c 砂 L2、海3、焼	小片	櫛描擬流水、扇形文。外 面に煤付着。	
第45図 142	SK24	甕	A14.5 B12.1	口頸部 ハケメ/ハケメ、ナデ	d/d 砂 M2、海2、焼	1/4	黒斑。	
第45図 143	SK24	鉢	A23.0	口縁部 ヘラミガキ/ハケメ、ヘラ ミガキ	d/d 砂 M2、海2、焼	1/12		
第45図 144	SK24	(底部)	D8.4	底 部 ナデ/ナデ	c/c 砂 M4、海3、焼	底 部 1/2	内 面に炭化物付着。	
第45図 145	SK24	(底部)	D8.1	体 部 ハケメ/ハケメ 底 部 ナデ/ハケメ	d/d 砂 M4、海3、焼	底 部 1/2	黑斑。	
第46図 146	SK25	甕	A20.6 B18.2	口頸部 ハケメ/ナデ、ハケメ	d/d 砂 L2、海3、焼	1/8	口縁端部に刻み目(ヘラ)。	
第46図 147	SK25 P-1	(底部)	D6.8	体 部 ハケメ/ナデ 底 部 ナデ/ナデ	c/c 砂 M4、海3、焼	底 部 完 形	内 面に炭化物付着。	
第47図 148	SK26	甕		口頸部 ハケメ/ナデ	b/c 砂 M4、海2、焼	小片	口縁端部に刻み目。	
第47図 149	SK26 P-3	壺	A23.5	口頸部 ハケメ/ハケメ?ナデ	b/c 砂 L2、海2、焼	1/8	口縁端部に刻み目(ハケ?)。口縁 内面に円錐形突起(2個)。	
第47図 150	SK26 P-1		B16.0 C18.2 D5.3	頸 部 ハケメ/ハケメ 体 部 ハケメ/ナデ、ナデアケ	c/c 砂 M3、海4、焼	体、底 部 ほぼ完	底 部穿孔(径0.6cm)。外 面煤付着。	
第47図 151	SK26 P-2	(底部)	D5.0	体 部 ハケメ/ナデ 底 部 ナデ/ナデ	c/c 砂 M2、海2、焼	底 部 完 形	黑斑。	
第47図 152	SK26 P-1	(底部)	D5.8	体 部 ハケメ/ハケメ? 底 部 ナデ/ハケメ?	d/d 砂 M3、海2、焼	底 部 完 形	黑斑。	
第48図 153	SK27	壺	A18.0 B13.7	口頸部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂 M2、海2、焼	1/8	口縁端部に沈線を付加後、波状口縁 (ハケによる刻み目)。	
第48図 154	SK27	鉢	A20.6	口縁部 ナデ、ハケメ/ナデ 体 部 ハケメ/ハケメ、ナデ、指オサエ	c/b 砂 L2、海2、焼	1/8	口縁端部に刻み目(ハケ)。	
第48図 155	SK27 P-1	壺		体 部 ハケメ/ハケメ	c/c 砂 M3、海2、焼	小片	櫛描直線、波状文。	
第48図 156	SK27	壺		口縁部 ナデ/ナデ	c/c 砂 M3、海2、焼	小片	口縁外面に刻み目(ハケ)。	

出土遺物観察表 5

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	成形部 位	調整 外面／内面	色調 胎土	外面／内面 遺存度	文様、記号、その他特記事項
第48図 157	SK27	甕	A15.6	口頸部	ナデ、ハケメ／ハケメ	d / d 砂 M1、海 3、焼	1/12	口縁端部に刻み目(ヘラ)。
第48図 158	SK27 P-1	甕		口頸部 体 部	ハケメ／ナデ ハケメ／ハケメ、ナデアゲ	c / c 砂 M3、海 2、焼	小片	口縁端部内面に刻み目。外面に煤付着。
第48図 159	SK27	(底部)	D4.3	体 部 底 部	ハケメ?／ハケメ、指オサエ ナデ／ナデ、指オサエ	c / b 砂 M2、海 2、焼	底部 1/3	外面に煤付着。黒斑。
第48図 160	SK27	(底部)	D6.0	体 部 底 部	ハケメ／ ナデ／	c / c 砂 M4、海 2、焼	底部 1/3	
第48図 161	SK27	玉 未製品	長さ2.3 幅1.6 厚さ1.3 重量9.8g					緑色凝灰岩?
第49図 162	SK28	壺	A6.7	口縁部	ヘラミガキ／ヘラミガキ	c / c 砂 M2、海 3、焼	1/6	
第49図 163	SK28 P-1	(底部)	D7.2	体 部 底 部	ハケ、ヘラミガキ／ナデ ナデ／ナデ	b / b 砂 M3、海 1、焼 1	底部 完形	黒斑。
第50図 164	SK29	壺	A15.0	口縁部	ハケメ／ナデ	b / c	1/6	口縁端部に格子状刻み目。口縁内面に直線文(櫛)。
第50図 165	SK29	壺		口縁部	ハケメ／ナデ	c / c 砂 M4、海 2、焼	小片	外面に赤彩。
第50図 166	SK30	甕		口頸部	ハケメ／ナデ、ハケメ	d / d 砂 M4、海 2、焼 1	小片	口縁端部に刻み目。外面に煤付着。
第51図 167	SD01	壺	A19.0	口頸部	ナデ／ナデ	c / b 砂 L3、海 2、焼 1	1/12	口縁端部に刻み目。口縁外面に綾杉 状刺突文。黒斑。
第51図 168	SD01	鉢	A20.2	口縁部	ヘラミガキ?／ヘラミガ キ?	c / c 砂 M2、海 、焼 1	1/8	
第51図 169	SD01	甕		口頸部	ナデ、ハケメ／ハケ、ヘラ ミガキ	d / d	小片	口縁端部に刻み目。
第51図 170	SD01	甕		口頸部	ヘラミガキ?／ナデ	c / e 砂 M2、海 2、焼	小片	
第51図 171	SD01	土師器 (底部)	D5.0	底 部	糸切り／ナデ	b / b 砂 M2、海 2、焼 2	底部 完形	
第52図 172	SD03	甕		口頸部	ハケメ、ナデ／ハケメ	d / d 砂 S、海 1、焼 1	小片	口縁端部に沈線。口縁内面に刻み目 (ハケ)。
第52図 173	SD03	甕	A22.3 B18.4	口頸部 体 部	ナデ、ハケメ／ナデ ハケメ／ハケメ	b / c 砂 M3、海 2、焼	1/12	口縁端部に刻み目(ヘラ)。外面に 煤付着。
第52図 174	SD03	壺		口頸部	ハケメ／ハケメ	b / c 砂 M2、海 、焼	1/8	
第52図 175	SD03	壺		体 部	/ナデ	b / b 砂 M3、海 3、焼	小片	直線、波状文。
第52図 176	SD03	壺		体 部	ナデ／ナデ	b / b 砂 M4、海 4、焼	細片	刺突文(櫛)。
第52図 177	SD03	(底部)	D3.9	体 部 底 部	ナデ／ナデ ナデ／指オサエ	c / c 砂 M3、海 3、焼	底部 完形	
第52図 178	SD03	(底部)	D8.6	体 部 底 部	ナデ、ヘラミガキ／ナデ ナデ／ナデ	c / e 砂 M2、海 2、焼	底部 1/4	
第52図 179	SD03	高杯		脚 部	ナデ／ナデ	c / c 砂 M2、海 、焼	脚部 1/4	脚部に直線文?
第52図 180	SD03	高杯	透し穴径0.3	脚 部	ナデ、ハケメ／ナデ	c / c 砂 M2、海 3、焼	小片	透し穴(0.7~1.0cm間隔で巡る)。
第52図 181	SD03	高杯		脚 部	ハケメ／ナデ	c / c 砂 M2、海 2、焼	小片	
第53図 182	SD04	壺		口頸部	ナデ、ハケメ／ナデ、ハケ メ	c / c 砂 M1、海 2、焼	小片	口縁端部に沈線を付加した後、内面 に刻み目(ハケ)。
第53図 183	SD04	土師器 碗	D6.7	底 部	糸切り／ナデ	c / c 砂 M3、海 3、焼	底部 1/3	
第54図 184	SD05	甕		口頸部	ナデ、ハケメ／ナデ、ハケメ	e / c 砂 L2、海 2、焼	小片	口縁端部に刻み目(ハケ)。
第54図 185	SD05	壺		体 部	/ナデ	a / a 砂 M4、海 3、焼	小片	三角形刺突文(2段)。
第55図 186	SD06	(底部)	D6.1	体 部 底 部	ハケメ／ナデ ナデ／ナデ、指オサエ	b / b 砂 L3、海 2、焼	底部 完形	
第55図 187	SD06	(底部)	D8.3	体 部 底 部	ハケメ／ナデ、ハケメ ナデ／ナデ	d / d 砂 M2、海 2、焼	底部 完形	
第55図 188	SD06	(底部)	D9.0	体 部 底 部	ナデ、ハケメ／ナデ ナデ、指オサエ／ナデ、指オサエ	b / b 砂 L2、海 2、焼	底部 完形	黒斑。
第55図 189	SD06	(底部)	D8.2	体 部 底 部	ハケメ、指オサエ／ ナデ、ケズリ／	c / c 砂 M3、海 2、焼	底部 完形	黒斑。
第56図 190	SD07	壺		口縁部	ナデ／ナデ	c / c 砂 M1、海 2、焼	細片	口縁外面に格子状刻み目(ヘラ)。
第57図 191	ピット16	甕	A19.0	口縁部	ナデ、ハケメ／ナデ	b / b 砂 M3、海 2、焼 1	1/8	黒斑。
第57図 192	ピット16	甕		口頸部	ハケメ／ナデ、ハケメ	b / d 砂 M2、海 2、焼 1	小片	口縁端部に刻み目。外面に煤付着。
第57図 193	ピット26	甕	A20.8 B17.4 C17.9	口頸部 体 部	ハケメ／ナデ、指オサエ ハケメ／ナデ、ハケメ	c / c 砂 M3、海 4、焼	1/4	口縁端部に刻み目。外面に煤付着。
第57図 194	ピット18	壺		口縁部	ナデ／ナデ	c / c 砂 M3、海 2、焼	細片	口縁端部と内面に刻み目(ハケ)。
第57図 195	ピット5	壺		体 部	ハケメ／ナデ	c / d 砂 M2、海 、焼	小片	櫛描波状、簾状文。

出土遺物観察表 6

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	成形・調整部 外面/内面	色調 胎土	外面/内面 胎土	遺存度	文様、記号、その他特記事項
第57図 196	ピット17	鉢	A23.8 D7.6 H13.8	口縁部 ハケメ/ ^{ヘラミガキ?} 底部 ハケメ/ ^{ヘラミガキ}	a/a	砂L3、海4、焼	1/3	口縁端部に刻み目、黒斑。
第57図 197	ピット7	鉢	A13.6	口縁部 ナデ?/ナデ 体部 ナケメ/ナデ	b/c	砂M2、海2、焼	1/8	198と同一個体?
第57図 198	ピット7 (底部)	D4.9		体部 ナデ/ナデ 底部 ナデ/ナデ	b/c	砂M2、海2、焼	底部完形	197と同一個体? 黒斑。
第57図 199	ピット7 (底部)	D6.0		体部 ナデ/ナデ 底部 ナデ/ナデ、指オサエ	c/c	砂L2、海2、焼2	底部1/2	内面に煤付着。
第57図 200	ピット15 (底部)	D7.6		体部 ナデ/ 底部 ナデ	b/c	砂M2、海2、焼	底部1/2	内面に使用痕。
第58図 201	包含層 C-D-3-4区	甕	A16.6	口頸部 ハケメ/ナデ、ハケメ	b/b	砂M3、海2、焼	1/6	口縁端部内面に刻み目(ハケ)。
第58図 202	包含層 C-3区	甕	A21.4 B16.4	口頸部 ハケメの後ヘラミガキ/ハ ケメ	c/c	砂M2、海3、焼	1/6	波状口縁。
第58図 203	包含層 C-D-3-4区	壺		口縁部 /ナデ	c/c	砂M2、海1、焼	小片	口縁端部に刻み目、口縁外面に綾杉状刻み目(ハケ)。
第58図 204	包含層 C-2-3区	壺		口頸部 ナデ/ナデ、ハケメ	d/d	砂M2、海2、焼	小片	口縁端部に格子状?刻み目(ハケ)。
第58図 205	包含層 C-D-3-4区	壺		口頸部 ハケメ/ナデ、ハケメ	b/b	砂M2、海2、焼	小片	棒状浮文。突起状浮文。口縁端部と 外面に刺突、直線文。
第58図 206	包含層 A-B-1-2区	壺		口頸部 ハケメ/ナデ	d/d	砂M2、海3、焼	小片	口縁部外面に綾杉状刻み目(ハケ)
第58図 207	包含層 B-2区	壺		体部 ハケメ/ナデ	c/c	砂M2、海2、焼	小片	扇形文(櫛)。
第58図 208	包含層 C-D-3-4区	甕		口頸部 ナデ/ナデ、ハケメ	c/c	砂M2、海2、焼	小片	口縁端部に刻み目(ハケ)。外面に 煤付着。
第58図 209	包含層 C-3区	鉢		口縁部 ナデ/ナデ 体部 ハケメ/ハケメ	d/d	砂M2、海2、焼	小片	
第58図 210	包含層 B-3区 (底部)	D6.3		体部 ハケメ/ナデ 底部 ナデ/ナデ	d/d	砂M2、海2、焼	底部完形	底部に圧痕。
第58図 211	包含層 (底部)	D4.9		底部 ナデ/ナデ	c/c	砂L4、海4、焼	底部完形	
第58図 212	包含層 A-B-4区 (底部)	D7.4		体部 ハケメ?/ハケメ 底部 ナデ/ナデ	c/c	砂M3、海2、焼1	底部1/3	
第58図 213	包含層 B-3区	甕		口頸部 ナデ/ナデ	d/d	砂M2、海1、焼	小片	
第58図 214	包含層 C-3区	土師器 甕	A16.4	口頸部 ナデ/ナデ	c/d	砂S、海2、焼	1/8	外面に煤付着。
第58図 215	包含層 A-B-1-2区 須恵器 有台杯	D9.0		体部 ナデ/ナデ 底部 ヘラ切り、ナデ/ナデ	e/e	砂M2、海3、焼	底部1/2	
第58図 216	包含層 C-D-1-2区 須恵器 有台杯	D7.6		底部 ヘラ切り、ナデ/ナデ	e/e	砂L1、海3、焼	底部3/4	
第58図 217	包含層 C-D-3-4区 須恵器 杯	A14.4		口縁部 ナデ/ナデ	e/e	砂M2、海2、焼	1/6	
第58図 218	包含層 C-D-1-2区 須恵器 杯	D7.3		底部 ナデ/ナデ	d/d	砂S、海、焼	1/6	
第58図 219	包含層 須恵器 瓶	A16.0		口頸部 ナデ/ナデ	e/e	砂S、海2、焼	1/12	内外面に降灰釉。
第58図 220	包含層 土師器 (底部)	D6.0		底部 糸切り/ナデ	b/b	砂M2、海2、焼	底部1/3	
第58図 221	包含層 土師器 皿	A8.8		口縁部 ナデ/ナデ 体部 ナデ/ナデ	d/d	砂L2、海、焼	1/4	
第58図 222	包含層 土師器 皿	A14.2		口縁部 ナデ/ナデ 体部 ナデ/ナデ	e/e	砂S、海2、焼	1/6	内面に炭化物付着。
第58図 223	包含層 珠洲焼 鉢			体部 ナデ/ナデ	e/e	砂M2、海3、焼	小片	内面におろし目。
第59図 224	包含層 B-3-4区	石鋸	長さ*8.9 幅*3.5 厚さ0.3 重量13.7g					紅簾石片岩
第59図 225	包含層 C-D-3-4区	石鋸	長さ*4.2 幅*2.5 厚さ0.2 重量4.6g					紅簾石片岩
第59図 226	包含層 B-3区	石鎌	長さ1.7 幅1.0 厚さ0.2 重量0.6g					輝石安山岩。
第59図 227	包含層	石鎌	長さ2.0 幅1.6 厚さ0.4 重量0.9g					輝石安山岩。
第59図 228	包含層	石錐	長さ*2.7 幅2.0 厚さ0.3 重量2.7g					輝石安山岩。
第59図 229	包含層 B-3区	蛋器?	長さ5.7 幅3.0 厚さ1.2 重量18.8g					輝石安山岩。
第59図 230	包含層 B-3区	石器 剥片	長さ2.5 幅1.7 厚さ0.4 重量2.5g					輝石安山岩。
第59図 231	包含層 B-3区	石器 剥片	長さ2.6 幅1.7 厚さ0.2 重量1.6g					輝石安山岩。
第59図 232	包含層 C-D-3-4区	石器 剥片	長さ5.2 幅3.3 厚さ1.5 重量20.6g					輝石安山岩。
第59図 233	包含層	石器 剥片	長さ4.6 幅2.9 厚さ0.7 重量10.5g					輝石安山岩。
第59図 234	包含層	石器 剥片	長さ2.1 幅1.9 厚さ0.9 重量5.9g					輝石安山岩。
第59図 235	包含層	石器 剥片	長さ2.1 幅1.5 厚さ1.1 重量3.0g					輝石安山岩。
第36-2図 236	SK17 P-2	甕	A24.6 B20.0 C21.6	口頸部 ハケ/ハケメ 体部 ハケメ/ケズリの後ナデ	c/c	砂M2、海3、焼	1/3	口縁端部に沈線付加後、波状口縁体 部外面にハケによる文様。煤付着。

市内遺跡発掘調査（1998）

吉崎・次場遺跡第16次調査

写真図版

- 図版 1 (1) 周辺の垂直写真 昭和37年撮影
- 図版 2 (2) 羽咋市街地より邑知地溝帯を望む
- 図版 3 (3) 遺構検出状況（南から）
 - (4) SK01、SD01断面
 - (6) SK06-a 断面
 - (5) SK05断面
 - (7) SK10断面
- 図版 4 (8) SK11断面
- (9) SK15断面
- (10) SK21、SD03断面
- (11) SK22、出土遺物
- (12) P9、SK22、SD06断面
- (13) SK23出土遺物と断面
- (14) SK24断面
- (15) SK28、29断面
- 図版 5 (16) 完掘状況（南西より）
 - (17) SK06-a,b 出土遺物
 - (18) SK08出土遺物
 - (19) SK11出土遺物
 - (20) SK17出土遺物
- 図版 6 (21) 完掘状況（北西から）
 - (22) SK23出土遺物
 - (23) SK24完掘
 - (24) SK26、P16出土遺物
 - (25) SD06出土骨片
- 図版 7 (26) 連結土坑群（西から）
 - (27) 連結土坑群（南から）
- 図版 8 SK01～06-a 出土遺物
- 図版 9 SK06～12出土遺物
- 図版10 SK13～21出土遺物
- 図版11 SK21-b～24出土遺物
- 図版12 SK25～29出土遺物
- 図版13 各 SD 出土遺物（上） ピット出土遺物（下）
- 図版14 その他の出土遺物



(1) 周辺の垂直写真 昭和37年撮影



(2) 羽咋市街地より邑知溝帶を望む



(3) 遺構検出状況（南から）



(4) SK01、SD01断面



(6) SK06—a 断面



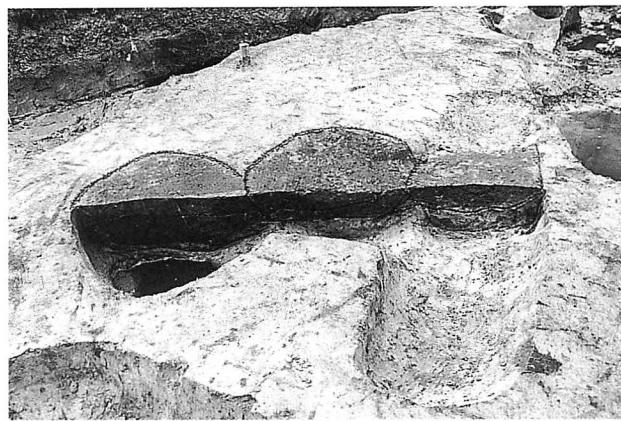
(5) SK05断面



(7) SK10断面



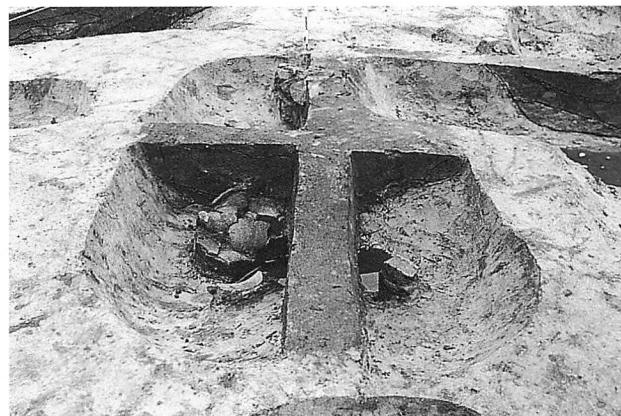
(8) SK11断面



(12) P9、SK22、SD06断面



(9) SK15断面



(13) SK23出土遺物と断面



(10) SK21、SD03断面



(14) SK24断面



(11) SK22出土遺物



(15) SK28、29断面



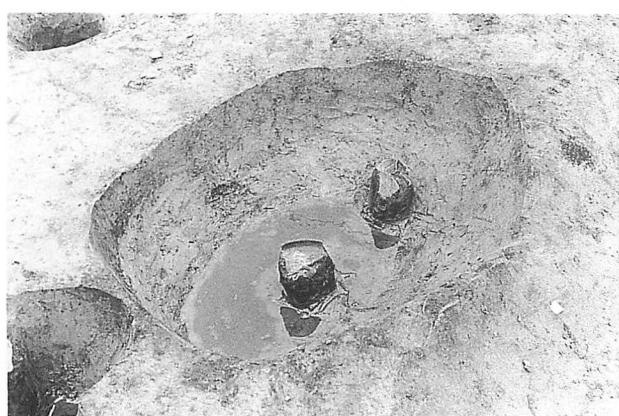
(16) 完掘状況（南西より）



(17) SK06—a、b 出土遺物



(19) SK11出土遺物



(18) SK08出土遺物



(20) SK17出土遺物



(21) 完掘状況（北西から）



(22) SK23出土遺物



(24) SK26、P16出土遺物



(23) SK24完掘



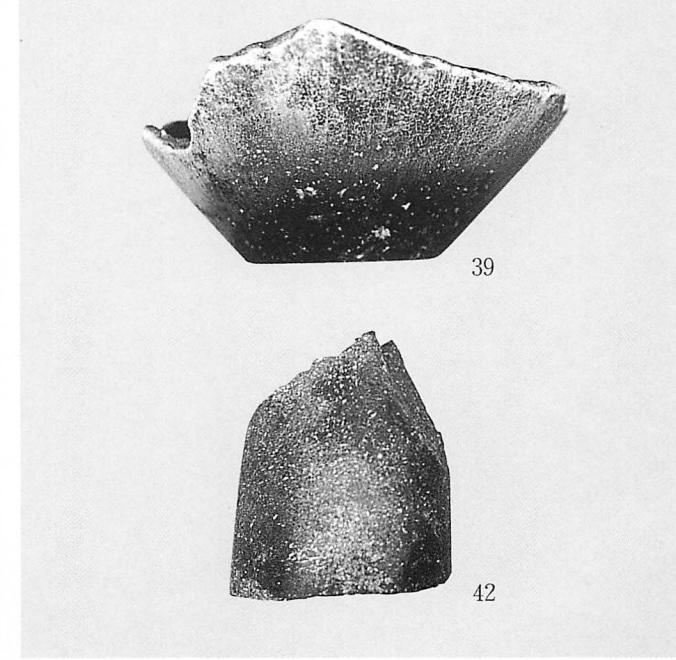
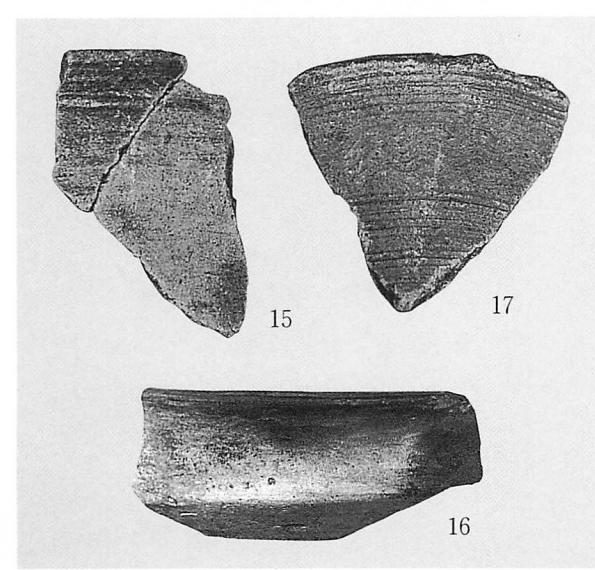
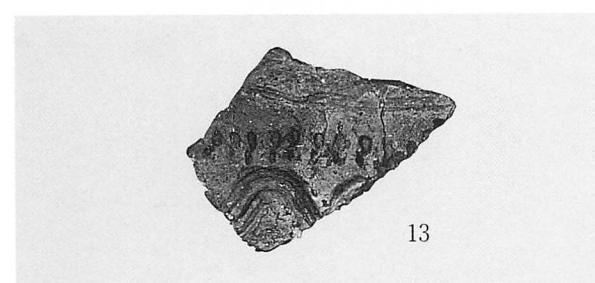
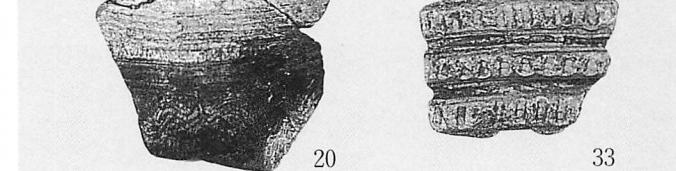
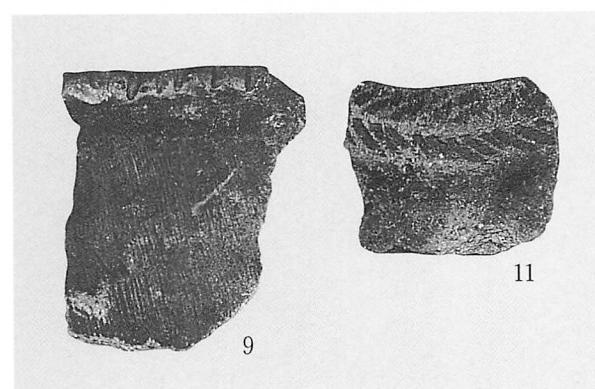
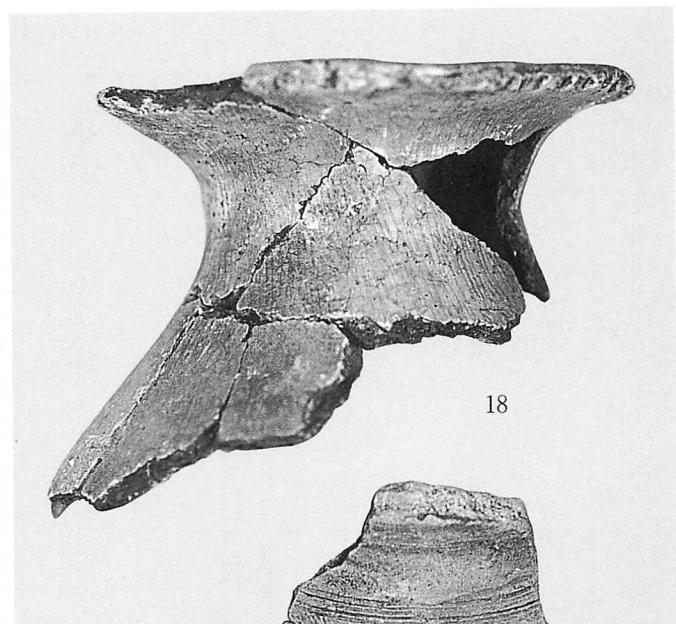
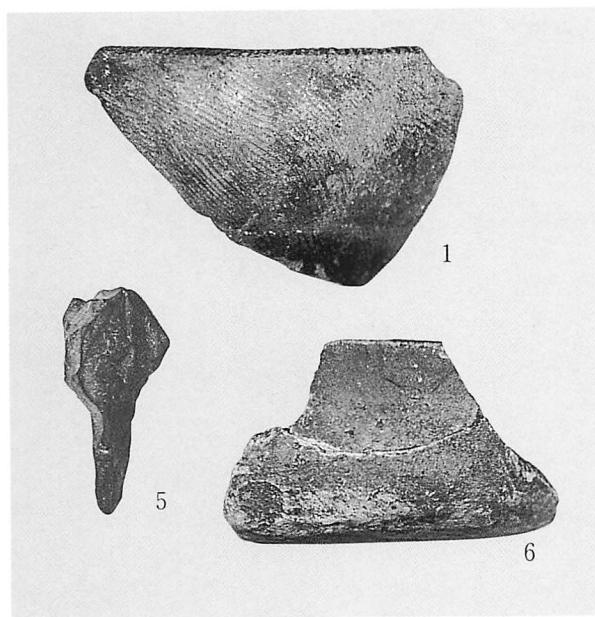
(25) SD06出土骨片



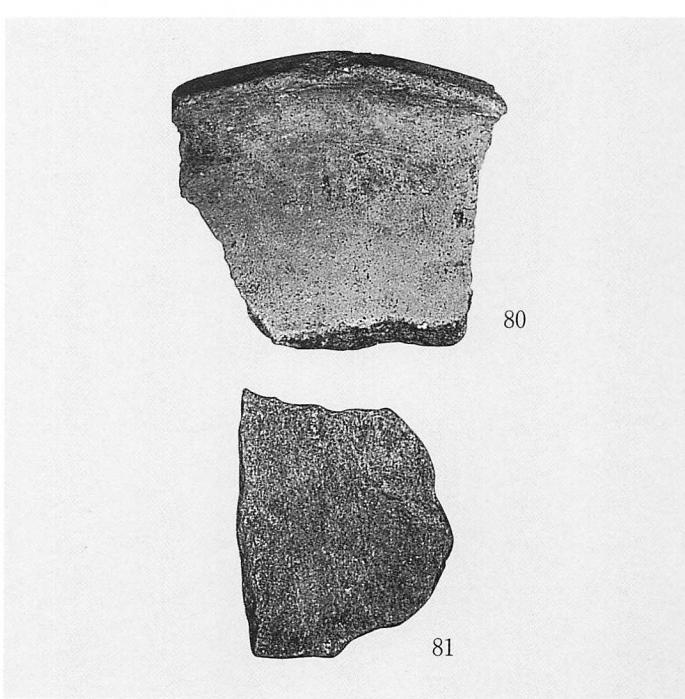
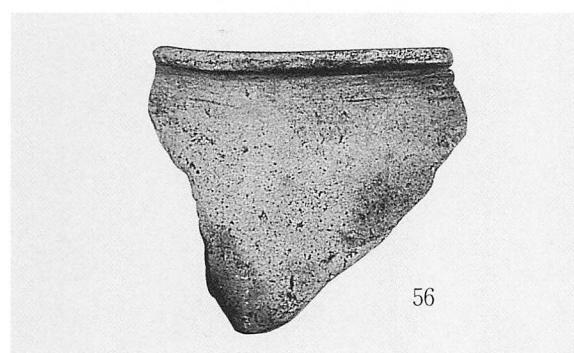
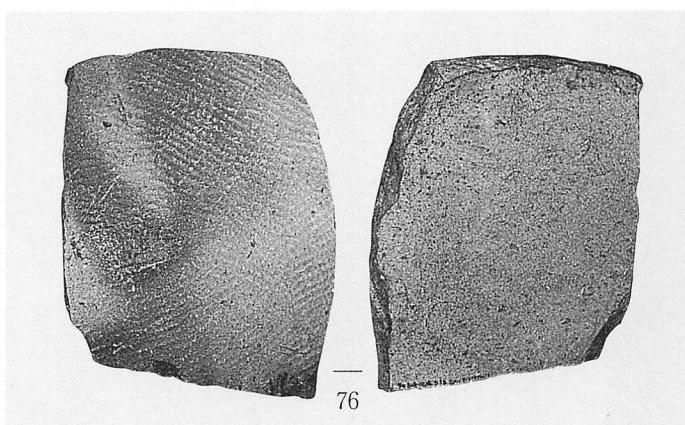
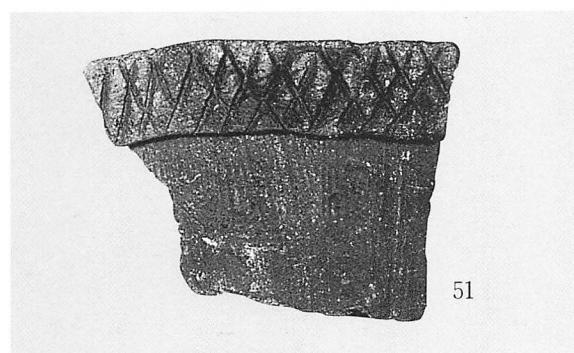
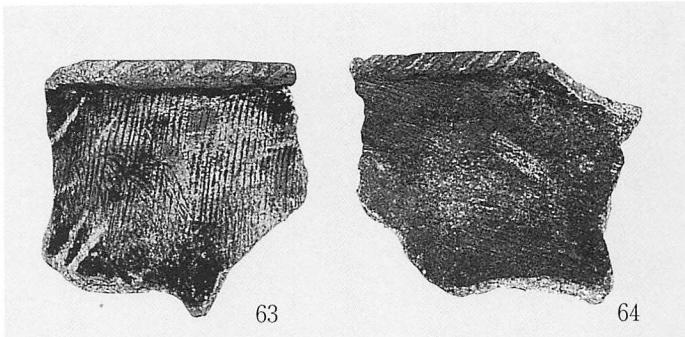
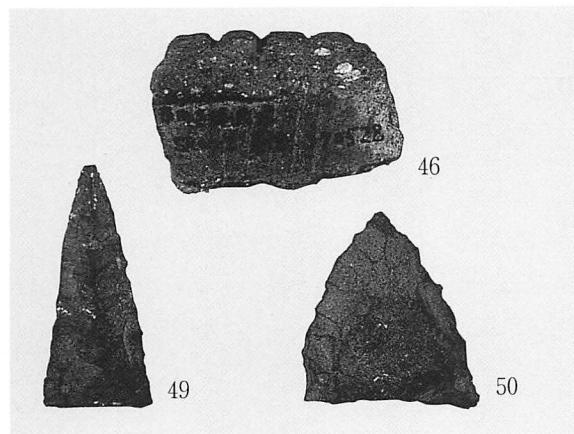
(26) 連結土坑群（西から）



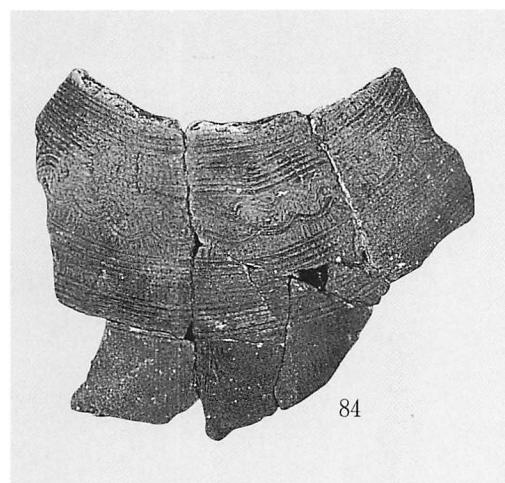
(27) 連結土坑群（南から）



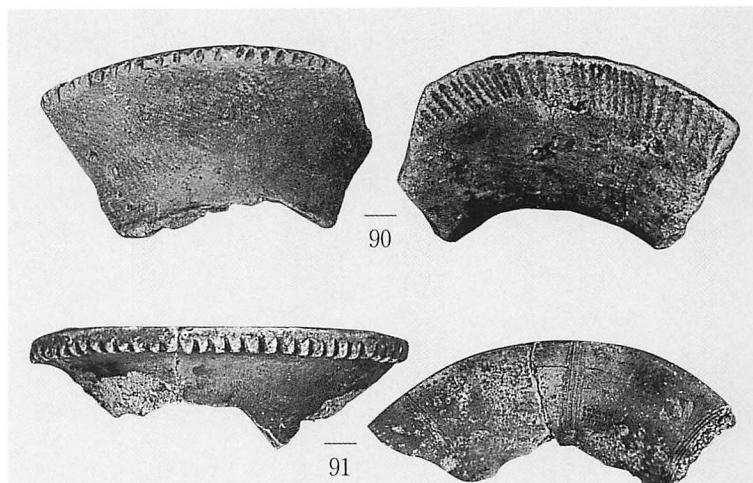
SK01~06-a 出土遺物



SK06～12出土遺物

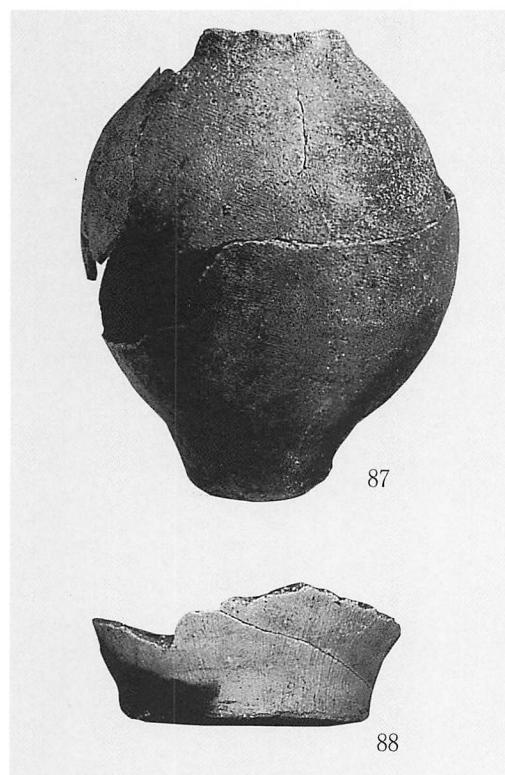


84



90

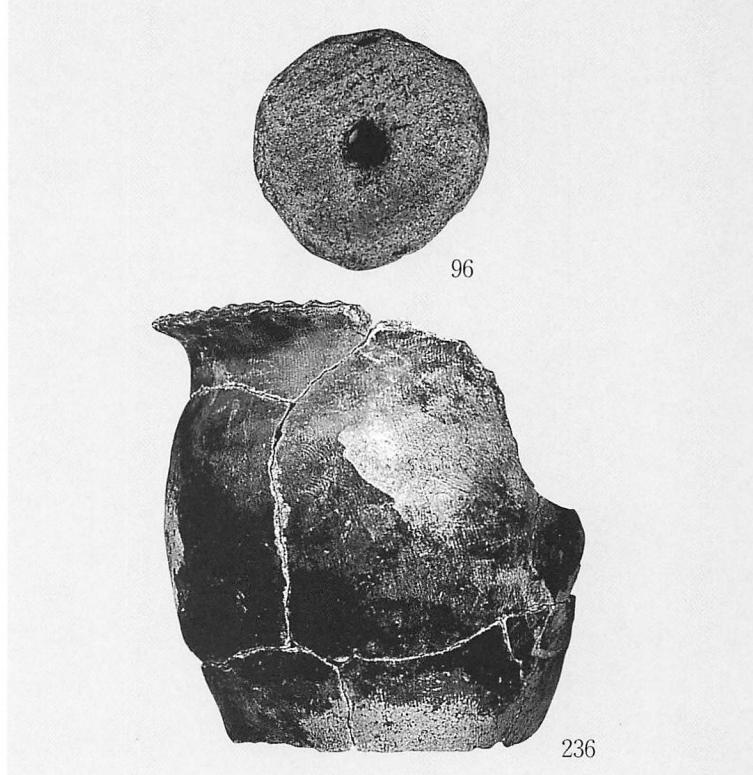
91



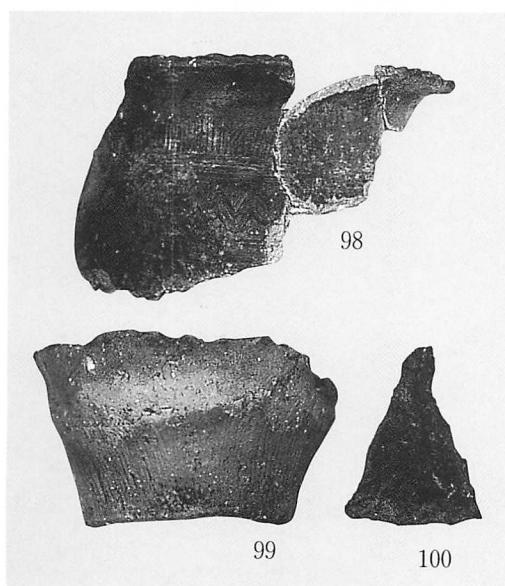
87



88



236

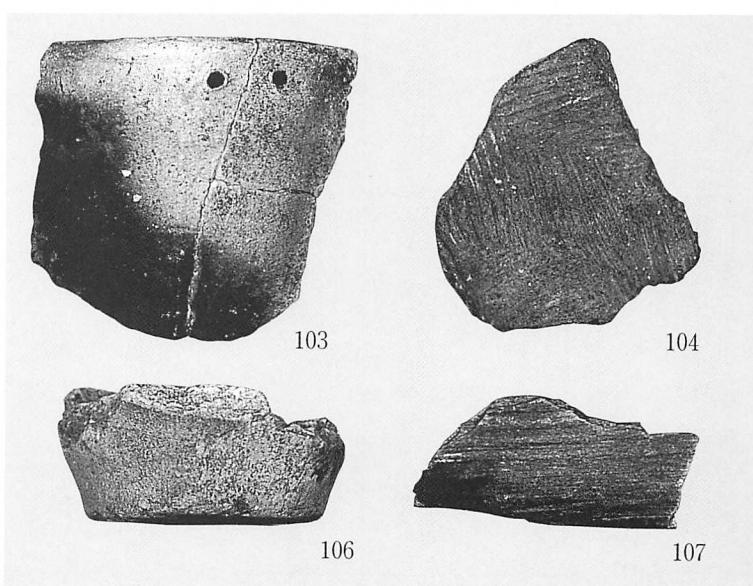


98



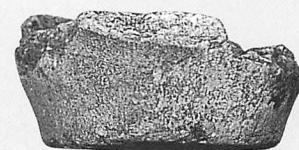
99

100

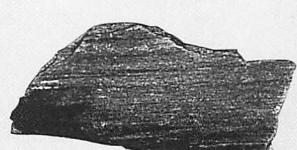


103

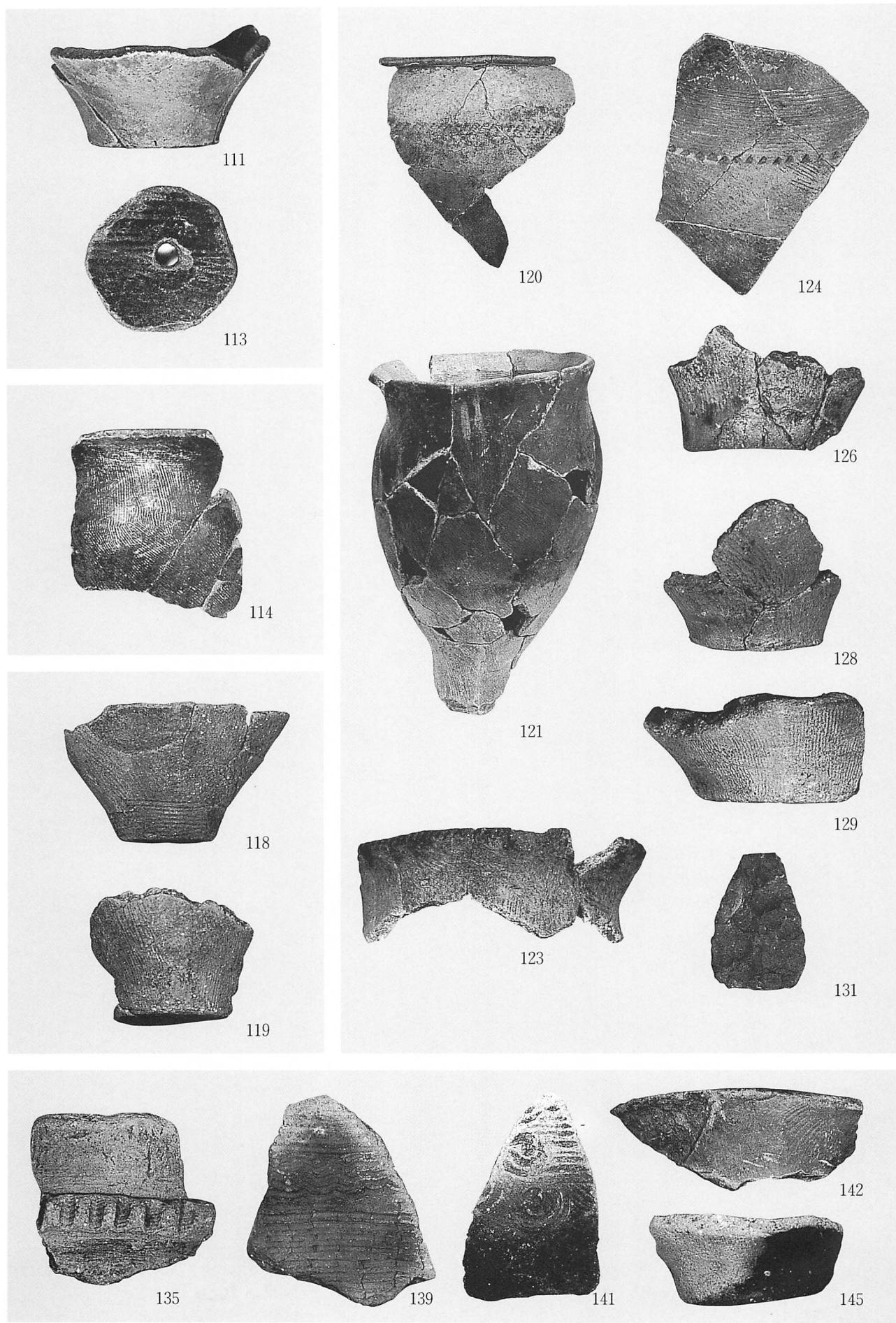
104



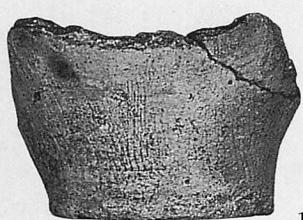
106



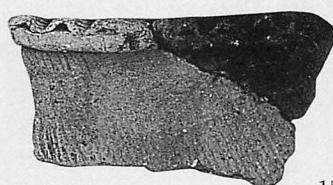
107



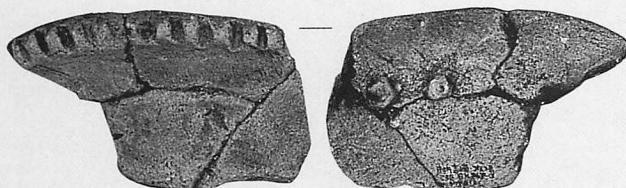
SK21-b~24出土遺物



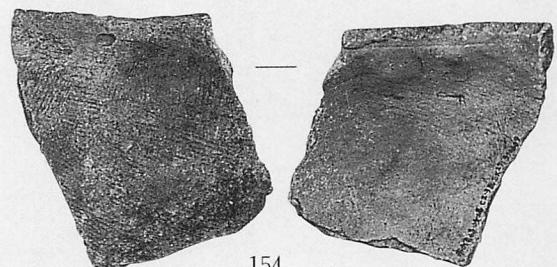
147



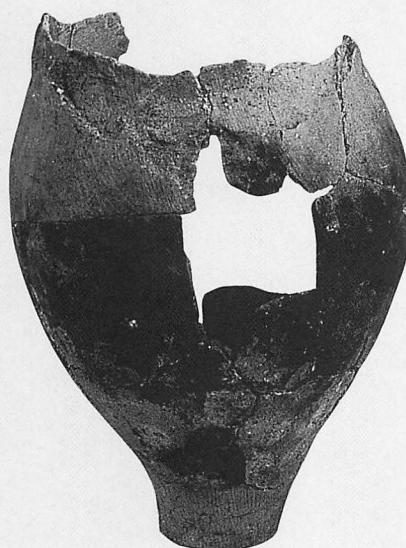
153



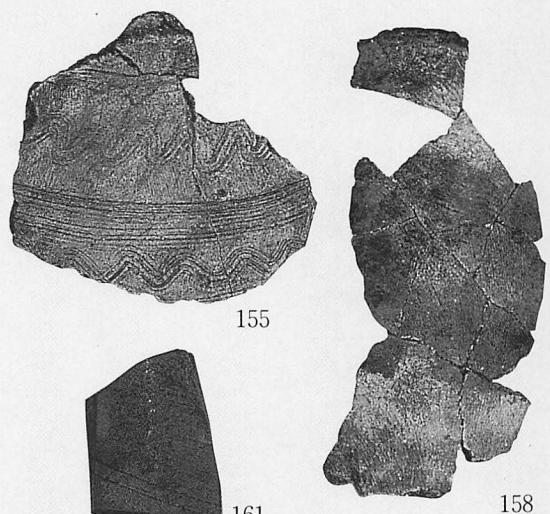
149



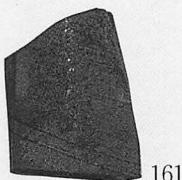
154



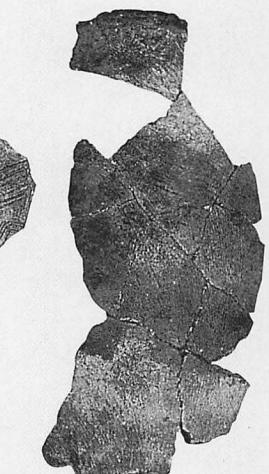
150



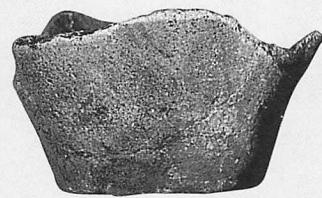
155



161



158



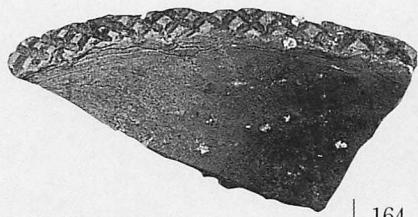
163



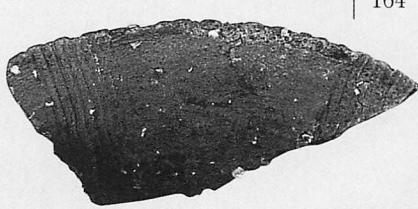
151

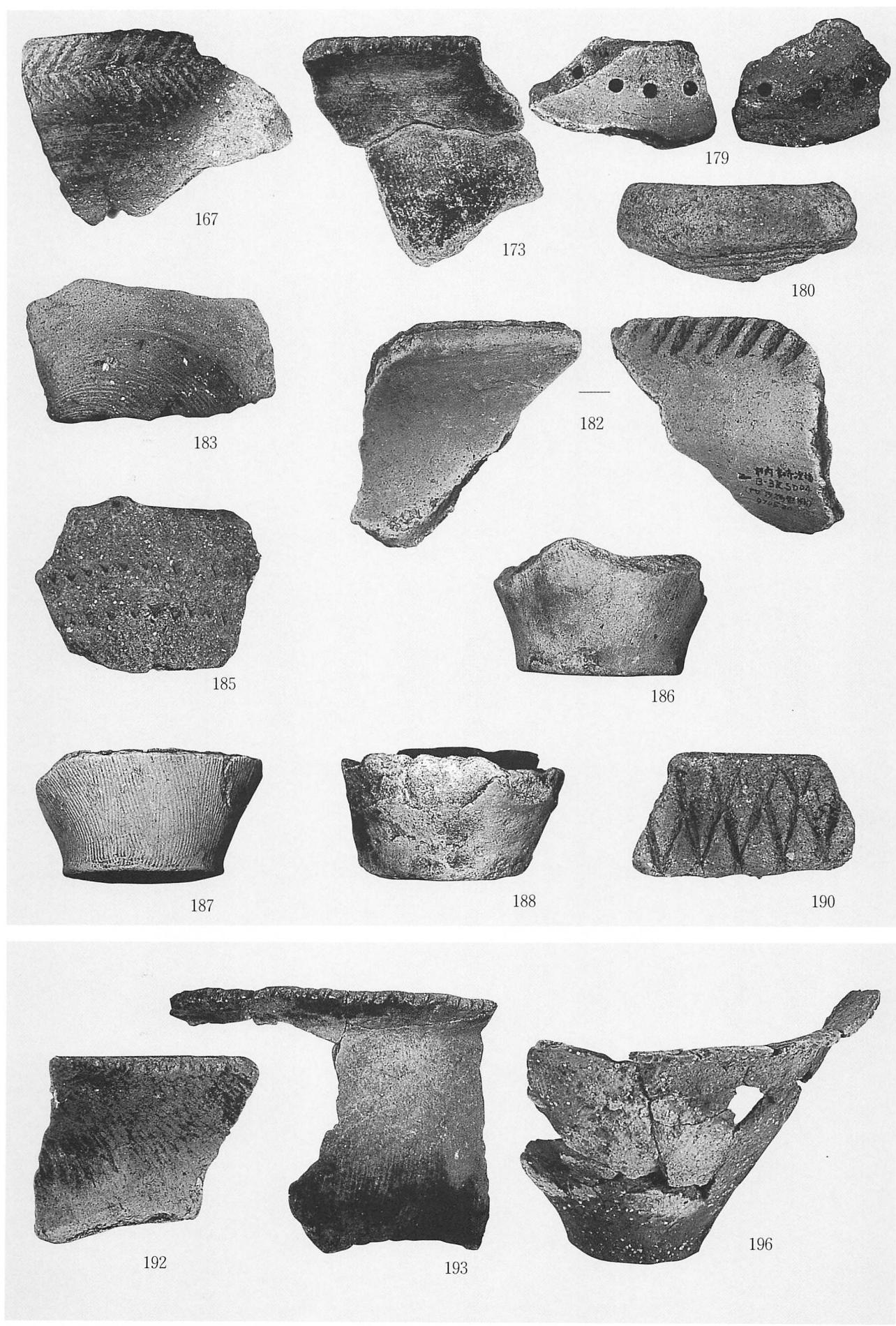


152

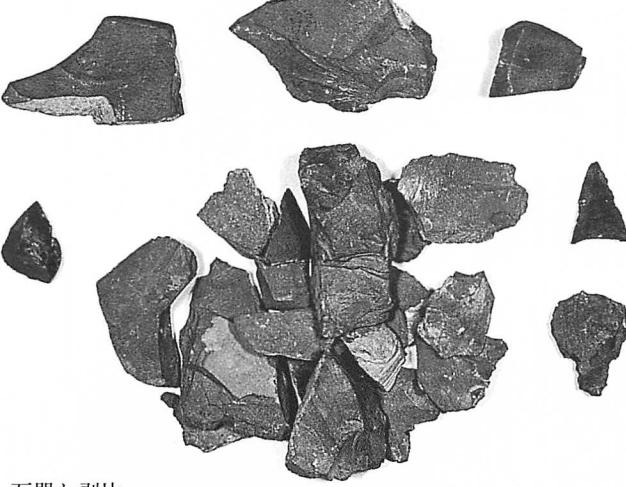
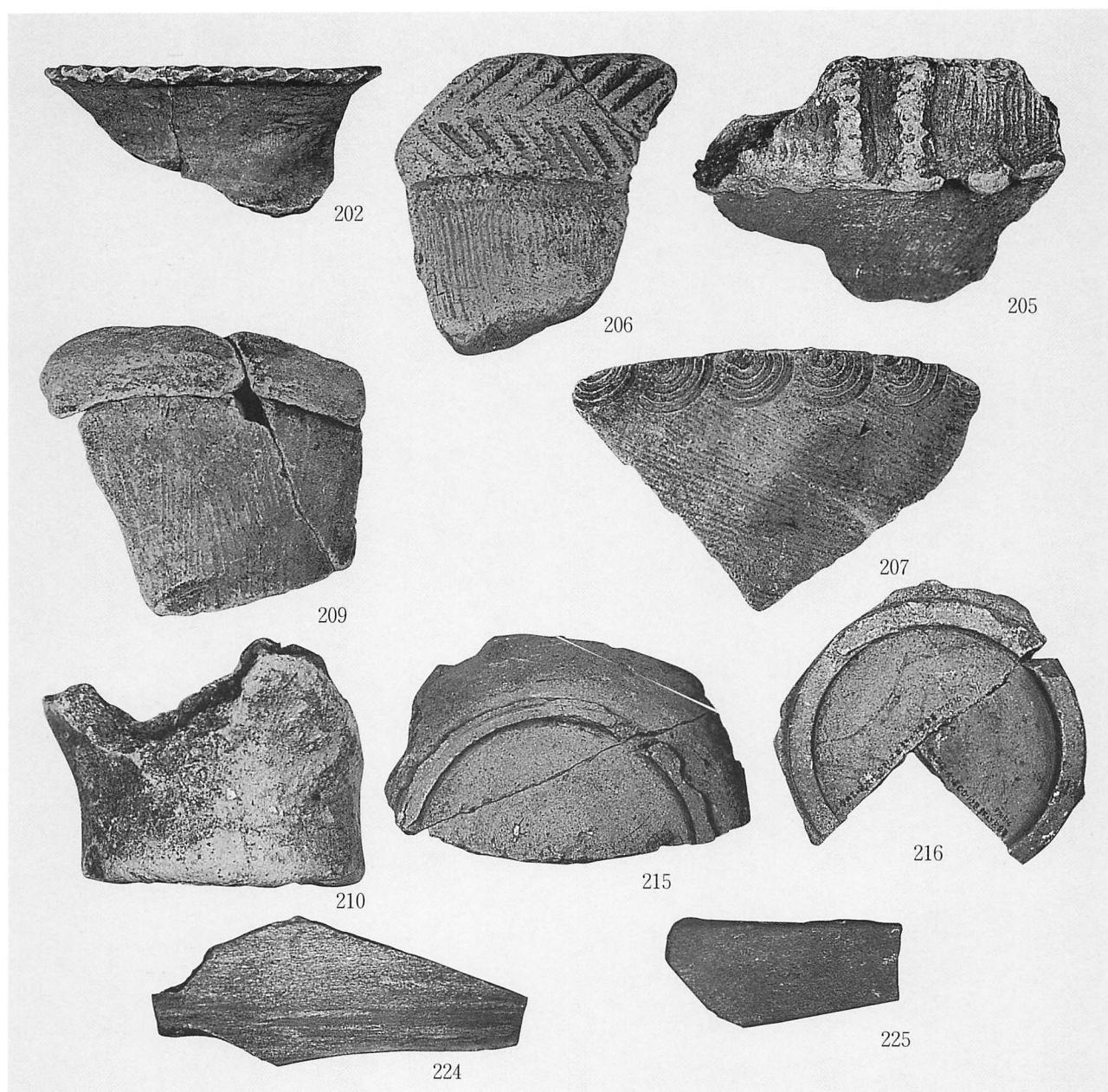


164





各 SD 出土遺物（上）、ピット出土遺物（下）



石器と剥片



骨片

その他の出土遺物

羽咋市内遺跡発掘調査報告
—住宅建設にともなう
吉崎・次場遺跡第16次
発掘調査報告書—

平成10年3月20日発行

編集・発行 石川県羽咋市教育委員会
石川県羽咋市旭町ア—200番地
〒925—0034
電話 (0767) 22—7195(代)
印 刷 能登印刷株式会社
石川県金沢市武蔵町7—10
